
果てしなく続く坂道の途中で

東野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果てしなく続く坂道の途中で

【Nコード】

N6377P

【作者名】

東野

【あらすじ】

かつて心と体の性別が一致しないためにアイデンティティに苦しんだ経験のある大学生の私は、気づいたら八十神高校の女子生徒になっていた。

せつかくてにいった理想の私を失い、再び私は女になってここにいます。どうして？なぜ？多くの疑問を抱えながら、私はペルソナ4の世界に生きていく。

ブログオトロラに投稿したものを加筆投稿しています。

第1話 へいこつせかいのていき

「いらっしゃーせー！」

駄目だ、何度聞いても吹き出してしまふ。コントローラの意味深な振動を感じながら、くくくつ、と私は肩をふるわせた。ニコニコ動画のとある実況プレイ動画がきっかけで、今まで全くしたことがなかったこのシリーズを買いにGEOに走って、早数ヶ月。攻略サイトも本も封印してやっとこさたどり着いたのは、ノーマルエンド。千枝に気が引けて他の女の子達との恋人フラグを全てへし折ったのはいい思い出だ。不思議なことに二週目となると自重できる自信はない。仕様なのだろうか、おそろしい。自然と6股を目標にしている私がいる。引継ができるとはいえ、また初対面の春から開始なのは寂しいが、勇気などのパロメータがすでに振り切れている主人公の誕生だ、まさしく番長と言うにふさわしい。今度こそ序盤で選択できなかった台詞を選んでやる、と言う意気込みがわいてくる。

それにしても、オス、というたった二文字で、あの堂島さんを引かせるとは一体どんな感じで返答したのか気になる、一週目は無難によりしくを選んだ私だった。

時計を見ると、もう八時だ。そろそろ支度をしなくては。カレンダーでセーブした私は、そのままテレビを切った。支度を済ませて、カギをかける。マンションを出る。その足で大学の講義棟

へ向かう。

確か3、4時間目の体育が休講のため、今日は午前中だけしか授業に出なくてもいい日程だ。一限目はともかく二限目はビデオ講義で感想を記入して終わりだったはず。ラッキーだな、と考えながら携帯をチェックすると昼飯の誘いが来ていたが、ゴメンと断る。今日はペルソナ4をやりたい気分なのだ。ただでさえ導入部が二時間を超える(3からのお約束らしいがあいにく私は未プレイだ)長編シナリオを一度こなした身としては、さっさと終わらせて二週目の特典を楽しみたい。科目名と教室を一応確認した私は、残念なことに友人が一人もかぶっていない授業を受けに向かった。

一限はあつというまだった。

休み時間中に一番奥の席を陣取る。英語の予習プリントを引っ張り出して、辞書を傍らに埋めていく。空き時間は意外と長い。この講義の先生は出席が早く、もう出席カードが回ってきた。在籍番号と名前を書いて隣に一席空けて座った男子学生(どの学部かも学年かももちろん名前も知らない)に回す。グループのようで、会話が聞こえてくる。ビデオ上映中にモンハンをする気らしい。お前らね。

真つ暗になった教室。おそらく受講者数は200前後。わりとみっちりしていて、肌寒くなってきたと言うのに、少々暑い。だから私と同じ列の窓を背にする誰かが、いくつかの窓を開けていて、カーテンが揺れるたびに光が漏れていた。先生のマイク越しの声に従って先に配られたプリントに名前などを記入しておく。ビデオ上映開始。

問題提起に対する自分なりの解答を書けらしい。ビデオの要

点をかいつまんで並べ立て、もっともらしい理論を繋げて、最初に考えた結論に持っていく。一度明るくなり、15分ほど時間が始まる。あと30分も授業があるが、どうやら残りは自由観覧らしい。テストにも出るとほのめかす発言が聞こえるが、私はさつきからうとうとしていたので、睡魔に勝てずにそのまま意識を飛ばした。

やはり、暖房器具を早々に押入から出すべきだったか、と反省した。だから朝早くに目が覚めて、ゲームをすることになるのだ。気をつけよう。自己完結した私は、思った。夢を見ていると自覚せざるを得ない状況下に置かれたとき、私は混乱するどころか冷静になる人間だったらしい。あまりにもシニールな夢だ。私は、一呼吸置いて辺りを見渡した。

夢を見ているにしては、あまりにも鮮明で、五感も冴え渡っていて、現実と見まごうばかりの心地がするが、だまされてはいけないなぜならば、私は今、ほんの数時間前に下ばかりのゲームの世界の教室に存在しているからだった。夢と呼ばずになんというのだろう。

私は、女子の制服を着ていた。あのスタイリッシュな制服だ。はは、と少しばかり笑いがこみ上げてくる。それとなく身体を触れてみる。やはり、そうか。私はかつて高校生時代に極めてプライバシー問題をかかえていたのだが、そこまで完全に再現しなくてもいいだろうに、変なところで現実主義なのは私が見ている夢だからだろう。ということは、病院に定期的に通院している、と言うことになるのだろうか。それとなくカバンをみると、やはりビニル袋が見えた。…あまりにもシニールすぎて閉口した。

教卓で説教を延々と話している諸岡先生（やはりあの奇抜すぎる外見と微塵も共感できない口調、発言自体は筋が通っており正

論にもかかわらずなぜか肯定したくない、あまりにも損している存在だ。もったいない）。私の隣はメガネをかけた男子生徒だった（文化祭の実行委員だった生徒のはずだ）。ちら、と見れば里中や天城、そして花村もいる。主人公はいない。それとなく髪を抜いてみる。黒だ。つまり、私イコール主人公ではない。

一体どうして私はこんな夢を見ているのだろうか。どうせなら主人公になって、みんなの中心にいたいというのに。どうしてわざわざ生徒Aになって傍観しなければいけないのだろうか。少しばかり不満だったが、仕方ない。まあ、いいだろう。それはそれでおもしろいではないか。どうせ夢なのだ。何時かは覚めて、忘れてしまうのだ。精一杯楽しもうじゃないか。そこまでの思考にいたるまで、あまり時間はたっていないかったらしい。

席替えをする、と委員長らしき女子生徒（おそらく授業開始持に号令をかけていた生徒だろう）が前に出て、ルーズリーフに番号を書いてハサミで切っているところだった。いつの間にか隣の席の男子生徒が、黒板に席と思われる を並べている。なるほど、男女混合にするのか。ろくに諸岡の話を聞いていなかった私だったが、周囲の発言や不満を総合すると、どうやらこれが最初で最後らしい。普通月1の頻度ではないのか。ゲーム中は全く疑問にもはさまなかったが、思えばこれも諸岡が嫌われる一員だったのか、と思うと納得だ。できれば花村達の近くがいい。こっそりと会話している分を聞ければ、それでも十分おいしだろう。委員長がやってきたので私は言われるままに紙を引き、番号を覚えてそこに名前を記入して別のかごに入れる。後で座席表を書けらしい。どのあたりだろう、と私は立ち上がると黒山の人だかりに近づく。ずっと探してく。そして、ふり返って、確認する。……もしかして、花村の隣だろうか。うわ。これはラッキーと言うべきなんだろうか、運が良かったといふべきなんだろうか、私はただ遠巻きに彼らの様子が確認できれば

それで十分満足だったのだが。むしろ巻き込まれたくない…夢だからそこまでの都合主義はさすがにないだろうが、むしろ夢だからこそあり得そうで怖い。なるべく不自然ないように、いこう。私はふう、とため息をついて、ご丁寧に高校時代愛用していたカバンを再現してくれたそれを片手に、花村の隣に向かった。

天城の隣にいるらしい男子生徒に、変わってくれとぶつぶつつぶやいている花村は、言わずもがな、却下されて口をとがらせていた。はあ、とことさらにため息をつかれる。私の印象をそのままに反映しているためか、不運が第一印象（何せ初登場で種なしの危機に瀕して、しかもテレビで膀胱炎というパンチ付きだ。仕方ない）。里中と天城は会話に夢中でこちらに気づいていない。会話の相手を失った花村は、大きく脱力して、ふてくされた様子で机に突っ伏していた。私は花村をなんだと思っているのだろうか、と小一時間考えたいと思う。さすがにもっと愛想良く何処かに行っていそうなのに。…よほどショックだったのだろうか。

「幸先わりいなあ」

「それはこちらの台詞だ。初対面のくせに、ずいぶんな言いようだな」

「うをつっ!!」

がばっ、と勢いよく後ろをふり返った花村は、ぎょっとした様子

でこちらを見上げる。気配や足音を忍ばせたせいだろうか、一瞬素の花村が覗いた気がする。驚きが治まってくると同時に、ちよつとだけ覗く本音。いらつとした顔。いきなり後ろに立つんじゃねーよ、なんだよこいつ、なんかム力つくな、失礼な奴。舌打ちすら聞こえてきそうだが、空気を読む能力に長け、しかもそれを悟らせないように周囲が抱いている印象を完璧に被って雰囲気すら貼り付けることができる花村がそんなへまをするはずもない。すぐにお調子者の花村の顔になる。全部わかつているが、あえて気づかない振りをする。今の花村にとってはそれが普通だろう。私も影村より花村の方が好きだ。どちらも彼だとしても。

「おいおいおーい、いきなりなんだよ、びつくりしたなあ！ つつーことは、もしかして お隣さん？ オレ、花村陽介ね、よろしく」

「ああ、よろしく。神薙 晃というんだ。仲良くしてくれると嬉しい」

「おう、もちろん。やっぱ初めてだよな？ 前のクラスじゃ見たことねーし」

「そうだな」

前のクラスなんて知らないが。話し相手ができて嬉しいのか、さっきの不快感は払拭されたらしい。私も同感だ。私は席に着席し、初対面をいいことに仕入れておくべき情報（もしうつかり口に滑らせて、先ほどのような表情をさせないためにも。おそらく花村は一瞬冷え込んでしまう自分をひどく嫌っているくらいがある。ペルソナ4のキャラ達はいずれも人間らしい影を持っている。私はいずれ

も大好きだ）を入手する。もちろん私についても公開しておく。ジユネス関連の先入観や負の感情を花村には持っていないと認識できたらしい。またあしたな、と言われ、手を振って別れるほどには仲良くなった。さて問題は、私の家はどこにあるか、と言うことである。

第2話 はじまりがきこえる

家が何処かわからない。私は途方に暮れた。

高校時代を忠実に再現した私のリュックは、携帯が入っていない。かつての母校は携帯の所持自体を禁止し、ばれた場合保護者を呼んで契約破棄を強いられるような厳格な規則がウリの高校で、たいていの生徒は携帯を持たないか持っていても高校に持っていないかのどちらかだった。私は後者で、もし持っていたとしても充電が面倒で平気で放置していた。携帯を頻繁に使うようになったのは、大学進学後に全ての個人情報暗記するのが面倒で全て登録してからだ。だから連絡を取るには公衆電話を探す必要があるが、残念ながら八十神高校に公衆電話はない。今は2011年、しかも携帯は認められていて、公衆電話自体は平成に入ってから減っている。大した理由がないのに、職員室に助けを求めても貸してはくれないだろう、家がわからないなんて話しても冗談だと一蹴されれば終わりで。

定期が出てきた。どうやら私はバス通のようだが、期限はなんと今日までである。生徒手帳を広げてみた。当時、私は少々個人的な問題を抱えていて、祖父母に預けられていた。ご丁寧に反映されていて、真っ先に祖父母の携帯番号、すぐしたはおそらく祖父母の家の電話番号が書いてあり、両親の携帯番号はなし、実家の固定番号しか書いていない。このときは今思えば、両親と弟とは少々距離を置くべき時期だったので、仕方ない。不仲というわけではないのだが、私も家族もあまりに近くにいるとじっくりこの問題について向き合えないし、受け入れられなかったらどうことはよくわかる。

なぜ祖父母が携帯をもっているのか。それは、専業農家の延長で直売所を園芸試験場と契約して行っていた祖父母の手伝いに駆り出されるからだ。この稲葉市に反映されるとしたらジュネスに地元の野菜として出荷されていることだろう。公衆電話さえわかれば連絡が取れそうだ。電話帳を広げれば「神薙」なんて珍しい名字だから一発でわかるだろうが、あいにく表示された集落名がわからないし、地図帳を広げるのも面倒だ。

私はまばらになり始めた教室を後にする。木造校舎はいいな、と思った。校舎をのんびり探索したいところだが、うちに帰れないと本気でしゃれにならない。ぶっちゃけ校舎内の詳細な場所などゲーム中はスキップを多用していたので覚えていない、だいたい特別教室なんて使わないし。いくら田舎とはいえ木造建築なんて校舎が残っているのはまず有り得ないだろう、戦後直後じゃあるまいし。耐震の問題で2006年あたりで全国の高校は改装を強いられ、鉄筋じゃない校舎は名物になってもいいレベルだ。ちなみに私の母校は私が二年生の時に改修工事が始まり、卒業式はプレハブ小屋というシニールさを強いられた。

げた箱が何処かわからない。たしか主人公は真ん中あたりにあつたはず、と私はずらりとならんだ木製のげた箱入れをきよるきよろと見回す。残念ながら出席番号なんて忘れた。どうやら男子と女子で別れているらしいげた箱の一角に、運動靴のつまさきとかか

でかかど「神薙」と書いているところがあつた。まごうことなき私のげた箱だ。名前をわかるところに書いておかないと平気で借りたり、盗んだりするバカが一人はいるのが田舎の高校である。たいてい一度は盗まれるとそれが友人でないかぎり二度と帰ってくることはない。履き替える。そして私は玄関を出た。

ソメイヨシノがきれいに咲いていた。はらはらはら、と舞っている。むしろ舞いすぎである。懐かしいなあ。まあかれこれ、うん年振りの高校だ。一度は社会人を経験し、もう一度大学に入り直した身としては、今更ながらコスプレしている気分である。やめとこう、恥ずかしくなってきた。無駄に時間を取られてここまでようやくたどり着いたためか、生徒の数はまばらである。ばいばい、と校舎前で別れたり、自転車小屋でしゃべっているこたちを見ると、いやでも自分の異様さを自覚する羽目になる。まるでキオクソウシツにでもなった気分だ、高校時代を再現するのなら、ただでさえ少なかつた私を受け入れてくれた友人達を出してくれてもいいだろうに。ああ、早く帰りたい。

何よりも、私の生物学的な性別を自覚させられる制服を、一瞬でも速く着替えてしまいたかつた。

「もしもし、お祖母ちゃん？おれだけど、今八十稲葉駅。ごめん、今日で定期切れるの忘れてた。買いに行きたいからさ、迎えよろしく。うん、えーっと、14800円、ああ、そう、3ヶ月定期。おう、じゃ、よろしく！」

八十稲葉駅は無人駅である。さいわい公衆電話はまだあつた。が

ちゃん、と受話器を切り、外に出る。三十分くらいだろうか、時計を見ながら私はベンチを探した。たしか早々に宿題が出されていて、花村と里中が絶叫したはずである。

トラックで定期を買い終えた私と祖母は、そのまま天城屋旅館に向かった。なんでだっけ？と忘れた振りをして聞いた私に、祖母は何も知らず教えてくれる。私の叔母（父の姉）は、八十神市特産の野菜を扱う専業農家に嫁いだらしい。そこのお姑さんは天城屋旅館のお手伝いさんとして働いていて、そのつてでときどき育てた野菜を出荷するそうである。ちなみに今回は、以前お裾分けしてもらったお刺身のお礼として、お花を届けにいくらしい。ろくに集落に済んでいるご近所の屋号を覚えてない私に、祖母はもっと付き合いを大事にしなければいけない、と笑って忠告した。

「今は忙しいみたいだし、倒れないといいけどねえ、女将さん。雪子ちゃんは確か同級生だったわね？なんか言ってた？」

「さあ？今日同じクラスだってわかっただけで、別に仲いいわけじゃねえしな。まあ、なんか里中としゃべってたけど、なんかつかれてたっぽい」

「まあ、毎日取材とかパパラッチとか大変だって、美保子さんいってたしねえ。それにしても、仲良かったのに、高校に入ってからすっかり距離置いちゃったわね、晃ちゃん」

私はこわばるのを感じた。そもそも私の中の思い出で、最も私という希有な存在を受け入れ、かつ親しくしてくれた友人は、旅館をそっくりそのままペンションに置き換えただけの天城の位置に

相当する。たまたま知り合い、自己紹介する中で縁を感じて、親しくなった経緯がある。つまり、この夢の世界では私を理解してくれた彼女は、存在しないということだ。天城がそのポジションのままならば、赤の他人のごとく花村との談笑にふけていた私を無視するはずがない。突然態度が変わった、と驚いたようなそぶりは微塵もなかっただけに、私は祖母の話が信じられなかった。どういう位置づけなのだろう、私という存在は。私は彼女と、そしてもう一人いる。入学初日に仲良くなった、男女かまわず気軽につき合える、里中と花村を足してわったようなもう一人の友人のつてを頼って、かろうじてクラスメイトたちと繋がっていた。……私は考えていた以上に、孤立していたようだ。

「仕方ないだろ。男に免疫ないっばいし、もう近づきずらい」

「晃ちゃんがそう言う態度だから、じゃないかしら？男の子だろうと女の子だろうと、ちゃんと話せば晃ちゃんのことわかってくれるわよ。勝手に門を閉じないの」

わかつていられるけれども、この世界での私が今どういった状況に置かれているのか、もう少し把握しないと身動きがとれない。わかつて、とこわばってしまった私の表情を、ぶっきらぼうに感じたのだろう祖母は、またぶーってしないの、と朗らかに笑った。

天城屋旅館は、想像以上に大きい。さすがは稲羽市で一番大きな

旅館である。やはりゲーム越しにみるより、実際に訪問してみた方が老舗の歴史が一目瞭然だ。車内で待つてゐるといったのだが、どうやら祖母は私が天城と会うかもしれないことを警戒していると勘違いしたらしい。運んでくれとばかりに花たばのはいったバケツを抱えて私は一緒に裏口の玄関まで同行する羽目になった。正直気まぐずで、私は直立不動である。

「あらら、神薙さん！いらっしやい」

「この前はあんな上等なお刺身ありがとうね、これ、お礼に。あとこれ、漬けて食べるとおいしいから、どうぞ」

ありがとう、どういたしましての応酬である。私はメンドクサイ社交辞令だとは思えないが、当人達はとても嬉しそうだ。私はどうぞ、となるべく目を合わせないようにしつつ、頭を下げるとビニル袋を女将さんに渡した。あらあら、と受け取った女将さんは番頭サンを呼んでいる。バケツから花をあげ、差し出されたバケツに移し替えていると、女将さんに声を掛けられてしまった。

「あら、もしかして晃ちゃんかしら？久しぶりねえ、大きくなつて」

「……どうも」

むろん初対面である。知りもしない幼少期の思い出を語り出され、無断で話の餌にされてしまい、ふたりの会話がヒートアップする。やはり端々では客人である例のアウンサーのストレスを発散したいらしい。女性のストレス発散はやはりおしゃべりらしい。私はますますいたたまれなくなり、苦笑している番頭サンに声を掛けた。トイレと適当にでっちあげ、私はお邪魔することにした。どうせあと30分は終わりそうもないだろう。

母屋と旅館は別である。当然ながら借りたのは、母屋の方。天城に会っていくか、と聞かれたが、私はすぐ帰るので、と断った。天城と私の関係がどうなっているのか、今日登校日で半日同じ教室にいただけではわからない。私は距離感に酷く敏感なタチである。ただのクラスメイトと化している天城とどれだけ親しかったのか、祖母との会話だけではわからない。小学校中学校と同じだったらしいが、天城は里中と中学校以来の付き合いのはずで、一番の親友同士であるはずだ。友達、と一概にいつても、当人達だけにしかわからない距離感というものがある。あいにく記憶までは継承されていないので、どう仲良くなってどう距離を取っていたのか私にはさっぱりなので、わかるまでは距離は取ったままの方がいいだろう。意外と学校生活の友人関係は、繊細で、複雑で、当人達にしかわからないことはたくさんあるのだ。

もし、私の個人的な問題が発端だったなら、と連想するだけで、身がすくんだ。ああ、私の高校生活は恵まれていたのだ、と今更ながらに実感する。そういうわけで、ろきよろ、と廊下を確認しながら玄関に向かう。不審者ではないが、正直天城には会いたくない。

私はちょうど母屋と旅館を繋ぐ通路にさしかかった。

中庭が見える通路にさしかかる。おそらく庭師が毎日整備しているのだろっ、立派な日本庭園だ。錦鯉が泳いでいる。暫し足を止め、見とれていた私は、遠くで祖母が呼んでいるので、返事をした。

そして、見納めに、ともう一度ふり返って、見てしまった。

中庭をはさんで、ちょうど向かい側。しかもぎりぎりの敷居とガラスの間。アナウンサーが酷く憤慨しながら人を呼んでいるのが、かすかに聞こえる。そして、そのそばで警察らしき若い男が、アナウンサーと激しく口論している様子を、私は見てしまった。何気ない風景だが、真相を知る私は怖くなって逃げた。だから知らなかった。私の走り去った後、私のいた方向をみつめて、意味深に笑う警察が居たことなど、知るはずもなかったのである。

第3話 わたしのしんしょく

今日の日程は、午前中は朝のいろいろな決め事会議の後、大掃除と中庭の草むしり。午後は一年生向けのオリエンテーションを中心に、部活動紹介や生徒会からの報告、春の地方予選に向けた応援会などの特別スケジュールが待っている。基本的に朝から体操服、ジャージ姿が許される。ささやかな気が休まる時だ。

バス通および電車通の学生は朝が早い。一時間に一本しかないロカルの弊害だ。私はあくびをかみ殺し、涙をぬぐう。ただいま、7時5分。35分間私は狭い公共バスにゆられることになる。一回500円。素晴らしく高い。そして15分かけて高校まで歩くことになる。

八十神高校は徹底して自由な校風らしい。なにせパーマも、髪の毛を染めるのも、化粧をするのも、スカートを短くするのも、指定外色の服を上から着ていても一切お咎め無しである。髪の毛を染めようものなら職員室に連行され、強制的に染色材をオトされ、保護者と呼ばれて三者面談行きだった高校自体とはえらい違いで驚いてしまう。髪の毛の色でも届けを出していなければ、基本的に疑われたものだ。少子化で私立に生徒を取られてしまうことへの危機感から、保護者や近所などの世間体をよくするために厳格な校則をしいた我が母校は、そのおかげがなかなか評判がよく、定員割れを起こすことは少なかったが、八十神高校は真逆の方針をとっているようである。地元とはいえ、生徒は高校を写す鏡である。普通、乱れている、荒れている、というイメージはマイナスにしかないと思うのだが、どうやらこの街は地元住民がわりと寛容的でありながら子供を母校へやりたがる保守的な土地柄らしい。進学率が半数以下というのもまた、珍しい。普通田舎の公立校は国公立大学への進学率を誇示したがるものである。方針が一切変更される気配がない

ということとは、すなわち閉鎖的なのだろう、いい意味で。なるほど、かのひとが事件の舞台に選んだ理由がわかる気がする。すばらしく、完結しているのだ。

本日二日目。学校に着いた頃には、8時ちょうどを指している。残念ながら特別日程の朝の朝礼は9時15分からである。仕方がないので私はさっさと教室に行くと、荷物をロッカーに放り込んで、職員室に向かう。かつての私が反映されているのなら、私はブラスバンド部であり、ホルンやチューバ、トロンボーンを兼ねていた。ブラスバンド部は、応援会はたいいてい体育館の隅っこで演奏をしながら、入場してくる選手達を歓迎することが決まっている。さっさとチューニングや練習を済ませないと。持ち運びもなかなか大変なはずだ。失礼します、と私は静かに職員室の扉を開けた。

「ああ、神薙、ちょっといいか」

諸岡先生に呼び止められる。ちょっとこい、と応接室に手招きされ、私は身構えた。職員室の奥にある応接室への生徒の呼び出しは、説教と相場が決まっている。しかも担任だ。何かしたつけ、と思いつつ私はうなずいて後に続いた。幸い他の先生方は数人しか来ていらっやらない。私は促されるままに、座った。

「お前をもつのは初めてだからな、すぐにも話さなきゃならんとおもったんだ。とりあえず、いろいろ聞きたいことがあるんだが、いいな？」

「はい」

「桂木先生（おそらく保健室の先生だろう）から資料や話は聞いているんだが、正直俺は理解できん。だが、一応教師としてはしつかりしようとは思っているから、正直に伝えてくれ」

「わかりました」

「まず、お前は、その……性同一性障害とかいう病気らしいな。それは、同性愛とは違うのか？ ジャージで授業に出席したいという要望が届いているが」

「違います。性同一性障害というのは、私がお母さんのお腹にいた頃、なんらかの原因でホルモンバランスが崩れて、身体が女なのに、脳を作る過程で男のホルモンが過剰に出されて、真逆になってしまったことが原因、と仮説されている病気なんです。原因は不明らしいですけど。私の場合、私は「男」ってはっきり自我があります。だから「女」が好きだから男役になろうとしている同性愛とは違います。たぶんその人達は自分が「女」だって自覚した上で同性を好きなんだと思います。……正直最近まで、私は身体は女だけど、男だから女を好きになるのは普通だけど、その人達はおかしいって思ってたこともありました。えっと、そういう訳で、できたらなんかの式以外はジャージで過ごしたいんです。スカート嫌なんです」

ふうむ、と諸岡先生は考え込んでしまう。性同一性障害は同性愛とはちがう、と確固たる線引きは主張したい人によってかわるようだし、もちろん同性愛を自覚していく中で性同一性障害だと診断されるケースもある。ココロと身体が一致しないという違和感が嫌悪感として表れることが症例としてあげられ、自己肯定がとても低くなり、自己嫌悪や否定にかられて、鬱病に陥る人も多いらしい。もちろん嫌悪の感じも個人差があり、我慢できる人は無自覚なままの場合もあるし、耐えきれない人は徹底的に拒絶して不登校にまで追いやられることもあるらしい。そもそも周囲にこの個人的な問題を話すかどうか、という大きな課題がある。とても複雑で繊細な問題だから、ゆっくり説明していくしかないだろう。

私の場合、幼少期から男っぽいと言われることは多く、女の子より男の子と遊んだり、話したりする方が好きだった。強烈に意識したのは、小学校・中学校で義務づけられた制服に強烈な抵抗感を覚

えたことにあると思う。どうしてか説明できないから、友達もクラスメイトも先生達にも納得させることなんてできず、わがまま、ととられ、孤立することもあった。家庭環境を問題視する人もいて、お母さんやお父さんには迷惑を掛けたと思う。お互いに散々ぶつかり合って、ずっとずっと苦しかった。私は追いつめられて、衝動的に自分を傷つけることがあって、心配したお祖母ちゃんにつれられて精神科の病院に駆け込んだのがきっかけだった。大学の先生を紹介されて、じっくり自分に向き合って、でた答えがこれなのだ。

「わかった。とりあえず、お前がすっかり受け止めてるってことはわかった。だがなあ、お前は今のところその説明を、同じクラスや部員の連中に話すほどの勇気はないんだろう」

「そう、ですね。正直、そこまでは、ちょっと」

「無理解と思うかもしれないが、この学校はあくまで公共だ。お前だけじゃない。たしかにお前は難しい問題を抱えてるかもしれないが、特別を求めるなら周囲を納得させるだけの環境が整ってないとダメだ。しっかり向き合って、話し合って見る。自分ばかり権利を主張しても、それだけじゃ難しい。まあ、こちらもそれなりに配慮はしてやるから、思い詰めることだけはするな」

「わかりました、ありがとうございます」

やはりダメだったようだ。白鐘はいいくせにどうして私は駄目なのだろう。理不尽さが際立ち心がざわざわとするが、感情に任せてぶつけた意見は周囲に納得は残さない。どうせ卒業したら二度と踏まない土地になるのだからことを荒立てるのも考えると多少落ち着いてくる。当時は思春期特有の自己顕示欲がない交ぜで苦労したものだ。頭を下げて応接室を出た。高校時代はあと3年だと我慢できるだけは落ち着いていたので耐えられるだろう。ふうと息を吐く。

「あ、神薙先輩、おはようございます」

「ん、ああ、おはよう」

えへへ、と節子、じゃなかった松永綾音が笑って近づいてきた。

よかったです、朝の準備の時間、間違ってるんじゃないかって心配で、と鍵を持ってほっとしているあたり、やはりどの高校もやる仕事は変わらないらしい。やはり私はブラスバンド部の金管楽器を担当しているようである。正直、一年生の入学体験は主人公と同時期のはずではないか、と考えていた私は少々面食らっていた。たまにいたのである。小中と希望の部活がなく、高校でようやく入れると意気込むあまり部活入部届けも出さずにやってきてしまう一年生が。この子のトロンボーンに掛ける思いはコミュニティをMAXにしたのでよく知っている。よっぽど好きなんだな、とほほえましい。

「まだ演奏できないのに、無理言っちゃってごめんなさい。でもやつぱり、早く手入れしてあげたくて」

「一人では大変だと思っていたから、ちょうどいい。いこう」

「はい！」

イスや楽譜をおく台を体育館まで運んだり、大量の楽器を運ぶために教室の机やイスをすべて隅に追いやったり、以外とその他の準備も忙しいのだ。もちろんチューニングやメトロノームの準備、楽器を暖めることだって大切だ。うん年振りに楽器に触れられる懐かしさで、私はすっかり忘れていた。夢と言うには、いささか長すぎるこの高校生活。あまりにもとけ込んでいる私という存在の違和感。私が気づかないまま、ゆつくりと、浸食は始まっていた。

委員と係が縦書きで並んでいる。めんどくせえなあ、とぼやいている花村は、部活に入っていないため、名前だけでも書いておかない

と諸岡先生がうるさいのだと愚痴っていた。やはり楽な委員は人気がある。あとでジャンケンするらしい。がんばれ、花村に里中。保険委員ならあの後輩君に会えるだろうか（残念ながらフラグをたてるのが遅すぎてランクが5止まりだった）。でも試験前なら普通図書館で主人公は一度くらい、友達を連れて勉強するだろうし、図書委員もおもしろいだろう。何故か1年周期の図書委員はなかなか手が上がらないので、私は手を挙げて置いた。へー、と花村は私を見るまじめなんだなあ、と感心されても困る。打算と煩惱に満ちているのだ。そういや、と小声で花村が聞いてきた。

「神薙、モロキンになんか呼び出しくらってみたいけど、大丈夫か？」

「呼び出し？相談にはのつてもらってたが、別に大丈夫だ」

「相談？あのモロキンが？ホントかよ」

「ああ、案外な。ところで、なんで知ってるんだ？」

「時間間違えて早く来ちまったんだよ。ほら、日直は日誌取りに行かなきゃだめだろ？職員室。だからついにと思ったら、お前見かけてさ。あ、やべ、はいはい！オレもジャンケン入ってるって！」

あわてて花村は教卓に直行する。よく見れば黒板の右端に、今日の日付と曜日、そして花村と誰か知らないモブの女子生徒の名前が書かれていた。そう言えばまだ私ともう一人、運動部以外という条件付きの図書委員は決まっていなかった。かつては私と親友がいつも定位置で、神薙さんたちでいいよね？と私たちを繋いでくれたリーダー格の女子生徒（あいにくもう名前は覚えていない）が尋ねに来てくれるような状況だった。まあ、だれでもいい。私はぼんやりと前を見ていた。花村と里中がなにやらこそそこそと相談している。どうやら水面下の交渉の末、里中がなるかわりに、すでに里中が決まっていた係に花村が移行するらしい。帰ってきた花村は上機嫌だった。

「花村、お礼にとっておきのDVDかしたげる！」

「え、いや、いいって！」

「いやいや、恩は必ず返すからさ」

「あーどーも」

カンフー映画のDVDなんていらなかったの！感想とか聞かれても困るから！と断り切れなかったらしく、私にぼそそと文句を聞いてくれとばかりに垂れ流してくる。十分おいしい。里中が一番好きな私としては、彼女の新たな一面がこうしてかいま見れるだけではないもの。自然と笑顔になる。着実にゲームまでのフラグは進行しつつある。マジかで見られるというのはいいものだ。

そろそろ図書委員をはじめとした、あぶれの空欄にジャンケンで負けたり、どれでもいいと意見を放置したりしていた人達が動き出す頃だ。天城さん、どこにする？と委員長。雪子、旅館の手伝いで忙しいからあんまり来れないもんね、と里中がフォローしていた。

そのとき、天城が振り返ったのでつられて私と花村も里中も視線がむく。素敵な思い付きをしたというにはあまりにも慎重に私と花村の会話を眺めていたらしく、そして勇気が必要だったのか微妙にテンパリながら天城が私をみつめた。なんだなんだと無意識のうちに身構えた私に、天城はみるみるうちに表情が勢いまかせに言い切ろうとしたのがつまずいたかのようにしりすばみになっていく。

「晃ちゃ、ううん、神薙さん。迷惑かけちゃうけど、いいかな？」

「……ど、どーぞ」

私の返答が素晴らしくきこなくなっただのは、仕方ないと御察し

頂きたい。まさかの名前呼び。しかも花村も里中也委員長も、そして何より私自身がちゃんづけされるなど、誰が予知できようか。天城はなんだか悲しそうな顔をしているが、記憶を継承していない私はさっぱり意味がわからない。微妙な沈黙が落ちた。え、えと天城さんは図書委員だね！と委員長は走り去り、え、神薙、お前天城と知り合いなの？と花村に素で聞かれ、里中にも同様の眼差し。ただどちらかというと天城に向いている気がする。私は逃げたい衝動に駆られたが、天城がじ、と見てくるので、私はゆっくりうなずいて笑みを貼り付けるしかなかった。張りぼてにもかかわらず、にっこりと嬉しそうに笑う天城が余計私のココロをえぐる。頼むから私の親友と同じような形容をしないでくれ。言いかけた叫びは、もちろん沈黙に沈む。里中と花村の質問攻めが天城に集中し、私はとりあえず一字一句彼女との設定に不備がでないよう、全霊を掛けて話を聞き、振る舞いを迅速に決めるしかなかったのである。

第4話　ともだちのともだちは？（里中千枝視点）

八十神高校は、屋上が解放されている極めて珍しい学校である。もちろん落下防止のフェンスはきちんと管理されており、千枝の記憶が正しければ入学したばかりの時点で新しくするための工事が行われたばかりだ。3つ上の近所のお姉さん（もう大学に行ってから見かけなくなった。やはり都会はいいのだろうか、と一抹の寂しさを覚える）から、屋上から見える景色と心地よさとそして食べる焼きそばパンについて力説されてきた千枝である。雪子とお弁当を囲むのは日常だが、入学当初からいち早く屋上という、中学時代では許されなかった領域へのあこがれが募っていたわけである。入学説明会で屋上について封鎖だといわれたときには、大いに落胆したものだ。

実際に屋上が解放されたのは、ゴールデンウィークが終わったすぐ翌日のことだったが、初めて駆け上がった扉の先は、一気に開けた空におおう！と笑顔だった。何もかもが新鮮に見えた時期だったことある。整備されたフェンスに合わせてアスファルトはきれいに掃除され、ペンキで塗りつぶされていた白は、汚れもない。五月晴れの空にうかぶ積乱雲のごとくキラキラと光り、それはそれは蒼い空によく映えていた。今も、きれいに雲ひとつない空が広がっている。あーあ、と千枝はため息をついた。おなかすいた。片手に箸がなければ、いうことはないのだが。くすり、と雪子が笑ってチリトリを持ってきた。

現在でも恰好のお昼スポットである。さすがに外履とくらべて、内履きはあまり汚くないが、外から桜の花や葉っぱ、埃がとんできて汚れてしまう。おかげでほかの学校と違って八十神高校では屋上も重点的な掃除場所となっている。

そう、まさに今のように。

箒で掃いて、ゴミを集め、ホースで水をまいてから磨き、しかも雑巾で拭くのである。管理している教師が真面目なため、不幸にも

千枝たちのクラスは大いに苦勞しそうである。生徒たちは勿論会話にいそしみながら、掃除をこなしていた。千枝も例にはもれず、こつそりと花びらを集めながら、委員長の視線をかくぐつて雪子に声をかけた。本当はうずうずしていたのだが、この話題を雪子も初めて同じクラスになった神薙さんもどうやら慎重なようである。あの会話で花村に説明を求められた神薙さんは、小中と同じだったと簡潔にいい、諸岡先生に呼ばれてから会話を離脱し、一定に距離を置いている。寂しそうに時折、反対側の方向で男子生徒たちと楽しそうに会話が弾んでいる神薙さん（どうやら女子より男子の方が話しやすいらしい。さつきまで委員長とも話していたようだし、交友関係は広そうだ）を見つめている。

「ねえ、雪子。神薙さんと仲良いの？ 晃ちゃん、なんて。名前で呼ぶって珍しいね」

「うん……えつと、その、何て言うのかな。仲良かったって言うか」

過去形である。雪子と千枝が知り合ったのは中学時代だが、雪子が捨て犬を抱えて公園で途方に暮れているところに声をかけたのがきっかけである。選んだ中学校が小学校時代の学区から微妙に外れたために友達がおらず、心細かった時期の出会いだ。もともと人見知りがあり、控えめな雪子はなかなか友達が少なかったため、お互い仲が良くなるのは早かった。高校に入って小学校時代の友人たちとも再会したが、やはり出来上がったグループの中には入りづらい。で、今に至るわけだが、千枝の記憶の中では、雪子名前を呼ぶほど仲がいいのは自分だけだったはずだ。それがほんのちよっぴりまわりへの優越があるのだが、彼女が現れたことで、うん？と心の中でもややもやがあったのだ。それもたった数秒だ。読んだ瞬間の神薙さんの一瞬驚いた反応、それを見て距離感を自覚して苗字にさんづけに直してしまったのを見てしまえば、それは嫉妬ではなく心配に変わる。たった一人の親友だ。悲しい顔をされては、やはり気になるのが友達というものであるう。

「なにかあった？」

うんと、と雪子は言いよどみ、

困ったように笑う。どこから話せばいいかな、と聞いてくる。こういうときの雪子は頭の中で話を組み立てて、千枝にわかりやすいよう要点をそろえて、かつ簡潔になるよう考えている途中だ。こういうときは、すっぱりと聞いてくる千枝の好奇心が、迷いを生む雪子を引っ張っている。バランスがいい。

ぼつりぼつり、と雪子は話し始めた。

げた箱を間違える。

「か」と「あ」は同じ高さの列にあり、名前を書く習慣のなかった雪子はたまたま同じサイズの靴だった神薙さんと間違えかけ、たまたま通りかかった神薙さんが「それおれの！」と怒ったのが出会いだという。おれ？と千枝は疑問符。

「うん、昔はすぐく男の子っぽかったの、晃ちゃん。小学校は制服がなかったんだけど、ずーっとジパンで、男の子みたいな恰好してて。髪の毛、極端に短くて。男の子に間違われるのが当たり前だったみたいだけど、うれしそうだったなあ。なんかね、千枝みたいに、いろいろ引っ張ってくれて、頼りにしてた、んだ」

「なんかイメージ違うね」

「うん」

変わっちゃった、と雪子はちらり、と掃除している神薙さんを見る。千枝の神薙さんのイメージはまさに相反している。なんか、頭良さそう、かつこいい、と第一印象で思った。初登校で本でも読んでいそうな感じだ。なにせ初対面が部活の応援大会のプラスバンド部でホルンを吹いていたのだ。千枝が尊敬するカンフーのような、スポーツマンとは違うかつこよさがある。それに加えて、花村と話しているのを見るあたり、冷静沈着で落ち着いた話し方。「私」で、真面目そうな調子、忘れていた宿題に頭を抱える花村に移させていたのだ、いい人なのだろう。しかも割と話しやすいような感じ。きつかけがあればなあ、とぼんやり考えていた矢先だった。そんな神薙さんが、あたしみたい？指さすと、うん、と雪子は言う。ちよっとだけショックをにじませる千枝である。竹で割ったような

性格と快活さをいいところ、といわれることが多いものの、ボーイツシユさを強調されるのは微妙になる。かわいいものが大好きなのだ。雪子と買物にいくたびに、おそろいなものを買うのだが、赤の対比はたいてい青や黄色、といった色になり、もちろん緑も好きなのだが学校に持つていくと「意外だね」といわれるのが億劫でいつもきまった色になってしまう。雪子にも求められているのだ、と自覚してしまうたびに、ちょっとだけテンションが下がってしまう。

「千枝？」

「ううん、何でもない。で、なにがあつたの？」 「中学校

つて、制服あるでしょ？ 晃ちゃん、卒業のころからなんか、少しね、男の子っぽい、って感じじゃなくて、本当に男の子って感じになつてきた気がするの。背も高くなつて、体格も良くなつて、声も低くなつて。中学校で、先生に呼び出されてたの」

「なんで？」

「入学式で、制服着てこなかったから」

「あら」

「なんか、制服着ると気分が悪くなるみたいでね、先生たちも困つてたんだけど、親御さんも原因が分からないっていつて。だんだん元気なくなっちゃつて、私も心配だつたんだけど、大丈夫つて言つて。そのうち、学校来なくなつて、入院しちゃつたまま、お婆さんの所に住むことになつたつて電話があつてね」

私、何もできなかったの、と雪子はいう。千枝は雪子、と呼ぶしかない。神薙さんの気持ちも雪子の気持ちもどちらもわかる気がする。どんどん元気がなくなつていく一番仲良しな友達を心配させたくない、という気持ちと、心配なのに言つてくれないことへの不満と不安、いえない気持ちを分かつてしまう齒がゆさの気持ち。あまりに近いがためにいえない気持ち。きつと千枝ならはつきりいうだろうに。なにがあつたのかはしらないけれど。いろいろと考えてしまううちにあーもー！となつて全部ぶつけてしまい、喧嘩になつてあとで後悔して、仲直りするパターンを千枝は思い描く。

（ああ、きつと雪子にとって神薙さんはあたしみたいだっと思ってたけど、きつと神薙さんは雪子みたいなんだ。似たもん同士だったから、仲良くなったんだ）

千枝は思った。

「夏休みに一回だけ、電話がかかってきたの。話したいことがあるって。大丈夫だったはずだから、OKしたの。商店街の神社で待ち合わせするって。でもね、その日はお手伝いさんの一人が風邪ひいちゃって大変なことになってたから、手伝ったの。気づいたのは留守電のときで、待ってるって。でも、もう時間もう一回かけ直したら、大丈夫だと思ったよ、って笑ってくれて、病気になっちゃったから大学病院に入院するっていう話だったって教えてくれたんだけど」

「そっか。だからあたし知らなかったんだ」

「うん。……でもね、そのせいだと思うんだ。初めはときどき電話くれてたんだけど、私も部活が忙しくてなかなか時間が合わなくなつて。気付いたら、晃ちゃん、全然電話かけてくれなくなっちゃった。あの留守電の時、晃ちゃんの声、泣いてた気がするの。なんか言わなきゃいけないって感じだったのに私、約束破っちゃったから結局打ち明けてくれなかったんだと思う。もしかしたら、病気のことで、詳しく教えてくれるつもりじゃなかったかなあ、って」

謝りたいんだけど、ちょっと難しいね、と悲しそうに雪子は笑う。そんなことない！と思わず千枝はさえぎった。ぽかんとしている雪子に、私が何とかしてあげなくちゃいけないじゃない！晃ちゃ、じゃなかった、神薙さんも雪子も悪くない。どっちも一生懸命お互いに考えてたのに、タイミングが悪かったただけもん、と奮い立つ。

「雪子も神薙さんも悪くないよ。きつとタイミングと時期が悪かったただけでしょ？大丈夫、また仲良くなれるよ、雪子」

「……千枝」

「大丈夫、あたしにまかせといて！」

「……ありがとう、千枝」

あたしたち友達でしょ？当たり前じゃない。千枝はにっこりと笑った。チャイムが鳴ったのは、数分後のことである。

ともだちのともだちはともだちっていうじゃん。雪子が心配抱えてるなら一緒に抱えてあげるのが親友ってもんじゃない。問題解決に協力するのが当たり前でしょ。一肌脱いであげるよ！心配なんていらないよ！だってあたしがついてるんだから！だからあたしが頑張らなきゃね。雪子のこと一番にわかってあげてるのは他でもないあたしなんだから。だからだからだから。

じゃま、しないで。

ともだちのともだちはともだちなんだから！

第5話 わっかのさそい

「神薙、明日の苺と若菜とえっと……」

「榎茸か？タケノコか？」

「タケノコな、八時半のやつ八時に変更してくれってお願いできねーか？なんかお前んち誰もいないみたいだって親父からメールきてんだけどさ」

「八時に変更？確か明日は給食センターの搬入と直売所の当番が重なるぞ？一応メールするけど、最悪無理かもしれないな」

「なんか新しい家電製品の運搬の関係でこむんだってよ。ごめんな」

「いや気にするな」

私は祖父母にメールを送る。時々あの人たちは携帯電話の携帯を忘れて自宅に置き去りにするから、返ってこなければ直接ビニルハウス園芸場に足を運ぶ他あるまい。携帯しなければただの固定電話だと指摘しても治らなければ意味はない。どの世界でものんびりとした祖父母の人柄は変わらないらしい。密かに私はためいきをついた。私はすでに花村と携帯の赤外線通信はすませてある。ちなみにダイレクトメールは登録外のスパムを遮断できる方法を教えてやるうかと思ったが、花村は都会時代のクラスメイトたちとの関係が切れていることを自覚したくないことを直前で思い出したがゆえの成

り行きだったことは秘密だ。

八十稲羽市は田舎にありがちの食育を目指す地域である。食育とは自分達の町で育った野菜や果実、特産物を食べよう、もつとよく知ろうという試みのことだ。祖父母も直売所の運営にあたって、タイミングよく八十稲羽市の政策に合致した展開を望めたのでいまにいたる。小中学生向けに話をしたり、田んぼを貸して無農薬栽培させたりといった感じだ。他にも給食センターのラインにのせてもらったり、ジュネスに地元と宣伝して売ってもらったりしている。今の時代、ただ生産して市場に出すだけではこの農家もやっていけない。海外からどんな安い製品が入ってくる以上、安全性とか新鮮さとか武器にするしかないのだ。法人化しないと金をくれないと市がいつている以上、なにもしないと日本の九割の農業は死滅する。厳しい話、うまく立ち回れるものがやっていけるのだ。ゲーム中ではジュネスを敵視する人たちがいたことは事実だし、実際に大型のショッピングセンターの誘致にさらされた商店街や自営業はあんな感じだ。しかしながら、ジュネスの恩恵にあずかっている人たちもいるのである。だから田舎の人間関係は複雑なのだ。だから一辺倒になってはいけない、と遠回しに私は敵じゃないアピールをしたのだが、花村に何処まで伝わったかは不明である。難しい話すんなあ、お前と苦笑いされたのはいうまでもない。

「……………お前、すごいよな」

開口一番、ジュネスという言葉がなかった初対面の挨拶は、私が考えていた以上に花村にとっては衝撃だったらしい。もともとコミュニティーを早々にMAXにして、六月から絶賛放置だった私は忘れていたが、花村は本来高校生が知らなくていいであろう田舎特有

の人間関係の閉鎖さと結束さ、どろりとしたしがらみを見せられていて辟易している節がある。田舎生まれ育ちの人間はある程度受け流す、気にしない図太い神経がある程度育まれる傾向にある。むろん私のように。だが、やはり都会からきた花村には慣れない部分が多いのだろう。一度殴りあいをしたのだ、花村の心情はある程度わかるが、初対面だった花村が知るはずもない。ジュネスと契約している農家の娘（正直ぐさりとくる）だとしての後の花村は、なるほどと勝手に勘違いしてますます気兼ねない。愚痴り相手と化している。一度コロッケ屋にも遊びに行ったが、さすがに主人公の相棒役をとるのはまずいのでそれきりだ。実際この時期は農作業が忙しいので仕方ないが。

「家電製品？テレビか？」

「もうすぐ七月だろ？だから、な。察してくれ」

「がんばれ。そうだ、惣菜買うついでに、店長さんにうちの携帯番号とか教えようか？」

「おお！さっすが神薙、頼りになるな！じゃあ一緒に行くか」

「ああ」

私は携帯を見る。やはり一通も返っていない。たしか今日は法事があって帰りが遅いと祖母がいつていたはずだ。惣菜でもかってかえろうかと立ち上がる。がたがたとせわしない音が響く。生徒の目線がいく。私たちも前を見た。マナーモードらしい天城の携帯が鳴っている。電話らしい。恥ずかしそうに教室から出ていった天城がしばらくして血相変えて帰ってきた。どうしたの、と心配そうな里中に天城がわたわたとした様子で鞆に荷物を積みながら小声

でいう。あんまり大声で言えないらしい。

「ち、千枝ごめん！私、帰るね！」

「うん、早く帰ったほうがいいよ、雪子！ばいばい」

「うん、またあした！」

天城が血相かえて教室から飛び出していく。心配そうに見送った里中と私は目が合う。掃除の時間からちらちらと視線は感じていたものの、今度はしっかりと覚悟を決めたように、なぜかひどく私がないとかしななければいけないという焦燥感と義務感で真面目な顔をしている。かつて私がよくした表情だ。天城に關してはおそらく天城のお母さんが過労とアウンサーの心ない辛辣な言葉に耐えられず倒れたのだろう。天城とかつて仲良かったことが判明したが、天城は私の親友だった彼女ではないからどんな毎日を過ごしてきたかわからない。どうせよというのだ。心配だが、どうしようもない。帰ったら祖母に聞いてみようと思っていると、里中が近づいてくる。私と天城の關係に気づいてからこの調子なのを見るともしかして嫉妬されているのだろうか。このときの里中は天城との親友であることに愉悦と劣等感、互いに依存と複雑な關係を築いている。私は限りなく異物だろう。

「なになに、ジュネスいくの？」

「げっ、里中！別に食いに行くわけじゃねーよ」

「わかってるって、花村には愛しのさ」

「里中！べ、別にそんなんじゃないよ。それにわざわざ今言わなくったって！」

「じゃあアタシが交じってもいいってこと、そーよね？ね、いいよね、神薙さん」

あれ？少々肩透かしを食らった気分だ。里中は快活な笑みを浮かべて私の様子をうかがっている。てっきり天城経由で何かしら接触すると思っていたのだが。里中は策略とか計画とかには無縁に正々堂々としているイメージがあるのに。暫し考えてから遅れていいよと肯定した私に、なぜか花村があわてている。

「マジかよ、里中くるのか」

「なーんで嫌そうな顔するわけ？ははーん、そっか花村、さっきから神薙さんと話してると思ったたらそういうわけ？お邪魔しちゃった？」

「ちげーよ！里中が来ると必ずなんかおごらなきゃいけないだろ。まだバイト代入ってないんだよ。神薙はんなことしないからいいんだよ」

「しっつれいねー、アタシだつて限度は弁えるってば」

「だーもう、仕方ないな！」

「あはは！そーこなくっちゃね！ねえ、ゲーセン行こうよ」

里中が恋人だった私には願ってもない。花村はいやそうな顔をしていたが、里中は行こうよ、と手招きするので先を急いだ。両手に

花なのに何失礼な顔してんだかと笑う里中に隠れてぼそりと花村が私に、どこに乙女がいるんだよ、なあと同意を求めてくる。けりが炸裂するのは御免だったので、私は直ちに背後で聞き耳をたてている里中に花村を密告した。

あーおもしろかったね、と里中が伸びをする。だーもう、小銭せびりやがつて！とぼやく花村がつま先を踏まれて顔をひきつらせる。私はくすりと笑った。この二人は本当にいい友人同士だ。里中狙いの一週目は、完二の調査で里中をとられ、嫉妬のあまり舌打ちしたのもいい思い出である。花村はずっと先輩一途だ、余計な御世話という奴だった。むしろ敵は一条だった。じゃあな、と花村と別れる。惣菜を買いたい、といったところ、じゃあアタシもなんか買っとう、と笑う。エスカレータに乗り込んだ。

「ねえ、神薙さん」

「うん？」

「あのさ、今度は雪子も一緒にこない？おせっかいだとは思うんだけど、アタシ、雪子も神薙さんと一緒にどっか出かけてみたいん

だ」

そつきたか。まさかの時間差攻撃に正直舌を巻く。

「いいと思う、な。たぶん」

「ほんと？」

「うん、ありがとう。どう天城さんにこえかけていいかわからなくて困ってたんだ」

「そつか、あはは。よかった、本当に神薙さんと雪子って似てるよね。仲良くなれそうでうれしいよ、アタシ」

「そつか、な？」

「うんうん、そつだ、ならさ、雪って呼んだげてよ神薙さん。雪子、晃ちゃんって呼びたがってたから、喜ぶよきつと！ついでにアタシも呼んでいいかな？」

「ちゃんづけ、か。呼び捨てじゃダメか、な？」

「アタシはいいよ、なら千枝ってよんでね」

「わかった、千枝」

何処まで言葉を崩していいかわからないが、乗っかってしまった方が無難だろう。ようやくココロのなかの呼び名と呼称が一致して私は密かに安堵した。

第6話 おそろいびより

例のアナウンサーのお客さんのトラブルは、どうにか收拾がつき雪子は無事に登校できている。あのアナウンサーが毎日苛立ち、そして当たり散らしている様子は目に余るし、みないきり立っているものの、状況が状況だけに旅館は細心の注意を払い、神経を尖らせていた。周囲や世間からの好奇、格好の餌食をものにしようと狙っているマス・メディアから逃れようと必死なのだろう、とはある程度予測できるところだ。だが、それだけだ。母が旅館にアナウンサーを受け入れた理由が雪子は皆目見当がつかない。彼女の地元がここだから、彼女の家族に馴染みがあるから、なのか、母は口を割らない。複雑な心境は予想できるものの、雪子は疑問を抱えながら旅館の手伝いをするしかない。アナウンサーのスキヤンダルなんて、それこそ小説やドラマの世界だ、その程度の知識では計れる心境など高が知れている。未だに男の子といる自分すら想像できない雪子にはどうもわからない世界である。だから世間の関心が納まるまでお客さんは居続けるだろうし、母の言うとおり旅館としての勤めを果たすだけだ。

というわけで、目下彼女の悩みは、たまたまとはいえ、ふたたび出会ったかつての親友であるわけで。千枝が仲直りのけんびきを買って出てくれたとはいえど、正直まだ心の整理がついていない。部活にいったであろう晃を見届けて、どうする？と千枝が聞いてくる。せっかく同じ図書委員になれたのだから、そのときにでも、と言葉を濁す雪子に千枝がすかさず来月まで待つのか指摘した。

「実はさ、雪子。昨日ね、花村とジュネスにいくとこ捕まえて、アタシも行っちゃった、ゴメンね」

「えっ、晃ちゃん？」

「うん、なかなか二人きりで話すチャンスがなくてさ、二人とも帰っちゃいそうだったから勢いで」

ゴメンねと手を合わせてくる千枝に雪子はただただ驚くばかりで二の句が紡げない。なんという行動力だろう、と幾度も千枝の即決さと行動力が眩しく映ったものだが、今回は際立っている。事情を証してから昨日の今日なのに、だ。雪子はすぐにでも、と昨日散々急かした千枝に首を振り、結局最後まで引き止めたのだが、待つてはくれなかったようだ。千枝に話したことに気付いただろう雪子思い、雪子は怖くなる。

晃は「私」と「俺」を使い分ける子だった。年齢があがるにつれて、学校で先生に注意されたり、反省文を書かされたり、女の子らしくないと親御さんに怒られたりしはじめた晃は、しだいに「私」を使いはじめた。雪子の前ではずっと変わらず「俺」であり続けた晃は、「私」の晃は違っていた。昨日の晃は「私」だった。でもすっかり花村さんと打ち解けていたあの晃は雪子の知る晃であり、スカートをはく彼女は雪子の知る晃よりもずっと大人に見えた。雪子の知る晃ではなくなっていた。沈黙する雪子に、千枝は肩を叩いた。

「心配のしすぎだって、雪子。向こうもどうやって雪子と話したらいいか困ってただけみたいだったしさ。ありがとっていわれたよ」

「本当に？」

「うん、今度は雪子も一緒についていったら、いいよつて。少なくとも、雪子がきらいってわけじゃなさそうだし、怒ってるわけじゃなさそうだったよ?」

「そうか、なあ」

雪子は回想する。夏休みのあの日、久々の親友の電話に雪子はいれしくなつてすぐに約束を承諾した。一時に商店街の神社の境内で待っているという彼女に、雪子はいつものように遊ぶのだとばかり思っていた。体調を崩し学校を休みがちとはいえ、雪子と晃は相変わらず遊びに出かけていたからである。だがお手伝いさんが急な用事でこれなくなり、中学進学後からしばしば旅館の手伝いをしはじめていた雪子は母に声をかけられた。まだ十時だから大丈夫だろうと思っていたのが、ダメだった。昼頃から突然の通り雨でますます忙しくなる家の用事、一区切りついたときにはすでに三時を回っていた。雪子は真つ青になり電話に走ると、公衆電話から二回連絡が入っていた。一度目は待つてるという連絡、2件目は忙しいのかと雪子を心配し、なぜ呼び出したのか簡単に説明されていた。難しい病気だから大きな病院に入院すること、引越すこと、会えなくなること。あの日ほど旅館の娘としてまわりの期待に答えようと、頑張りすぎた自分を責めた日はなかった。電話をかけ必死に謝る雪子に晃は「だろうと思つたよ」と笑つて許してくれたが今思えば旅館を優先させる自分が嫌になつたんじゃないかとも思えてしまう。昨日のように、まるで初対面のような対応をされると、彼女のなかではすでに雪子はすでに失われた関係なのだと自覚させられたばかりなのに。

晃が雪子と話したいのに話せない、ととれる千枝の発言は雪子を困惑させる。

「雪ってよんだげてって頼んどいたよ。なんか照れてたけどさ」

「ち、千枝？」

「晃ちゃんでもいいって。昨日はさ、まさか同じクラスだとは思わなくてテンパっただけだっていつてたよ？」

「でも、なんで、なら、話し掛けてくれないの？おかしいよ」

「ああーそれね」

「？」

「雪子、男の子苦手でしょ？今の晃は確かに花村とつるんでるときには、ほとんど男の子。みたいってレベルじゃないよ。花村の下ネタトークについてけるとかすごいもん。だから、じゃない？」

「遠慮させちゃったのかな？」

「雪子は晃のこと変わったっていつてるけど、きつと晃にとってもどこかかわってるんだよ、五年でしょ？別人みたいに思えちゃってるだけだよ、きつと」

大丈夫、と笑う千枝に若干の違和感。なぜ神薙さんから晃に呼び方がかわっているのだろう。あ、昨日ね、話の成り行きで、と千枝は補足する。雪子は複雑な心境になる。まるで千枝と晃が自分をおいてどんどん仲良くなっているようだ。

「アタシもちゃんづけにしようかと思ったら、断られちゃった。

雪子専用みたい」

「え？」

「あはは、さーて、早速だけどね、雪子。今日は職員会議で部活

は五時半までって知ってる？」

「うん」

「というわけでさ、一応約束はしちゃってます。はい、許可はもらってるから、雪子にも送るね」

「え、え、えええっ?!」

取り上げられた携帯に赤外線で晃のデータがやってくる。出かけるよ、と千枝は宣言した。雪子はたまらず悲鳴をあげる。悪戯が成功したように千枝は笑う。時計は五時を回っている。

晃は玄関で二人を待っていた。千枝がやつほー、と手を振ると遠慮がちに軽く晃は振り返す。雪子は遠慮がちに笑った。

「ご、ごめんね、千枝が急に」

「アタシが晃呼びになったから、嫉妬したんだよね、雪子？」

「え、あ、もう、千枝っ!」

「嫉妬？」

「あ、晃ちゃんは知らなくていいよ!いこう!」

「雪子ったら、男の子に対する態度になっちゃってるよ」
「？」

「ほら、晃、おもしろいから、早くよんだげてよ」

「あ、ああ、うん。雪、どこにいくんだ？」

「え、あ、と、ジュネスにいくんだよね?千枝」

「うん。新しくインテリアのテナントが入ったって花村行ってた

でしょ？せつかくだからいこうよ」

晃はわかったとうなずいた。雪子は笑顔になるのがわかる。五年間のわだかまりが少しだけ溶けた気がしたのだ。

「ほら、い

こいこ！」

よかった、と千枝は胸をなでおろす。雪子は最後までまごまごしていたものの、どうやら晃が「雪」呼びしたのが効果てきめんだっらしく、少しずつではあるが、素の自分を出し始めている。雪子の表面上、というと聞こえは悪いかもしれない、どちらも雪子なのだから。とりあえず、はたから見た印象と、隠しているわけではないけれども、なかなかお目にかかれない素の部分は結構なギャップがあるのだが、さすがは晃、まったく物おじしていない。ちら、と視線が合い、ごめん、ありがとう、と声にならない感謝を向けられ、千枝はあつたかくなる。雪子以外の女の子を交えてジュネスに行くのは初めてかもしれない、とぼんやり千枝は考える。

これで、いいんだよね、とはいいいながら、千枝は心の中でぐるぐるしていた。昨日から覚え始めた胸の痛みは、肥大していくばかりである。正しいことをしているのに、間違っていないのになんで心が痛いんだろう。苦しいんだろう。つらいんだろう。千枝はこっそり雪子と晃を見る。やっぱり晃はまだ雪子との距離感を測りかねているのか、花村たちとゲーセンに行った時よりも言葉の崩し方が中途半端で、どこか硬い。まだまだバックアップはあるかなあ、と考察。余計な御世話かもしれないが、今のところ咎めるような眼差しはなし、雪子はむしろホッとしているともいえる結果オーライ、だ。かつての親友というのに、友達の友達ポジションの千枝の方が話題が弾むのはいただけない。うーむ、と千枝は二人と会話を交わしながら、考える。なんてややこしい関係図なのだろう！頭がパンクしそうだ。

わかってはいる。その

根本的な原因は、千枝の場合は、嫉妬だ。どうしようもない嫉妬だ。今まで雪子が頼ってくれるのは、その自分を見せてくれる一番の親友は千枝だけだった。今、その世界が揺らいでいる。危機である。いつそのときらいになれたら楽なのだろうが、千枝はさらに苦悩する。できるわけないじゃん、何のためにアタシが行動おこしたとおもってんのよ。晃は晃、いい子だもん。一緒にゲーセンを回ったとき、花村と同じくノリがよくて、しかもこちらを気遣ってくれると感じるときが節々にあった。雪子が親友に選んだ理由がわかるのだ。とても傍にいろのが楽なのだ。しかも、どこか不器用で慎重で、自分ではなくまわりの距離感を常に気にしているところが雪子と重なる。思ったとおり、晃は雪子と本質がよく似ている。嫌いになるほぅが無理なのだ。千枝はこっそりため息をついた。ま、いっか。だからって雪子とあたしの仲が悪くなるわけじゃないんだし、ね。

いまジュネスで新しく入ったばかりのアクセサリーショップ（しかも近隣ではみない！）でめばしいものはないか、三人で回っている。どれにする？と雪子とあれこれ目移り（お菓子売場はあとで！）して、決まらない。雪子はチェックのぬいぐるみか、赤いスカーフをまいたくまのストラップで悩んでいる。こっちは、と棚から別のをとった千枝はふと気付く。あれ、晃とここに着てから話したっけ？まわりを見渡すと、いないことに気付く。ばかなにやってんの、アタシ！雪子と晃の仲を取り持つために誘ったのに！

「雪子、晃は？」

「晃ちゃん？ああ、たぶん、ほらいた。お菓子コーナーだよ。昔

からこういうの苦手だし」

「あ、そうなの？言ってくれたらいいのに」

「あれ？千枝、聞いてなかった？」

「え、晃いつてたっけ？あはは、ごめんおなかすいちゃってさー。そーだ、アタシも行ってくるよ。雪子もどお？」

「ふふ、千枝ったら。私はおなかすいてないし、いいよ。まだ悩んでるんだ、行ってきた」

「アタシに至っては目移りしちゃって、全然だけどネ！そーだ、ちよっと待ってて、つれてくるよ」

「千枝？」

30分後、ビニル袋を提げた二人がやってきた。

「私、興味ないし、せつかくだから二人で楽しんだらどうだ？」

晃は困ったように笑う。若干居心地悪そうな様子に、千枝はこちらの幼稚な感情を読み取られてしまったかとひやひやした。今まで雪子が頼ってくれるのは、その自分を見せてくれる一番の親友は千枝だけだった。今、その世界が揺らいでいる。危機である。いつそのときらいになれば楽なのだろうが、千枝はさらに苦悩する。できるわけないじゃん、何のためにアタシが行動おこしたとおもってんのよ。晃は晃、いい子だもん。

「晃ちゃん？ああ、たぶん、ほらいた。お菓子コーナーだよ。昔なじみとはいえ、今、雪子と最も距離が近く親友は千枝である。か

つてのポジションの千枝が仲を取り持つという奇妙な展開、正直千枝も、うん？と思うところはあったものの順調なような思う。だが、晃はどう思うのか正直考えてはいなかった。なのに勝手に嫉妬してイライラしてなにやってんだろ。頭が冷えた千枝は、まあまあ、と雪子のところに戻す。

「こういうのは、どう？缶バツジ」

「そっか、これなら晃ちゃんも大丈夫？」

「うーん、そうだな」

わりと乗り気だ。よかった、と千枝は息を吐いた。千枝は決まった？と雪子に促され、はっとする。

千枝の先にはピンク色のアミグルミ。かわいい、と目に留まったものの、何気ない口調で、めずらしいねとか意外だねとかいわれるのが怖い。雪子とおそろいにしようか、と視線を移すと、晃が千枝の身長では届かない棚のそれをとったかと思うと千枝に差し出した。

「え？」

「あれ？ちがうのか？悪い、勘違いみたいだ」

「いや、その」

千枝は顔が赤くなる。見られていたらしい。あ、かわいいね、と雪子が笑う。

「か、かわいいけどさ、ちょっとアタシのキャラじゃないかなー
って」

「そうか？昨日も似たようなやつクレーンで欲しがってた感じがしたけど」

「えーっと」

「似合うだろ、女の子なんだから」

え？君も女の子だよね？とつぶやくと、晃は苦笑いした。ますます赤くなるのを感じる。なんでときどきしてんだ、アタシ！晃は女の子！女の子！そりゃ男の子みたいだし、実際に男の子にいわれたら、そりゃうれしいだろうけどさ、晃は男の子！必死に暗示をかける。ときめいた自分がわからない。千枝はなかなか女の子扱いされず、心のどこかで雪子をうらやましく思う自分がいる。だが率直に女の子扱いされるのにもまた、なれてはいない。千枝は言葉を濁しつつ、なら買おうかなあ、とぼやいた。二人のやりとりを見ていた雪子が、小さく持っていたカバンをもつ手が白くなる。少しだけ、うつむいた。晃が振り向く。

「千枝と雪は、おそろい、とか買ったりはしないのか？」

「え、あ、うん、たまに買うよ。この前はシャープペンだったっけ？」

千枝「そうそう、四つ葉屋でかわいいのがあってね。そーだ、雪子もこれ、買う？」

「あ……うん、そうしょっかな」

「このストラップ、赤ないけどいいのか？」

「うん」

「そーだ、せっかくだし晃のチョイスでいいんじゃない？」

「私が？雪が選んだ方がいいんじゃないか？」

「ううん、せ

つかくだし、お願いできるかな」

「じゃあ、これ、か？雪が悩んでるのと柄似てるし」

「ありがとう。せつかくだから晃ちゃんも買ったら？」

「え、あ、いや、私はあんまりこういうの好きじゃないから」

「えー、せつかく来たんだしき、記念だよ記念」

「いや、で

も」

「晃ちゃん、女の子っぽいのがいやなら、こういうのもあるよ？」

「うーん」

雪子は顔をほころばせた。千枝もおもしろくなつて参戦する。二人のこり押しで、晃も携帯に水色（黒とか紺いろチヨイスだったので妥協だ）のストラップをつけることになった。おそろいの言葉にどことなく複雑そうな晃は、雪子から昔からこういうの恥ずかしいんだよねと指摘されて曖昧に笑う。たまに買ったおそろいのアクセサリは大抵部屋に置き去りにされていたと当時の不満を思い出した雪子とそれは困ると笑った千枝の強行採決だったのはいうまでもない。

第7話 いばらのせかいで

八十神高校の吹奏楽部は毎週月曜日、火曜日、木曜日が主な活動日となっているが、それはあくまでも木管楽器、金管楽器、打楽器とコントラバスが顧問の先生指揮のもとで全体練習をするための曜日と定められているだけである。当たり前だが、楽器を演奏することは毎日の練習の積み重ねがモノを言う。地方大会や参加するイベントが近くなればむろんそれ以外の曜日が追加されることもあるし、それぞれのパートごとに分かれた練習はそれとは別に行われている。さらに部員はそれぞれ担当楽器の経験も技術もばらばらに近く、パートの全体練習だけでは到底一つの水準まで到達することは相当難しい。そのため吹奏楽部は放課後以外にも昼休みや朝の時間、そして休日祝日を通して個人が好きな時間に好きなだけ練習を行う個人練習が大半を占めていることが多い。運動部と違って曜日と時間に練習場所を拘束されないのが文化部の特権である。専用教室と化している音楽室は、たいてい放課後ともなれば何曜日でも個人練習にいそむ部員たちの姿が見られた。そのため、音楽の授業を選択した生徒の中でうっかりテストを受けることが出来なかったりすると音楽室に呼ばれるため、ピアノの前で一人歌わされたとかいう黒歴史を目撃することが出来るといふささやかな笑い話がある。ちなみに音楽室と準備室以外にも少子化の影響で使われなくなったため、特別教室に変更になった教室が多いこの実習棟は、少しずつ吹奏楽部の活動範囲が広がりつつあるのは秘密である。音楽室と準備室の鍵は一つにまとめられているため、職員室に行って借りるための名簿に署名すれば誰でも借りることが出来る。ただし、教室を借りた人間は部活動日誌に時間帯と練習内容、参加した人間を書いておくことが義務付けられている。私は金管楽器の中でもホルンを担当しているが、4人いるうちのリーダー格である3年生になったばかりの先輩に言わせれば、わざわざパートごとに個人練習まで監視する

ようなめんどくさいシステムになったのは、昼休みに練習と称したランチタイムを実行していた不屈きモノがいたのが原因だそうである。暗黙の了解で音楽室でこっそりは許されていたそうなのだが、証拠は持つて帰ること、掃除すること、というのが鉄則だったにも関わらず、ごみ箱にパンの袋を捨てるといふ初歩的ミスを顧問の先生が見つけてしまったそう。よりによってそれが教室掃除が終了後、音楽室を使用する学年は無く、吹奏学部しか使用しない条件下での暴挙である。一時期自由な教室の使用に制限をかけるかどうかまで問題になったそうなので、先輩方は相当ご立腹のようだったが、幸い私ではない。

いつものように私は朝一番に音楽室と準備室を開けると、ホルンの練習をするべく譜面台といす、ケースを引っ張り出した。しんと静まり返った中で、かち、かち、かちとメトロノームの音が響く。その中で私は楽器に息を吹き込む部分、マウスピースというがそこに唇を当てて早速音を出す練習を始めた。真つ白な平原に足跡を残す優越感に似ている。メトロノーム待ちが発生しないのが朝練の特権だ。各パートごとにさっさと用意してくれればいいものを、この学校ではどうやら金管楽器、木管楽器といった具合に数が決まっているらしい。ホルンとトランペットじゃ細かい練習や調整は違ってくるというのに。愚痴をこっそり秘めながらもだいたいやることは変わらない。姿勢と呼吸法を慎重に確かめながら行つて、マウスピースの練習の後、実際にホルンを使って音を出す。楽器をあつたためるウォームアップ。チューニング、ロングノート、基礎練習、応用練習、課題曲の練習、と教本や顧問の先生や先輩方から渡された課題を消化していけばあつという間に1時間が経過してしまう。完璧はプロの世界の特権だ。アマチュアは練習の中で成功していく喜びを学んでいくことが大切だと挟み込んであつた雑誌の切り抜きに書いてある。よほど熱心に練習していたらしいこの世界の私を反映するように、部員に配られたであろうファイルに挟み込まれている楽

譜はどれも3色色に染まっていた。

時計を見れば、そろそろ朝は寝坊が得意なのだというリーダー格の先輩がやってくる頃だ。昨日のパート練習の時に先輩から復活おめでとうとうれしそうに肩を叩かれた。おかしいとは思っていた。どうもこの世界の私は去年の2年生の3学期あたりは学校を休みがちなったようである。1年生と2年生の前半は全力投球で練習していたのが明白なのだが、後半につれてあれだけ熱心に書いてあった3色ペンが減っており、まっさらな楽譜があることもたびたびだ。朝練すら辞めていた時期があつたらしく、留年しなくてよかったねと冗談交じりに言われるあたり本格的に出席日数がまわったようだ。ここが私とこの世界の私の大きな相違点の一つだろう。私は一度大医院で精神的な意味で安定を図るために治療やカウンセリングの施設が整った環境を確保するために一度故郷を去ったことがある。そして高校時代は弟や両親と和解するために3年間だけ帰ってきた。以後はこれからの人生を歩むうえで過去を知っている人間と会うのがつらかったため、家族や彼女以外は一切連絡もとらず、同窓会にもいかず、成人式にもいかないまま今に至っている。多分この世界の私も似たような人生を歩んできたのだと思うが、彼女の位置にいるはずの天城が私の個人的な事情を知らない時点ですでに大きなターニングポイントがあつたことは間違いない。私が3年間女の身体のままでも我慢して女子生徒として過ごすことが出来たのは、理解してくれた学校の先生たちと何よりも彼女がいたからだ。私を受け入れてくれた彼女との思い出を少しでも刻みたかったという気持ちがある。だが、この世界の私は天城がいるから帰ってきたわけではなさそうだ。しかももっぱら部活に全力で打ち込む以外は特に交友関係を広げるわけでもなくクラスメイトの一人としてぽっかり浮かんだままだったようだ。唯一の繋がりと同じ部活のクラスメイト。不幸にも違うクラスになってしまっているが、彼ら、彼女らは私のことを何かと気にかけてくれていたらしい。とりわけ、おはよう、と

元氣よく顔を出してきた先輩はその一人だった。

ここで一つ疑問がわく。親しい人間はいるが、私自身が抱える個人的な事情を把握している人間が学校関係者以外誰もいないという、ある意味孤立無援状態なまま私はこの高校に通っているらしいのである。しかもどうやらこの世界の私は両親や弟と和解に至るまでの過程は経ていないらしい。正直言って、どうしてこの世界の私は自分の身体が女であり、神薙晃は女であると認識している人間しかないこの故郷に、幼少期から身体と心の問題を抱えて自壊寸前までいった記憶しかない故郷にわざわざ帰ってきたのか理解できない。会いたい人間が一人もない世界に何故この世界の私が飛び込むうと思ったのか、皆目見当がつかない。天城や里中との関係にひと段落つきそうな私の中で、もっぱらの問題はそれだった。他に行く場所が無い、という悲壮な展開だけは無いはずだ。距離をとっているとはいえ両親や弟とは別に勘当したわけでも、不仲なわけでもないときどき発生するどうしようもない扱いの違和感に私が絶えられないというわがままでしか無いはずなのだ。他に私の記憶との相違点と言えば、直売所と園芸施設場を運営している祖父が10年ほど早い通院生活をしていることくらいだろうか。酒とたばこ脂っこいものが大好きな祖父は身体に腫瘍が出来て、手術したもののその副作用で座ったり立ったりする動作に障害が残ってしまい、農作業に支障が出てしまうようになったのだが、それが早まっていた。だが、もともと直売所は近隣の農業関係者と共同で行っているから助っ人の手立ては幾らでもあるし、使いきれない農場は農業志望の若手に格安で土地を貸しているから困らないはずなのだ。私が手を貸す時は出荷の最盛期と婦人会や集落の行事の関係で誰も直売所に出られない時に手伝うか、小遣い目当てで手伝うくらいで特に問題は無いはず。分らないことだらけだ。考えるだけで疲れてしまう。だから私は部活に行くのだ。ここでは何も考えなくていい。

何も知らない先輩が隣で準備が整ったらしい。私に笑顔を向けてきた。

「相変わらず早いねえ、神薙さん。いやあ、やる気取り戻してくれてよかったよかった。3学期辺りから、もうやめちゃうんじゃないかってハラハラしてたんだよー、みんなでさ。ホルン1本でやるの2年生は神薙さんしかないじゃない？後輩に指導してくれる人誰もいなくなったら流石にヤバいんだよねえ。吹奏楽部はホルン4人は必須条件だから。ホントごめんね、アタシらのせいだね」
「いえ、そんなことはありませんよ」

「あーもー、優しいなあ。1月の大会でアタシらの代で銅賞なのは残念だけどさ、そのせいで一番がっかりさせちゃったのは事実だもん。神薙さんが一番頑張ってたのみんな知ってたし。今年こそは頑張ろうね」

その言葉に私は思わず顔を上げた。はい、といった私に、声が小さいよ、と先輩は笑った。どうやら私が担当したグループは、毎年行われる地方大会で金賞を獲得出来なかったようだ。ここも相違点かもしれない。ちなみに金賞、銀賞、銅賞とランク付けされており、事実上銅賞は参加賞とも揶揄される。毎年優秀な成績を収めているのは飾られている棚を見れば分かる。これは大きな挫折かもしれない。私よりもはるかに部活に一心不乱に打ち込んでいたであろうこの世界の私が、大きな目標としていたであろう大会の結果だ。部員の何人もがハラハラするほど落ち込んだのは事実だろう。

「もうさー、必ず休む時には連絡入れてくれてたのに、留守電ばかりで出てくれなかったのはもう正直心臓にわかったよー。まさか学校まで休んじゃうとは……。もう今年からはもつと新入部員ばしばし鍛えようね、うん。スパルタするって決めたんだ、みんなで」
「はは、じゃあ私が飴をするということだ」

「えええっ?! ずるいぞ、神薙さん! ここは一人黙々と練習して新人生をビビらせるくらいの演奏をしてもらわないと」

「指導しなくていいのは楽ですね」

「ちょ、違うから! ずびして新人生に横から指摘してもらおう役だから! こう、さ、クールにカリスマ性あふれる先輩を、ね! だって来年は指導役なんだから」

たわいもない会話の中で、貴重な情報を拾い集めていく。キャラ変わって無―い―? と先輩に言われ、私は少しばかり表情がひきつった気がした。

「なんていうか、神薙さん、やっとデレてくれたね!」

「・・・・・・はい?」

「今まではもつとこう、ホルンに全力投球! って感じでさ、一人黙々とやってるタイプで寧ろアタシ達とはあんまりしゃべってくれなかったよねえ。打ち上げとか全然乗ってくれないしさ、もつと早く仲良くなりたかったなあ。神薙さんがこういうふうに笑って喋ってくれるの初めて見た気がするよ。あーもう、練習しなきゃうまくならないのは当たり前なのにねえ、アタシら不真面目でごめんねホント」

音もなんか柔らかくなった気がする。ピリピリさせちゃってたんだねえ、ごめんね、と先輩は言った。

この世界の私は少なくとも八十羽高校に入学してからホルンを担当してきた経験があるわけだが、今の私はこの身体の持ち主とは別人だ。ブランクがあるなどという笑い話ではないが、経験自体なら大学に入ってからもプラスバンド部の門を叩いて2度目の大学生活に花を添えるべく頑張ってきたわけだからずっと向上している自信はある。しかし、このホルンを演奏し続けてきたという事実は元の身体の方が上なわけだ。代々大切に扱われてきた年代物のホルン

とこつこつ貯金し続けてようやく購入できた私専用の新品なホルンとは全くの別物である。アマチュアはアマチュアなりに頑張ってきたわけだが、高校時代に全力投球していたであろうこの世界の私は恐らくやる気と向上心という面では全盛期に近いものであり、社会人になって一旦ブランクを抱え、必死で取り返しながら調子を取り戻そうと悪戦苦闘していた私では雲泥の差がある。打ち込む真剣さがもろに技術に現れてしまう。そもそも今の私と身体の主は別人である。演奏の仕方だって、癖だって、厳密にはきつと違ふはずなのだ。ホルンは金管楽器の中でも特に音が外しやすく、音程も取りにくく、そして音色が鋭くなってしまうがちな。吹奏楽部は木管楽器と金管楽器、そして打楽器とエレキやコントラバスで構成されるが、ホルンはその中でも木管楽器と金管楽器を繋ぐ大切な役割がある。身体の構え方、息の吹き方一つで大きく変わってしまう音色は、やはり先輩方や同学年のホルンパート部員にもろに伝わってしまったらしい。

そして少しだけ、この世界の私の立ち位置について把握できる気がした。朝の朝礼が始まるまで、私は先輩と二人でのんびりと朝練を行っただった。

「そうそう、神薙さん」

「はい？」

「飯田くんとのおれ、どうなったの？」

「い、飯田、くん？」

「うん、そう。トロンボーンの」

私は思わず凍りつく。飯田といえば、吹奏楽部のトロンボーンを担当している男子生徒としてゲームに出てきたはずだ。交通事故で演奏不可能なけがを負い、松永が急きょ代役としてトロンボーンのパートを担当することになったイベントが確かあったはずである。ブ

ランクからすぐに復活した部員がすぐに本調子を取り戻して発表会の担当を出来るとすれば、練習期間にもよるがそれはある意味天才の領域だ。ケガが完治した奴が現れた時には空気読めと思ったものだが、先輩とも同級生とも分らないその飯田という男子生徒と私は一体何のつながりがあるのだろうか。一抹の不安を覚えつつ沈黙してしまつた私に、にやにやと先輩は笑う。悪寒が走る。呼吸が止まる。聞きたくない。その先は。嫌だ。やめてくれ。思わず言いかけた言葉は恐怖のあまり出てこなかった。

「誤魔化してもダメダメ。ほら、中学生の時、付き合ってたんでしょ？」

がつん、と殴られる気がした。

「大会の後、2人きりで話してたじゃない？水臭いなあ、いつてくれたらよかったのに。ねえ、より戻したの？」

「……………いえ、むり、ですから」

「そっかー、残念」

はにかむ先輩に別れを告げられ、最後まで茫然自失で立ち尽くしていた私は、チャイムの音が鳴ったが、我慢できず私はそのままトイレに直行した。不意打ちだった。すっかり受け入れたとはいえ、私の中ではまだ混沌としている部分を容赦なく抉る場面だった。気分は最悪。おそらく真っ青になっているだろう。なんであの人と同じ立場にいる人間が同じ高校に通つて、しかも同じ部活にいるんだよ、なんでなんでなんで。ふざけるな！最悪だ最悪だ最悪だ！なんでよりによってあの時と全く同じ状況下が今ここで再現されなきゃいけないんだ、ふざけるな、中学校のときじゃないのなんでなんでなんで。頭がぐちゃぐちゃして泣きそうになる。そしてようやく私は、この世界の私がこんなに一生懸命に打ち込んでいた部活から

逃げるように学校を休みがちになった理由が分かった気がした。

私は、私が男であり、女の身体であると自覚するまでには、自分が一体何なのか分からずに、ずいぶんと無理をした時期がある。それが結局自壊寸前まで直行する原因になるのだが、飯田はまさに私のその時期を直撃する人間関係を結んでいた人間の位置にいる。もし、相違点が無いとすれば、この世界の私は飯田と付き合っていた時期があるのだろう。私と彼女とあの人の関係をそっくりそのまま投影するとすれば。私は天城のことが好きであると自覚することが出来ないまま、天城がとられてしまうという危機感と恋愛すれば女になれるかもしれないという破綻した思考回路で、天城に好意を抱いて近づいてきた飯田に牽制する形で付き合ってくれと告白したのだろう。そして結局1週間も持たずに別れた。天城は彼女と違って男性に苦手意識を持っているからどうかは分からないが、少なくとも私の場合、最終的に彼女とあの人が結ばれた年賀状を最後にこの初恋は終了している。

しばらくトイレにこもり、落ち着くまでじっとしていた。大丈夫。もう1度は通った道じゃないか。彼女から、あの人との関係について執拗に聞かれたことも、勝手に気持ちを押されて不仲説を流されたことも、もうとくに過ぎてきた道じゃないか。相手はまだ高校生のガキだぞ。あの人とは違う。ただ、私と付き合ったことがある、というだけの男子生徒がいるだけじゃないか。私は男だ。もう、混乱していたころの私じゃない。話しかけられたら、もう興味は無いとすっぱり言ってしまうがいい。私は女性が好きで、男性を好きになることはないのだから。

無理はしない。帰ったら祖父母に打ち明ける必要があるそうだ。何年たっても辛いモノは辛い。だから、改めて思うのだ。何故、この世界の私は、この学校に在籍しているのだろうか。ますます分か

らなくなってしまった。

ようやく落ち着きを取り戻した頃には、もう一見目を告げるチャイムが鳴ってしまふ。慌てて走った私は、朝練に熱心なのはいいが授業はちゃんとするようにと先生に怒られたがそのまま中に入れてもらえた。

「雪、今日の昼休み、図書委員の集まりがあるんだ。四限目終わったら、すぐに図書室に集合だつて」

次の授業の準備をしに行く途中の天城を捕まえて、先ほど諸岡先生から預かったばかりの連絡紙を渡した。教卓に近いのは天城にも関わらず私に連絡が先に回されたのは、単純にホームルームが終了し慌ただしくなった教室内で、教卓横のドアから出ようとした時に声をかけられただけである。ロッカーに教科書も資料集も問題集もルーブリーフすら全てロッカーに放り込んでいる私は、勉強机の中に入っているのはファイルと筆記用具、辞書だけだ。巣窟と化している中から目当ての物を発掘するのはなかなか骨が折れる。整理整頓してもすぐに崩れてしまいそんな私のロッカーは、雪崩寸前のところでもいつも無理やり扉を閉めていた。ひでーなおい、と笑う花村が通り過ぎたので、英語の翻訳の宿題用にノートを貸す約束は反古にしてやった。鬼といていた気がするが、聞こえない。天城たちの後ろで必死に電子辞書とともに格闘している姿が見えた。ありがとう、と受け取った天城は目を通す。一緒に昼食を食べる約束をしていたらしい里中が時間が取れるかどうかを心配している。今日はいい天気である。屋上で食べるのもいいが、ベストポジションを確

保するとなるとなかなか労力を要するのはお約束だ。

「ねね、晃。代理の人とか立てれないの？せつかくいい天気なのに」
「ごめんな、千枝。最初の集まりだから、名簿作ったり、仕事の説明とかあるんだ。一人だけなら私が行けばいいんだけど、今日は雪も一緒に行った方がいいらしい」

「ごめん、千枝。私、図書委員やるの初めてだし、やっぱり行つていた方がいいと思う。多分休んじやうことも多いだろうし、先生に言わないと」

「そっかー、じゃあアタシも行つていい？」

「うん、多分大丈夫だと思うよ。図書委員の人つて、奥の方の大きな机使いたいだし、入口の方の本棚辺りだったら入つてよかったと思うから」

「うん、分かった。じゃ、そこらへんで適当に本でも読んでるよ。そっこーで終わらせなきゃね！そーだ、晃。せつかくだし、そのまま一緒にご飯食べない？お弁当じゃないなら、アタシ、購買行つてきたげるよ？」

「え？いいのか？」

「うん、晃ちゃんがよかつたら」

「あつたり前じゃん。多い方が楽しいでしょ？あー、でも多分教室だよ。あーあ、屋上で焼きそばパン食べることの素晴らしさについて、晃に語ろうと思つてたのにー」

「あはは。ありがとう。じゃあ、お願いしてもいいか？」

「ん、了解。じゃー、何がいい？パン？おにぎり？ラーメンとかはちよつと時間的に厳しいかもだけど」

「おにぎりだったら中身はなんでもいいな。もし売り切れてたら、焼きそばとか適当な惣菜で。パンはおやつなんだ。私の中では」

「おおつ、流石は農家の娘さん。やつぱりお米派なんだねー」

「晃ちゃん、昔からご飯はあんまりサンドイッチとか食べないもんね」

「雪子は？なんか飲み物とかいる？」

「うっん、私は特にないかな」

「ああ、千枝。お金は…」

「ん？あー、いいっていいって後で。ご飯渡す時にちよーだい？だって購買競争率高いんだもん。毎日特攻しているとはいえ、連勝記録を伸ばすのはなかなか疲れるんだー。リクエスト通りとはいかないかもしれないしね」

「千枝、最近お昼買ってるよね」

「うん。お母さんに頼んだらお弁当作ってくれるとは思っただけだしー、アタシも朝起こされて手伝わなきゃいけないのはもうやなのー！こっちだって頑張ってるのに、いつも怒るんだよ、お母さん。キッチンから追い出されちゃうんだ。ひどいよねえ。それに楽しみもあるんだ」

「楽しみ？」

「うん。何としても今月中にパンのラインナップ制覇するんだ！」

「千枝、野菜ジュースはとらなきゃダメだよ？」

「あはは、分かってるって。栄養の偏りは美容の大敵だもんねー」

んじゃ、いきましょ！と笑う千枝に誘われる形で私たちは生物室に足を運んだ。部活が怖い。逃避するように私は天城達に続いた。しばらく廊下を歩いていると、不意に天城が立ち止まる。

「晃ちゃん」

「ん？」

「どうしたの？さっきから元気ないよ？」

「なんでもな」

「あるでしょ」

「う」

「ウソつく時、晃ちゃんいつも「なんでもない」って言って、大げさに首ふるんだ。この癖、変わって無いね」

「……はは」

「なんかあったの？ 晃。もしよかったら、相談乗るよ？ 調子悪いんだったら保健室言った方がよくない？ 大丈夫？」

「だいじょう」

「晃」

「晃ちゃん」

「「ウソはダメ」」

「……保健室は、いい。そこまでひどくないから」

「うん、よろしい。隠さなくなっただけでも大進歩じゃん。ねえ、

雪子」

「うん！ 晃ちゃん、昼休みでよかったら話そうよ、ね？ 無理しないで？」

「分かった」

うれしそうな彼女たちの笑顔が、余計に胸をえぐった。

第8話 りりぱっと すてつぶ

窓は十六当分割された珍しい枠にはめられており、春先の穏やかな風景を写している。外を望めば、グラウンドとフェンス、そして敷地内をぐるりと回すソメイヨシノの桜が望める。白い綿菓子のような雲がのんびりと流れており、暖かな光が図書館に日溜まりをこぼしている。図書館の窓は、すべて落ち着いた緑色に統一されたカーテンが隅に束ねられていた。

眩しくて目を細めた私は、急に目が眩んだので視線を教室内に向けてことにする。瞼の裏側でススワタリがちらちらと霞んでは消えた。どうやら八十神高校はずいぶんと年季が入っているらしい。図書館独特の雰囲気と匂いが気分を落ち着かせ、真面目にさせてくれる。確か太陽の光は本を日焼けさせ、紙の痛みを早めてしまうから、紙を劣化させる元だからなるべく避けたほうがいいはずである。本来ならこのように西日に当たるところに本棚を置くべきではないと思うのだが、収納ペースの確保を優先するとなると、そうも言ってもらえないらしい。ブラインドはやはり難しいのだろう。大学の広々とした機能的で清潔な図書館施設を思い出し、無意識のうちに比較してしまった私は、無性にこの図書室が懐かしくなった。私の頭の中にある図書室となんら変わらない風景がここにある。教室2つ分ほどの広さがある図書室は、私の記憶の中ではずいぶんと広がった気がするけども改めて見るとそうでもなかったりするらしい。同窓会に一度も参加したことがない私は、再び母校に足を踏み入れる懐かしさなど今まで感じたことはなかったからなおさらだ。

入り口には、本の貸し出し、返却を行っているカウンターがあり、その前に置かれたテーブルには新しく入った新書籍が並んでいる。四方は本棚で埋め尽くされているが、古典や日本文学の漫画、雑誌、

今映画化やテレビドラマ化で注目を浴びているような話題作が重点的に置かれており、読書はあまり好きではないけれど、原作は気になる、あるいはちょっと入り浸りたいという生徒向けに種類は充実している。テーブルと椅子も申し訳程度に置いてあるが、里中は最近話題になっているドラマの原作を手にとるなり立ち読みし始めたので、そういう生徒のほうが多いのだろう。

先に進むと、ペルソナ4でおなじみの光景が広がっている。窓がある壁を除いて3隅は手前よりも高い威圧感有る本棚が陳列しており、垂直に同じ高さの本棚が佇んでいる。くすんだ金色のプレートにはそれぞれの本棚に収容されている書籍の種類、ジャンルが並んでいる。隅のほうに勉強用の机と椅子が置かれており、奥のほうに進むと市場の大きなテーブルと椅子が5組ほど並んでいた。そう、主人公と愉快的仲間たちがコミュニティへの布石である音符を稼ぎながら、知識のステータスを少しでも伸ばそうと苦心するあの風景がある。思わずその風景を見つけた私は、真っ先にそこにある椅子を引いた。もしその場面が再現されるなら、彼らは私の前に向かいあわせの形で座っているに違いない。そして、向かいあわせの形で筆箱を持った天城が座った。私もポケットに入れっぱなしになっていた無地のスケジュール帳を引っ張り出す。高校時代からずっと使い続けてきたこのシリーズは、相変わらず私の持ち物として馴染んでいる。どうやら好みの傾向はこの世界の私と変わらないらしい。挟み込んでいた付属のペンも非パリ出して、机の上に置いておいた。

「司書の人、いないんだな」

ぼそりと私の過去の記憶との相違点をつぶやくと、天城に驚きを持つて拾いあげられてしまった。

「あれ？ 晃ちゃん、図書室使ったことない？ うちの高校、細井先生

なんだよ。担当の先生って」

「そうなのか、私、朝の時間に宿題済ませるか、家で勉強するからあんまり使わないんだ」

「え？そうなの？晃ちゃん、本読むの好きでよく図書室行ってたのに？」

「今は、買って読むほうが好きだな。ブックオフとかで」

「そうなんだ。なんかおもしろい本あったら教えてね」

「ああ」

私を見つめながら、なんだか嬉しそうに天城はニコニコしている。

図書館に入ってからやたらと機嫌がいい天城は、3クラスずつある各学年から集められた2組ずつの図書委員、16名の目がなければ大笑いに飛躍していたに違いない。天城にとって5年ぶりとなる親友だった人との再会だ、里中にはない強引さと積極性のせいでなかなか聞けないことも置いのだろう。ましてや親友の里中を前にして遠慮している部分が有るのは事実だ。恐らく5年間の空白を埋められることが嬉しいのだろう。実際にこうして面と向かって談笑し、仲良くコミュニケーションをとっているのが、天城が求めている神薙晃という人間ではなくゲームをプレイした赤の他人である私であることが残念でならない。本当に、どこに行ったのだろうか、この体の持ち主は。ただ、この問題について考察するには情報も足りないし、原因も不明、正しく一寸先は闇状態の無限ループに陥りかねないから、敢えて押し殺した。時間の浪費にしかないネガティブ思考は、今はまだ求められていない。その時になったら悩めばいいと思考を切り離す。現実逃避と放置は得意分野だ。

ちなみに私が口にした情報は嘘ではない。私がこの世界に来てから、まず初めにしたことは「この世界の私」について片っ端から調べることだった。自室に入って、片っ端から置いてあるものを全て確認し、読みあさり、把握しようと躍起になったせいであるのが遅くな

つてしまい祖母に怒られたのは記憶に新しい。本棚に入っていた「この世界の私」を構成する本や漫画、ゲームといったジャンルは私とほとんど代わりはなかった。ただ大人の事情で微妙に名前が違っていたり、私の世代とは違う、もし私が高校生だったら間違いなく趣味に走っていたであろう作家やシリーズで埋め尽くされていたりといった違いしかなかった。入手先は全てブックオフやゲオなどに固定されているのは、小遣い帳に記録するのが面倒で、まるで家計簿のごとく貼りつけられたレシートから確認済みである。

「細井先生、か。たしか現国の先生だよな」

「そうだよ。私たちのクラスの当だったらいいよね」

「そうだな」

恐るべし、パーティ中ナンバー1の幸運ステータスを持つ天城である。その希望はすぐに叶えられることになるだろう。密かに思いながら、プリントを自分そっくりのパペット人形にくわえさせて現れた細井先生に目を向けた。白髪が目立ち始めた初老の教諭は、聞き慣れた温厚さがにじみ出た口調で、挨拶する。そして手短に済ませたいとばかりにさっそくプリントを回し始めた。読んでいてね、と二度手間を省いてくれたありがたい先生に、3年生の学年章をつけた男子生徒が、細井ちゃんいい加減すぎだろ、と横槍を入れて笑いを誘った。漫画でしかお目にかかったことがない四角い黒縁メガネの先は白くなっており、目を確認することができない怪奇現象は健在だ。誰も突っ込まないのはもはや世界のお約束らしいのでスルーすることにした。回ってきたプリントを確認すると、図書員の仕事は本の貸し出しと借入、新しい書籍を並べたり、整理整頓したり、延滞している不届き者への公開処刑を放送委員に頼むことだった。活動は一週間に1度。平日の昼休みか放課後にカウンターに座って行う仕事を中心のようだ。

「晃ちゃん、この名簿に書いてだつて」

「ん？ああ、わかった。ありがとう」

受け取った名簿に、名前と学年、クラス、生徒番号、そして携帯電話の番号とメルアドを記入する。所属する学科がないのと、携帯電話の記入欄がなんだか新鮮だ。地味にジェネレーションギャップに遭遇しながら隣にすわっている男子生徒に名簿を渡す。さて、これから本番である。

「雪、いつがいい？私は部活あるから、月、火、木の放課後は無理なんだ。他の日なら、個人練習だけど、その日は全体練習だし」

「そっか。えっとね、私は旅館が一番忙しくなっちゃうのって、やっぱり金曜日と土日なの。他の日ならなんとかできると思うんだ。うーん、やっぱり一緒に出来る方がいいよね？」

「そうだな。じゃあ、水曜日の放課後か、あるいは昼休みのどつかつてことか」

「うん」

案の定、コミュを発生させることができない金曜日は無理らしい。旅館という特性上、3連休が絡みやすい金土日はやはり1番のかきいれ時のようだ。細井先生のパペットマペットが創り上げた歪な担当表を見た私は、嫌な予感がした。さあ、書き入れてね、と軽い調子で言われたのでそのまま立ち上がってみるものの、みんな考えることは同じである。文化部、もしくは帰宅部に入っている生徒の条件として、部活の活動日は避けられる傾向にある。それに折角部活がない日は早く帰りたいという人が多い。必然的に昼休みに学年とクラスが羅列していく。そして、やはり文化部の活動日が似たり寄ったりであることが顕著にでた。放課後は水曜日が集中している。とりあえず隅っこの方に書いたものの、9クラスのうち4クラスも集中するとか、なんだそれ。細井先生は、もはやどこの出身か特定

不可能な方言を駆使して、ジャンケン大会を開催した。パペットがするのかと一瞬考えたが、最初はグーと以後を言うだけなので、ジャンケンにパペット人形がすることはなかった。ちょっと残念である。私は速攻で天城のところに向かった。

「他のところ、いくか？」

「うーん、でもまだ決まってるじゃない昼休みって、確か体育の日だよ？大丈夫かな？」

「あー……そうだよな」

無理だ。移動教室の曜日はまだいい。だが、体育の時間を控えた昼休みの時間だけは何としても確保しなくてはいけない事情が私にはある。私が女子生徒として八十神高校に在学している以上、カリキュラムが男女別となったときに女子生徒の区分に放り込まれるのは仕方がない。でも、更衣室で天城や里中達と共に着替えることが出来る度胸など私には存在しない。トイレの個室、もしくは私のプライバシーが主な私の安息の場所だった。絶対に更衣室は無理だ。無意識のうちに私が自傷した箇所に手が行ってしまう。必ず着替えるときに覚えてしまう箇所にソレは存在しており、四季を通して私は黒のアンダーをきなければいけない。体操服もジャージ無しは無理だ。まして、私の腕は。通院して、定期的にホルモンバランスを意図的に男性に近づけているため、注射針の跡は季節によつては隠しようのないものになってしまう。確実に事情を聞かれたり、あらぬ想像をされてはこちらが困るのだ。もし、ジャンケンで負けたらどちらかに取って都合の悪い日になってしまうが、こればかりは仕方ないだろう。そのままでもいいから、と合意する。で、つぎは。

「どっちが、じゃんけん、する？」

「雪でいいと思う」

「えっ?!」

そんなわくわくしたまなざしを向けられたら即答するしかないだろうに。嬉しそうだが、勝てるかどうか不安そうな天城である。持ち前の運の高さを発揮出来ればいいだけだと思うが、ステータスなんて知らないだろう天城にうまいこと持ち上げる方法が思いつかない。間違いなく、花村が代表としてジャンケンするよりはるかに安心なのだが。

「ジャンケン弱いからな、私」

「あ、そっか。うん、わかった。行ってくるね」

どうやら天城の記憶の中にいる神薙晃はとてつもなくジャンケンが弱いらしい。どうでもいいところまで似通っている事実、密かに私は打ちひしがれていた。ラックが低いのは、こちらでも健在らしい。ああ、夢のパンチラ昇天撃が。ちなみにその破廉恥な名称は、攻撃モーシヨンのパンチラに定評があるルシフェルに五月雨昇天撃を継承させたネタペルソナの必殺技として、某掲示板のメガテニストによって考案された。雨の日にラックが馬鹿高いルシフェルがすると、クリティカル、ダウンがとんでもないことになる。天使は両性具有であるという常識は、敢えてここでスルーするのが男である。ましてや閣下の墮天前の姿だという事実は、絶対に触れてはならない。ああ、そういえば事故ナギ、作る前にこっちに来たなそういえば。どうでもいい回想に浸っている私とは無関係にジャンケン大会は進んでいく。座っていく候補たち。私は天城をみた。

「……あ」

差し出したグーを降ろした天城は、申し訳なさそうに着席してから私を見た。残念ながらあと一歩及ばず負けてしまったらしい。仕方

ないと軽く流して、私は開いている放課後の中から天城が取れそうな時間を優先することにした。幸い図書室の閉館時間は部活動の1時間半の猶予を残してくれている。もう部活を一回休む曜日しかあいていないのだ、どのみち一緒だろう。

「じゃあ、木曜日にしよう」

「ごめんね、晃ちゃん。部活あるのに……」

「完全に休むわけじゃないから大丈夫。全体練習は5時45分からだし、急げばぎりぎり間に合うだろ。ちよつと早く抜ける日もあるかもしれないけど」

「うん。その時は千枝に頼んでみるよ」

むしろ申し訳ないのは私の方である。まだ転校してきていない名も知らない転校生くんが、コミュニケーションレベルを上げる貴重な機会を1回潰してしまったのだから。密かに謝罪しつつ私は再びホワイトボードに記入しに席をたつ。どうやら次はジャンケン大会も無いらしい。あっさり決定の赤丸で覆われたマス目。決まった人から解散しているので、私たちも席を立つことにした。真新しいメモ欄に記入する。このスケジュール帳にどれだけの予定を書き込むことができるか、密かな楽しみがここにある。暫く歩いていけば、私たちの姿を認めた里中が立ち上がった。

「おかえりー、二人とも。どうだった？」

「私がジャンケンで負けちゃって、木曜日の放課後になっちゃった」

「あちゃ。あれ？でも木曜日って、晃、部活じゃないっけ？」

「まあ、終わり次第速攻で音楽室にいけば、全体練習には間に合うからな。発表会とかコンクール前はちよつと厳しいかもしれないけど」

「そっかあ、大変だね」

「ごめん、千枝。もし晃ちゃんが忙しかったら、代わりにやってく

れないかな」

「えっ?! おおっと、まさかのご指名? 大丈夫かなあ、アタシでも」
「埋め合わせはするから、お願いできないか?」

「うーん、じゃあ、なんか奢ってくれたら考えるよ」

「小遣いの範囲なら、なんとか」

「おっけーい、あ、そーだ。それとさ、読みたい本キープしちゃってもいい?」

「大丈夫だと思うよ、よく図書委員の人やってるし」

「聖龍伝説のノベライズが出るんだー、細井ちゃんに頼まなきゃ」

「じゃあ教室戻ろうよ、と戦利品を掲げた里中に頷いた私たちは、そのまま空き教室に直行する。ちゃっかりお弁当箱を持ってきていた天城に、今気づいたのは内緒である。」

昼ごはんもそこそこに、第一回何でも相談室が開幕していた。

「飯田……さん覚えてるか? 雪」

飯田が何者なのか、少しでも情報が欲しかった私は、単刀直入に聞くことにした。綾音が先輩呼びをしていた時点で1学年は除外される。そもそも今年の1月のコンクールに参加している時点で今の2年生、3年生なのは確定している。先輩は飯田くんと言っていたか

ら、今年卒業したという可能性も低い。あの人は年上は性別関係なく先輩呼びする人だ。でもコミュ内では、部長が飯田と呼び捨てしていたから、特定するのは難しい。部長はどうやら同級生も下級生も関係なく呼び捨てにするらしく、結局2年生なのか3年生なのか分からないままだ。金管楽器を担当するグループ同士でパートは固まっているが、なにせ吹奏楽部は男女部員数が多い。未だに顔と名前が一致しない人も多い。かろうじて同じホルンパートの人たちは覚えられたが、同じ金管楽器を担当する人たちの顔は覚えられても、肝心の名前が分からないままだった。学年章でなんとか判断しているレベルだ。平部員の私は先輩と顧問の先生の電話、メルアドしか知らない。連絡網は個人情報がつたらという理由でマネージャーが管理しているらしく、知るすべは無いのである。せめて学年だけでも知りたかった。ちなみに今朝、先輩から衝撃の事実を知らされるまで、私はずっと個人練習に勤しんだり、ホルンのパート参加しており、まだ全体練習はしていない。だから全く分からないのである。

そんな私の切実な事情など知るはずもない天城は、一瞬きよんとしていたが、すぐに思い出したようで覚えてるよと笑った。

「飯田先輩？覚えてるもなにも、晃ちゃんの彼氏だった人、だよ。忘れないよ。」

「……晃ちゃん、呼び方変えちゃったんだね」

どうやら3年生で確定らしい。つまり、私は10月まで飯田先輩と部活を共にするだけでいいというわけだ。同学年でないだけでも、ずいぶんと出会いは薄れていく。ある意味ほっとした。そこにもものすごい勢いで食いついたのは、やはり里中だった。里中を見ていると、私と彼女との世界で完結しがちだった学校生活に色々と繋がりを持たせてくれた、リーダー格の女子生徒を思い出してしまう。そ

うだ、たしか、あの人と私達が知り合うきっかけを作ったのもまた、デジャビュを感じて苦笑いを浮かべた私は、詳しく聞きたいと顔に書いてある里中をなだめる。好奇心旺盛なまなざしが見上げてくる。私と里中の身長は約10センチある、あと5センチ高ければ、とどうでもいいことを考えつつ私はどうしたものかと考える。興味津々で急かす里中と沈黙する私に、困惑していると汲みとってくれた天城が助け舟を出してくれた。

「晃ちゃん困ってるよ、千枝」

「えーっ、でもさ、すっごく気になるっ。いいなあ、彼氏かあ。アタシなんてさー、もうみーんな天城越え狙いで雪子に夢中になっちゃうんだよ？ひどくない？アタシは空気かつての！もー」

「そ、そんなことないよ、千枝」

「そいうところが雪子らしいんだけどね、はーもう、世の中不公平だよ」

里中の根本にある天城への女性としての劣等感はやはり相当深いようである。里中の初恋は恐らく幼稚園から中学まで同じだったのだろう、例の幼馴染だろう。よく泣き虫でいじめられていた気弱な幼馴染を助けるために、ガキ大将チックなことをやっていたらしい里中である。よく男の子と遊んでいたらしいから、ヒーロー物にハマるきっかけも幼馴染の思い出と共にあるのかもしれない。それが、中学時代に出会った天城との出会いで一気に変わってしまうのだ。あのあからさますぎる天城と里中の扱いの違いには清々しさすら感じられたが、恋愛ルートは里中一直線だった私には殺意しかわかなかった。しかもカツアゲに助けられておきながら、なんだあのとんでもない態度と台詞は。間違いなく主人公がコミュの中で激怒した数少ない場面の一つである。仄かな恋心を抱いていた幼馴染が天城になびき始め、やがて天城と接触するためのツールとして幼馴染から認知されはじめる。相当な苦痛だろう。覚えがある話である。ま

あ、私の場合、自ら茨の道に飛び込むような大馬鹿者だから、自業自得なのでおいておくとしても。初恋は叶わないとは言うものの、かなってしまったら主人公とのフラグが粉碎されてしまうのだ。幼馴染くんには悪いが、当て馬としては十分な働きだったと思われる。そして密かな人気があるにもかかわらず、全く気づいていない一条涙目な展開は、里中の良さでもあるからよしとして。そんな苦い失恋を経験した里中としては、興味がひかれるのも無理は無いと思うが、私はあいにく語れるような経験は把握しきれていないのだ。はてさて。

「私、吹奏楽部でホルンを担当してるんだ。………実は、飯田先輩、トロンボーンの担当してるんだ」

「えっ?! ホントなの? 晃ちゃん」

「……ああ」

「ええっ?! それホント? すっごい偶然だねえ。あ、もしかして、体験入部の時、再会しちゃったりしたの?」

「違う。私は、ずっと楽器を演奏してみたかったけど、小学校も中学校も部活がなかったから、決めてたんだ」

「そっか、でもさー、それって運命感じゃない?」

「悪いけど、私はちよつと、気まずいんだ」

「そっかー、残念。うーん、恋愛関係って奥が深いねえ。アタシだったら、なんかちよつと意識しちゃうかも」

「ねえ、晃ちゃん。悩んでたの、もしかして、飯田先輩とになにかあったの?」

「……1月に、ちよつと」

「晃ちゃん」

「ん?」

「もし、飯田先輩がもう一回、やり直そうって言われて困ってるんなら、私、やめた方がいいと思うよ」

はつきりと、天城は私を見据えて言い放った。いつになく真剣なまなざしに思わず私も里中も口をつぐんでしまう。天城は少しだけ悲しそうな顔をした。

「あの時は、飯田先輩と付き合ってるの晃ちゃんだから、私が言うのもどうかと思って言えなかったこと、いっぱいあるの。晃ちゃん、飯田先輩と付き合い始めてから、すっごく頑張ってたよね。女の子の服とか、お化粧とか、いろいろ頑張ってたよね。でもね、私、晃ちゃんの相談に乗って、一緒に買い物したりするとき、すっごく辛かったんだ」

「雪……」

「だって晃ちゃん、ずっとつらそうだったんだもん。晃ちゃんらしくいたほうがいいっていても、全然聞いてくれないし。晃ちゃんのまわりがどんどん女の子で埋め尽くされていくたびに、どんどん晃ちゃん、一人ぼっちになっちゃうんだ。気付いてなかったよね？ 晃ちゃん、飯田先輩に誘われるたびに、どこか遠くを見るんだよ。でね、私は大丈夫だって口癖みたいにつぶやいて、まるで思いつめた顔して出かけていくの。今みたいに。晃ちゃん、気付いてる？ 今、晃ちゃん、あの時と全く同じ顔してるの。今にも泣きそうな顔してる」

天城は一呼吸おいて、再び前を見た。

「飯田先輩のこと、大好きなら、それでもいいと思ってた。でもね、晃ちゃん、どんどん体調悪くて休みがちになっちゃったの、もう、見てられなかったんだよ？ 晃ちゃんは、無理しなくても晃ちゃんのままでもいいのに、全然分かってくれないんだもん。まるで女の子にならなくちゃいけないって追い詰められてるみたいで、どんどん壊れてく晃ちゃん、もう見るの嫌だよ、私。ね、晃ちゃん。お願いだから、今度は絶対に無理しないで。相談して？」

「……あー、なんか無神経なこといろいろいつちゃって、ごめんね、晃。アタシ、なんにも知らないのに」

「いや、説明できない私が悪いんだ。気にするなよ。雪もごめん。心配、かけちゃったみたいだな」

「……ホント、だよ。すつごく心配したんだよ？私、遠慮なんてしちゃったから、何にもできなかったから、晃ちゃんに嫌われたのかってずっと……！」

「ごめん、雪。もうどこにもいかないから。な？……私も無理したって反省してる。飯田先輩とはよりを戻す気はないからさ、安心して、な？」

むしろ男性と付き合うなど私は絶対に無理だと断言できるのだが、さすがにそこまで言うのはまだ早い気がして言葉を飲み込んだ。

「こりゃー、相談会を定期的に開かなきゃいけない流れかなー？もう、雪子も晃も水くさいんだから。ずーっと心のなかに貯めこんでたら、苦しいだけっしょ？ね？アタシ、なんにもアドバイスとかできないけどさ、二人が優しすぎるってことはよく分かった。思いっきり感情吐き出さないとダメだって。うん、よし、じゃあこれから週に1回は必ずお悩み相談室つくろーよ。かくしっこなし、なんでもいいからしゃべること！いい？」

快活に笑う里中の提案に、私は強引だなあと笑った。私のはつきりと宣言したことも功を奏したのか、悲壮な顔をしていた天城もすっかり落ち着きを取り戻して笑っている。今、天城屋旅館はスキャンダルの渦中にいろいろな大変だろうに、いらぬ心労をかけてしまったらしい。ごめん、と改めて天城に笑い、肩を叩いた私に天城は小さく頷いた。

これでわかった。

私が巡ってきた過去とこの世界の私が辿ってきた人生は、いくつかのターニングポイントを除いて、ほとんど変わらないということが、これedyやく動き出すことができる。私が自分の判断で動き、考え、そして日々を過ごしていくことに、どうやら何ら問題はないようだ。

第9話 まよなかてれび

放課後を告げるチャイムが鳴る。今日は昼から雨が降っているが、小雨程度だ。霧が出るには気温が暖かすぎる。

「神薙、マヨナカテレビってしててるか？」

記憶に新しい、2日前。天城を「雪」と呼んでみたら、とてもうれしそうに笑った。里中がうれしそうな割に、どこかさみしそうな複雑そうな顔をしたので、できたら名前にしたかったんだが、あの顔を見た手前、引っ込みがなくなかった。今はおそらく仲がいい、といえるくらいの指折りには入れられると思う。結局、天城と私の間に何があったのか私は知らないままだ。おそらく、私とかつての親友との間に起こった出来事の踏襲にすぎないだろうことを考えると、若干鬱になるので、実はありがたかったりする。いずれは向き合う必要があるだろうが、今はまだいいだろう。

クラス分けが行われてから、数日が経っている。また同じだったクラスメイト同士で固まっていた少数グループは、初めて同じクラスになってから徐々に2の2の中で緊張感がほぐれはじめ、いわゆる友達の友達経由で少しずつグループ同士で大きくなっていく。私はいえ、本意ながら女だった時代に戻ってしまったとはいえ、やはりずっと男として生活してきた感覚は抜けない。未だに男女の区分が伴うトイレとか更衣室とか、一瞬歩みを止めてしまう。本来なら花村経由で知り合った、馬鹿ばかりやっている男子生徒たちと一緒に多少の下ネタの混じった話をする方が向いている。だがそれだけでは難しい。生物学上の同性同士の友人は最低限度いないと、

私の特異な体質を露見してしまう前に、彼女達を通して自分のたち振る舞いを調節するというプロセスが失われてしまう。天城は午後には休むとかで出席しておらず、里中は里中で花村とカンフー映画のDVDは何がいいかということについて盛り上がっているのでおいておく。今は委員長経由で比較的一人の時間も友人たちとの時間も大切にできる、穏健な子たちのグループに入れてもらった。

よう、と声をかけてきた、人懐っこそうな笑みを浮かべた子供っぽい男子生徒がいる。私は覚えたばかりの名字を呼んだ。ペルソナ4をプレイした方は猫背の男子生徒を覚えているだろうか。林間学校で愛用のロケット花火を持ち込み、酔いの回る先生のテントにぶち込んで、諸岡先生を絶叫させた武勇伝をもつ、彼である。ミスコンでも大がかりな仕掛けをもくろんでいたが、久慈川に見とれて失敗したはずだ。昨日、里中と別れてから、降り始めた雨に雨宿りついでに立ち寄った四六商店で知り合ったのである。いたずらグッズを買い占めていた彼は、無理やり紙袋に詰め込みすぎて底を破いて、商品をぶちまけた。思わず笑ってしまった私は、女子生徒に笑われたとショックのあまり沈黙してしまった彼をフォローすべく一緒に拾い集めたわけである。中に、久慈川のDVD、しかも初回特典つきのもので見つけ、思わず見入ってしまった私を見て、彼がおっという顔をして話しかけてきたのは余談である。昨日、バスに乗るとき、すっかり財布がピンチ状態で呆然としていた彼に、50円かしたのだが、律儀に返しに来てくれたらしい。ありがとな、と差し出された50円玉を私は財布に入れた。

「マヨナカテレビ？」

「真夜中ちょうど〇：〇〇に真つ暗なテレビをのぞきこむと、運命の相手が見えるんだってよ。面白いよな、今時都市伝説なんてさ」

アホらしいけど、ちょっと気にならね？と笑う。そもそもこの街が都市と連想できるかどうかという問題もあると思う。そこで私は心の中で、あ、しまった、と叫ぶ。面白そうだな、と笑うが、やはりひきつりが出てしまったらしい。あ、別に俺は信じてねーからな、誤解すんなよ、とあわてて弁解に入るのがあべこべで面白い。そういえば天城達との買い物ですっかり忘れていたけれど、昨日の夜は雨だったじゃないか、なんでマヨナカテレビを試さなかったんだ、私。うかつだった。

「とかなんとか言っちゃって、本当は試したんだろ？昨日」

「げっ、なんで分かったんだよ！」

「ほら、かかった」

「うつせーぞ、遅刻魔」

「あはははは。こいつから聞いたんだけど、神薙、りせちーすきってほんと？よかったら、オレなりに集めたベスト盤、かすぜ？」

「お、ありがとう。私、未だにウォークマンなんだ、CDに入れてくれるとありがたいんだけど」

「え、まじで？珍しいな、へええ。いーぜそれくらい。じゃあ明日朝にで渡すな」

「その前にちゃんと来いよ」

「時間どおりにきたら、負けかなと思ってんだ」

「おいおい、モロキンになぐられっぞ？」

茶髪の男子生徒が声をかけてきた。確か開会式そうそう暴走族がうるさくて寝不足だから、というところでもない理由で堂々と遅刻してきた男子生徒だ。おとといは自転車盗まれた、昨日は今にも生まれそうな妊婦さんを病院まで運んだ、今日は確かあれだ、不良に絡まれた、だった。前代未聞の連続遅刻記録を更新し続けている、いろんな意味で目立ちすぎている奴だ、名前はすぐに出る。

「神薙見見習えよ、お前。毎日早く来てんだぞ」

「え、まじで？」

「いや、私の場合、バス通なんだ。ほら、バス通だと7時すぎにはバス停にいないと遅刻確定だから」

「うへえ、俺寝てるって。無理だわ、うん。それはそうと、なんか見えたのか？マヨナカテレビってやつ。なんか見えたんなら、俺もためそっかなあ、今日確かしぶしぶだけど降るよな、雨」

「へへ、実はな、見えたんだよ。ぼんやりしててよくわかんなかったけどさ、女の人が！」

「まじか！ちょ、詳しく聞かせろよ！」

「本当に？」

「ほんとだつて。どつかで見たことあんだけど、わかんねーんだよなあ、誰だっけ。今日もつかいみりゃ、わかっかな。そーだ、今日、みんなで見ようぜ?」

「おー、いいな」

「わかった」

約束な、と遅刻魔が笑う。私はうなずいた。いたずら常習犯の彼は、もしかしたら里中の言っていた「俺の運命の相手は山野アナだーっ」と叫んでいたという男子生徒なのかもしれない。私はそろそろ部活があるから、と二人に別れを告げた。

今日の部活は昨日と同じでホルン同士のパート練習と個人練習が中心で、肝心の先輩と顔合わせする可能性がある合同練習は明日に迫っているため、特に問題なく一日が終了した。祖母からのメールで、私はガソリンスタンドに向かっていた。天城が休んだのは無理もないと思う。だろうな、とある程度予想はしていたものの、とうとう天城のおかあさん、つまり天城屋旅館の女将さんが疲労困憊と心労が重なって、入院してしまったのだとメールには書かれていた。体調不良で倒れたとかで、天城が早退するのはよく見かけたが、ずい

ぶんとまあアナウンサーは辛辣なイビリをしているらしい。祖父母は今病院に搬送された女将さんをお見舞いに向かっている最中で、今日は遅くなる、と書いてある。時間があれば私ものつけて行きたいらしいが、早く行ってあげてほしい、と部活中送られてきたメールに返したため、私はいつもどおりバスで帰ることになっている。夕ご飯は勿論何もないだろうから、食べてくるなりかって帰るなりしてほしいとのことだ。本当なら行くべきなんだろうけど、やはり確かめておきたいことがあったので、ずるいとは思いながら、急ぐ。

「……やつぱり、いない、か」

いまだき無人ガソリンスタンドの方が普通なのに、未だにスタッフ在住のガソリンスタンド・MODEL石油というところでもない名前の一見何の変哲もないガソリンスタンドを遠目に覗いているが、らっしやーせーの人はいなかった。やはり外部から来た人間以外には興味がないらしい。雨だからいるのだろうか、と思ったものの、残念だ。そもそもこのマヨナカテレビの噂を流したのはあの人のはずで、ちまちまと話しかけまくって広げたのかと思うとシニールさが際立つ。こみあげてくる笑いを殺して、私は商店街に足を延ばす。愛家もいいが、今日はジュネスに行きたいので我慢する。とりあえず惣菜大学のコロッケはおいしかった。

きよろきよろ、とあたりを見渡す。花村が言っていた通り、やはりさびしい売り場である。あと3ヵ月後に迫った地デジなのだから、各メーカーはかきいれ時とばかりにせっかく価格競争を繰り広げているのに、専門店でないのは仕方ないが、品揃えは微妙だ。今日の新聞に挟まれていた某大型電気量販店の方がずっと魅力的といえる。まあ普通こういった場所よりも車が普通の移動手段な田舎では、よ

くあることだ。休日みんなで出かけて食べに行くついでに国道あたりまで出かけるものである。某演歌歌手の広告を見つけた私は、これか、と一台のテレビの前に立ち止まる。これが数日もすれば花村と里中と主人公が落下することになるテレビか。やはり何の変哲もない、テレビである。

手を押しあててみた。

独特のつるつるとした感触と、触れる部分だけ微妙に歪む画面。画面が付いていないので温かさはないが、独特の生暖かさがある。周りの家電のせいだろう。やっぱり、さすがに主人公でもないのに行けるとは思わないけど、残念だ。ため息をついた私は、食品売り場に行くことにする。この世界のポテロングやおっとと、赤いきつねと緑のたぬきが私の知っているものかどうか、確かめなくては。

私の家は、母屋と離れ2つで構成されている。母屋は無論生活の拠点であり、祖父母の寝どこもそこにある。私はどうしても宿題や予習（さすがに高校の勉強にはブランクがありすぎて、うる覚えもいいところ。しかも新しい、学んだ覚えもない部分が結構あるので、勉強しないと辛いのだ）、ゲームとかネットのせいで夜更かしする。祖父母は10時には消灯してしまうため、私の部屋は離れにある。一階は車庫を改造した農作物の保管庫兼梱包場所になっており、二階が私の部屋があり、直通である。かつて若き頃の両親と1、2歳だった頃の私が、新しい住居を構えるまで暮らしていたところでもある。唯一の難点は私の部屋と物置と化している居間以外、洗面所しかなく、トイレはもう一つの離れに設置されていることだ。もう一つの離れは、保健所の指導の関係で、衛生面に気を使う加工品用のキッチンとか大きな業務用の冷蔵庫が置かれた場所である。そこは蔵を改造したものだ。

カーテンを閉める。雨は細かい粒となって窓ガラスに張り付いてはいるが、流れるほどではない。一応消灯する。携帯の光を頼りに、私はテレビに向かった。何か映るだろうか。話が正しければ、まだテレビに入っていない例のアナウンサーらしきシルエツトが、予告風に表示されるはずである。汝は我、我は汝、という常套句が頭に流れるのだろうか、とわくわくする。携帯は、59分をさしている。あと一分だ。私は、息をのむ。

じじじじ、と初めてのムービーのように、突然テレビにスイッチが入る。異常音を発しながら、真っ白になる。びーびーじゃじゃや、というノイズが混じり始める。おおお、と私は声を上げた。すごいすごい、やっぱりマヨナカテレビはさすがに見れるらしい。これなら、主人公や仲間たちには悪いけれど、画面越しに楽しませてもらえるかもしれない。前のめりで私は見る。確かマヨナカテレビは見る人間の興味の度合いが反映されるらしい。それも見ものだ。私は、不謹慎ながら、わくわくしながら見守った。

ぶっん。

「あれ？」

切れてしまった。おかしいな、なんでだ。思わず手を伸ばした私は戦慄した。突然這い出してきた冷たい手が、私の手首をつかんだのである。

「ひつ、やめろ、はなせ！誰だよ！」

必死で私は抵抗する。すさまじい力で引きこんでくる手は、ずるずる、と私をテレビに近づかせる。

「だれ、かつ、たすけっ」

頭が真っ白になって、声がかすれてでない。こわいこわいこわい、誰か！すがろうにも周りは何もない。必死で抵抗するも、私はテレビの目前まで引きずられてしまう。

「——っ——！」

背筋が凍る。ぞぞぞっと這い上がる悪寒。テレビの画面に映った姿に、私は戦慄した。

「あん、た、はっ……！」

歪に笑う、本来の姿の私がそこにいた。

「——酷いじゃねえか、放置なんて。久しぶりに話でもしようぜ」

はつきりとそういったのである。そこから先はブラックアウトしてしまい、よく覚えてはいない。

『よかつたら、また考えてくれないか？』

耳にこびりついて離れない言葉がある。耳を塞いでも、目をして
も、直面している現実が有ることに代わりはない。彼は小さく首を

振った。少しは大人になっていると思っていたのだ。もっと冷静に、慎重に、相手も自分も傷つけないような距離を保ったまま、言葉を送ることができると思っていたのだ。心のなかで何回も何回も繰り返し返していた練習など、意味を成さないことを彼は痛感した。曖昧な自信はあつという間に崩れ去り、そこにいたのは混乱状態になって恐怖にかられ、臆病にも何も言葉を残すことができないまま、その静止を降りきって飛び出してしまった、あの時と何ら変わらない自分がいるだけだったという事実。コンクールが終わり、楽器や楽譜、荷物をもったまま待機して、団体バスを待っている人が大勢いたというあの場所で。中学時代に逃げるように去ってしまった自分を再びまっすぐに見つめて全力投球で思いをぶつけてくれた先輩に、何という言葉返せばいいのか、全く分からなくなってしまったのだ。あの頃とは違い、自分はどんな人間であるのかはつきりと理解していながら、彼には致命的なまでに何もかもが足りなかった。時間も経験も心理的余裕も。真摯にぶつかってくれた先輩に対して、はっきりと自分の意志だけ伝えて、その理由と真意だけは曖昧なままサラリと流してしまうというきりの良さも。こちらからも誠実に対応したいと覚悟して、こちらの抱えていたことを全てさらけ出してから、意志を伝えるという勢いも。そして全てを曖昧にしたまま、スルーしてしまうという選択肢も。何一つ取ることができないまま、彼はあの時と同じようにその場を去るという選択肢を選びとった。その行動そのものを返答として解釈するという自由を先輩に委ねてしまったという事実に気付いた時、彼は吹奏楽部に行けなくなった。伝えようと思っていた言葉も全て遅すぎると勝手に早合点して、どんどん追い詰められてしまう。平生さを失った彼の頭の中からは、すこんと自分の個人的な事情を把握している先生達や家族の存在は抜け落ちてしまい、打ち明けることができないまま、ずるずると時間だけが過ぎてしまう。

気づけば、学校が終わればすぐに帰宅して農業と直売所を手伝うという生活サイクルが完成しつつあった。

ひんやりとした世界に、白い吐息がひとつ産み落とされる。ゆつくりゆつくりと灰色の空に溶けこんでいくそれを見上げた彼は、今にも泣き出しそうな雲行きに自らの心境を重ねあわせながら、再びぐるぐると思考の海に沈んでいった。遠くでかーん、かーん、かーん、というワンマン電車が通過する踏切の音が聞こえる。ちらほらと同じ八十神高校の生徒達の帰宅風景が見えるこの通学路は、まだまだ長い。田んぼの畦道から、シャッターがちらつき始めた商店街を抜け、高速道路へと抜ける国道と県道が交差する通りへと差し掛かる。車の行き交う騒音を目前にして、ようやく彼は本来自分が通るべき通学路をとつくの昔に通り過ぎ、いつもならば到底来ないような場所にたどり着いてしまったことをしる。渡りかけた歩道を引き返し、迷惑そうに一瞥してから排気ガスを置き去りにして走り去ってしまったトラックにも気づかず、彼は再び道を引き返す。時計を見れば、いつも乗るバスの出発時刻までもう10分もない。次までは約30分の待ち時間となるが、恐らく八十稲羽駅に到着する頃には、隣接のバス停に十分間に合うだろう。溜め息のついでに舌打ちし、小さく愚痴をこぼした。安物の大きなこうもり傘は恐らく学校の玄関前に置きっぱなしであることに、ようやく気付いたのである。今日に限っていつもいれている折りたたみの安物傘がない。ぽつぽつと降り始めた雨に不機嫌そうに顔を歪ませた彼は、仕方なくたまたま目に入ったガソリンスタンドへと駆け込んだのだった。

彼の祖父母は最近流行り始めたセルフの方が5円ほど安いので、滅多にこちらのガソリンスタンドは利用しない。そのためセルフのガソリンスタンドと違って常年在しているスタッフ、アルバイトの数が多い光景は不慣れであり、八十神高校の生徒であると明らかな服装

を見た彼らは一様に彼を見つめた。集中する視線に居心地の悪さを感じながら、彼はそそくさと雨から逃れるように天井があるところまで逃げ込んだのだった。

利用者でもなさそうな高校生が、わざわざガソリンスタンドにやってくる理由など数えるほどしか無いだろう。先程からこそこそと会話していたアルバイトらしき青年たちは奥にある事務所に引っ込んでしまう。恐らく店長を呼んでいるのだろう。本降りになり始めた外をぼんやりと眺めみて、ようやく彼はガソリンスタンドのスタッフ、アルバイトに余計な誤解を与えてしまったことに気付いて、心のなかで小さく焦る。八十神高校は一部の制限を除いて基本的にはアルバイトが許されているが、労働基準法の関係で未成年者は深夜の労働が禁止されているため、いろいろと面倒な手続きが多いのである。MOEL石油という名のガソリンスタンドは、八十神高校の進路指導室が斡旋するアルバイト、パートの募集に名前があっただけだ。彼はハラハラとしながら、どうごまかしたのかと先程まで思い悩んでいた問題はとりあえず頭の隅に追いやって考える。

「君、高校生？」

突然後ろから話しかけられて一瞬呼吸が止まりかけるが、慌てて振り向いた先には柔和な笑みをたたえた青年がガソリンスタンドの赤い帽子をもって会釈したので、ほっとして軽く頭を下げた。はい、そうですね、とつぶやいた彼は、居心地が悪くなってそれとなく視線をそらす。恐らく染めているのだろう柔らかな灰色の髪質を覗かせるガソリンスタンドの店員は、まるで吸い込まれそうな印象を持つ瞳をまっすぐに彼に向ける。まるで彼の向こう側にいる何かを見据えるような、不可解な違和感がそこにはつきりと存在しているのだが、必死に誤解を解くための言葉を搾り出している彼は気づかない。一見すると女性的でもあり、男性的でもある中性的な声質や

外見から、なかなかの美大夫であることはうかがい知ることができ
るが、その表情からは何も感じることができない。ただ無機質な静
寂がそこにある。不意に店員はすっと口元を緩やかに上げて笑みを
浮かべたが、そこで紡がれた言葉は彼に届くことなく土砂降りの雨
音に溶けていった。

「ガソリンスタンドのバイトかな？」

「え、あ……その、えっと、はい」

「緊張しなくてもいいよ、僕はアルバイトだから」

「あ、そ、そうですか、あはは」

アルバイトという言葉聞いてほっとした様子で彼は胸をなでおろ
す。店長が出てくる気配はまだない。しかし、この目の前の青年が
居るのに、突然走りだすとか拳動不審にも程がある。でも単なるあ
まやどりであると言うには、もうとつくに時間は過ぎてしまった。
頭の中で焦りが渦巻いている彼は、とうとう最後まで青年の違和感
を感じ取る事ができないまま、時間だけが無常にも過ぎて言った。

「まあ、店長も時間かかると思うから、話でもしてようか。そんな
に緊張しなくてもいいよ」

「す、すいません、あはは」

ぎこちない笑顔の彼に穏やかな笑みを浮かべた青年は、一瞬だけそ
の鋭利な眼差しをその背後に向けた後、何事もなかったかのように
世間話を始めた。暫くすれば、ようやく落ち着いてきたらしい彼は
拳動不審気味な態度や言動が自然な振る舞いになわっていく。気さ
くな装いの青年に、すっかり安心感を覚えて会話を楽しんでいた彼
は、そこでひとつの言葉を耳にする。

「そうだ、君、マヨナカテレビって知ってるかい？」

「マヨナカテレビ?」

聞きなれない言葉。オウム返しになる不思議そうな顔に、青年は少しだけ笑みを濃くした。

「雨の日に、真夜中に電源を切ったテレビを一人で見ると、理想の自分に会えるらしいよ」

「理想の、自分?」

「将来の自分、未来の自分と言うべきかな?そういうつわさ話があるらしいんだ。おもしろそうだよね、今度僕も試してみようかと思っっているんだ」

都市伝説ってやつだね、きっと。ちょうど今夜は、雨みたいだし。

青年の言葉につられて外を見た彼は、マヨナカテレビ、と小さくつぶやいた。理想の、自分、か。どこか遠くを見るような眼差しで薄墨色の空を見上げた彼は、再び思考の海に沈んでいく。その様子を間近でみていた青年は、再び柔和な笑みを浮かべて小さく頷いた。

「マヨナカテレビ?あら懐かしい。お祖母ちゃんの子供の頃にも似たようなの流行ったわよ。ねえ、お祖父ちゃん」

「懐かしいな、マヨナカラジオじゃなかったか?」

「あの頃はテレビなんてなくてねえ、お祖父ちゃんと結婚した頃に初めてテレビが流行ってたから、子供の頃なんてラジオが当たり前だったのよ」

思い出に花咲く祖父母の話聞きながら、彼はますます興味が湧いて質問を重ねた。マヨナカラジオはマヨナカテレビと内容が酷似しており、真夜中の雨の日に電源を切ったラジオを聞いていると声が聞こえてくるらしい。その声の主が将来の自分であったり、理想の自分であったり、運命の相手だったり様々な噂が流れていたのだが、その噂が爆発的に流行った理由には50年に1度このあたりで発生する濃霧という異常気象が拍車をかけていたらしい。本来寒暖の差が原因で発生する霧だが、その年になると何故か1年中霧が発生すると祖父母は彼に聞かせた。その異常気象により特殊な地場が発生して謎の声らしき音をラジオが拾うとか、異次元に繋がってラジオが本当に声を拾うとかなんちゃって科学レベルの説明ながら、当時の学生であった祖父母たちは真剣に信じていたらしい。この町に住んでいる学生を中心に広がっていった噂は、やがて霧が発生しなくなると同時に緩やかに消え去っていき、当時流行っていたご当地オカルトとして同窓会や思い出話として語りぐさになる程度ですんでいたという。

その興味深い話を聞いた彼は、その日から気の進まない部活のことなど放り出して、すっかりそのマヨナカとつく伝承に夢中になり、近所の図書館やネットで情報を収集するようになっていく。幼少期から共働きの両親ではなく祖父母に育てられてきた彼は、祖母の昔話の読み聞かせや祖父と共に見る時代劇の再放送を見て育ってきた経緯があり、オカルトや伝承といった分野に非常に惹かれる性分が培われていた部分もある。何よりも、あの時出会ったアルバイトの青年に聞いた「理想の自分に会える」という言葉が現在の自分の置かれている状況や環境を考えると、強烈な魅力を感じてしまわざるをえないという背景もあった。

彼が再びこの街に帰ってきた理由でも有るかつての親友とは相変わらず連絡すら取れない状況で、ただ彼女に恋愛感情をぶつけること

ができる同性に対して嫉妬を覚える日々である。ただヒトコト、謝りたかっただけなのだ。何も言わずにこの街を離れてしまったことを。そして言いたかっただけなのだ。あの時自分が自覚することができず結局ぐしゃりと潰してしまった感情を、教えてくれてありがとうと。結局先輩に対する返答もろくに考えることができないまま、自分で自分がわからないという状況に再び陥ってしまった彼は、半ば現実逃避にもた心境でそのオカルト探索に夢中になっていく。じわじわと精神的にも肉体的にも蝕んでいく何かをあの時とは違い、はつきりと自覚することが出来ていながら彼は。

最後まで、マヨナカテレビの噂が自分が聞いた話とは実は違うということを認識することができないまま。そして、彼の知るマヨナカテレビが正しいならば何故理想の自分に出会えたであろう人間が、はつきりとその事実を友人に自慢せず、結局「らしい」という伝聞だけが伝わっているのか。致命的な欠陥に気づかないまま、1月某日、深夜零時ジャスト。久方ぶりの暖日で降りしきる雨を確認しながら、マヨナカテレビを実行した。ちなみに、偶然にもその日は平世界と同姓同名の人間が彼の存在する世界を舞台にしたゲームをプレイし始めたのは、完全なる余談である。

第10話 われはなんじ なんじはわれ

ただ絶望的なまでにタイミングが悪かっただけ。

ざああああああああ。

ざわめく雨音、したたと叩きつけられる雨粒の冷たさと痛み、だんだん浸食していく水の不快さ、重さ、じわじわと感じる蒸し暑さ、そして遠く聞こえる蝉の声。ぱち、と目を開けた私は、落下してくる雨粒に反射的に目を閉じたが、そのまま目をこする。ぐっしょりと濡れた前髪をよけ、ふらふらと立ち上がった私は、すっかりパジャマのままだということに気付く。はだしのままで、片手にはとっさに手にした携帯電話が握られているだけ。すっかり泥だらけになってしまったパジャマに顔が歪むが、このままではいけない、とあたりを見渡し、私は走り出す。砂利道で足が痛い、気にしている暇はなかった。周囲は大きな木々、縄でくくられた立派な御神木、後ろには古ぼけた鳥居、そして少し階段を上った丘陵の隅に私は倒れていたらしい。その先に神社の本殿があったのだ。ここは、辰姫神社なのだろう。

はあ、はあ、と息を切らせて、雨宿りに本殿にたどり着いた。泥だらけのパジャマに全身びしょ濡れの状態だ、無性に気持ち悪い。タオルがほしいが、あいにく私は手持無沙汰。すぐに携帯電話を取り出してみる。さいわい電池も電波もたっているし、壊れている気配

もない。日付は2011年4月11日。時刻は11時34分32秒。もう学校が始まっている時間ではないか。ぎよつとした私は、あわてて祖母に電話をかけてみる。耳に当ててみる。しばらくして、コール音に飽き始めたころ、電波がつながりにくくなっているとアナウンスが入ってしまう。こんな姿で商店街に出るのは気が引けて、祖父にも、自宅にも電話をかけてみるが同様の結果だ。はあ、とため息。仕方ないが、助けを求めよう、と私は鳥居に向かって足早に走る。

『どうしたんだよ?』

「——っ?!」

きいん、と頭に直接響いてきた声に戦慄する。周囲を見渡しても、誰もいない。降りしきる雨の中、神社には私しかない。悪寒が走って、血の気が引くのがわかる。さっきの声は、誰だ、誰の声なんだ。男性にしてはやや高く、女性にしては低すぎる中性的な声、囁くような、わずかながらに嘲笑を交えた声。こわくなって私は神社をぬけようとした。だが、というわけか赤と黒の空間の先には、なぜかあるはずの商店街がなく、ただ広がるのは灰色の壁、壁、壁、そしてセーブの青い蝶、重々しい扉だけ。

「…で、なんで、ここは?」

人っ子いない、通路。異界空間に私は立ち往生せざるを得ない。こわくなつて引き返せば、辰姫神社が広がっていた。迷った末に、本

殿に駆け足で戻る。おそろしいほどの静寂が訪れた神社だけが切り離されて存在している。不気味さに私は狼狽するしかない。おかしい、おかしい、おかしすぎる。なんなんだ、ここ。体温が奪われていくわりに、あたりはまるで夏のように暖かく、私は凍えずにすんでいるが、そういえばさつき蟬の声がしたような。耳を澄ますと、かすかに鳴き声が聞こえてくる。どういうことだ、今はまだ4月の上旬、春先だというのに。決定的な違和感に気づいたとき、また頭のとっぺんから、がつん、と響く声が頭の中に反響する。私は思わず耳をふさいだ。

『どうしたんだよ、数カ月ぶりの再会だったのに、忘れちゃったのか？』

「から、だからっ、お前は誰なんだ！再会とか、忘れたとか、そんなの知らない！という事だ、答えるよ！」

『……………あはははははっ！傑作だなあ、こっちの世界のこと忘れちまうくらい、あっちの世界はよかったってか？そりゃよかったなあ』

「はあ？なんのこと」

『ふざけてんのはお前だろ？お前が望んだんだろうが。我は汝、汝は我、本物は自分だって抜かすから、出してやったんだろうが』

脳裏によみがえる、テレビからのびた白い手。つかまれた右腕。私は目を開き、腕を見る。青あざとなつて、くつきりと指の跡が残っていることにもはや恐怖心から二の句が告げない。引きずり込まれ

る真っ黒な画面。必死で抵抗したがなすすべなく引きずられ、それからどうなった？何があった？思い出したいのに、心のどこかで状況把握をしようと必死になる私がいて、だんだん混乱していた頭が冷えてくる。あれは、誰の手だった？

『そんなに神薙晃になりたいんなら、なつてこいよ。そう言っただけで、たった数ヶ月しかたつてないってのに、忘れちゃったのか？』

また、声だ。びくつとした私は、辺りを見渡すが、やはり誰もいない。雨の降りしきる、誰もいない商店街。分からないから、受け入れるしかない？目をそらすな？意味の分からない罵声に取りつく島がない。

だが、わかったことが一つだけある。息が詰まりそうになった。あの時、マヨナカテレビの代わりに現れたあの白い手の先には、にたりと裂けた口で笑った、歪な笑みをたたえた、本来の私、大学生活を送る男性としての自分をてにいれた、私がいた。

つまり、この声は、私。実際に声を発するときと人から受ける声は違って聞こえるから、わからなかったけれど、私なのだ。なんてこ

とだろう、私はあの時、テレビにそのまま引きずり込まれてここにいるのだ。きつと、ここはテレビの中。反響するのは当たり前、声の主は、私の中に存在する、私が受け入れがたいと思っているであろう、深層心理のなかでも突出して嫌悪する部分の具現化した存在、シャドウその人のだろう。私自身に拒絶され、取りつく島のなくなった、哀れなペルソナ。

ここまで考えて、私ははあ？と声を上げた。シャドウはシャドウの宿主に拒絶された部分がこの世界に感化される形で目覚め、具体化し、やがて拒絶される形で暴走して宿主を喰い殺して、もろとも消滅する。だとすれば、おかしい。私が私であることを嫌悪した時期はとうに過ぎ、家族と友人と許容してくれる大学という環境があったから私はすっかり私を気に入っている。確かにこの世界にいる私になってからは、再び生物学上の区分に縛られる生活を強いられ、辟易している部分はあるが、私は私を嫌悪するまでには至っていない。自我を抑え込むまでには追い詰められてはいない。あのときと比べて十分すぎるほどの心の余裕をもって高校生活になじんでいたはずだ。シャドウが周囲には見せられない自分の一面であり、認めたくないが故に閉じ込めている一面ならば、シャドウとして表れてもおかしくない。しかしながら、私は周囲に見せる時期をうかがっている段階であり、まだ時期尚早と考えて控えているだけであつて、別に見せられないわけではない。ましてや拒絶するなんてことがあるはずがないのだ。どういうことだ。無意識の領域における部分だから私は私のすべてを把握しているわけではないけども、シャドウとは宿主が最も感じるであろう嫌悪感の対象になるものではないのか。このような空間を作り上げるほどす黒い何かが私にあるとすれば、一度は自覚したことがあるはずなのに、それが無い。全く心当たりがなく、私は途方に暮れるしかない。

雨は降り続けている。どこかで苛立ちのこもった舌打ち。私は手を下ろした。

『わかってるくせにいつまで目をそらす気だ。いいかげんにしろ。こつやつて忠告できるのも奇跡だったのに、どうでもいいことなんかほっておけ』

「だから、なんのことだよ」

『……………アンタ、ホントに覚えてないのか？』

「ああ、覚えるもなにも、4月に入ってから記憶しか私には無いな」

『……………あははははっ！そーか、そーか、そーいうことか！やつぱり神薙晃じゃないっていう重圧に耐え切れなかったのか、バカなやつ！』

「なに笑ってるんだ」

『うん？マヨナカテレビの噂を真に受けてダメされて、この世界に閉じ込められた馬鹿な奴から生まれたシャドウの顛末について笑ってただけだよ』

「……………え？」

『その様子じゃ本気で覚えてないみたいだから、教えてやろうか』

「ああ」

『数ヶ月前、理想の自分に会えるっていうマヨナカテレビの噂を実行して、この世界に引きずり込まれた馬鹿がいたんだ。なんで気づかなかったんだろうな。理想の自分に会える？じゃあ逢えたらどうする気なんだ？どう頑張ったって理想の自分になんかなれるわけねえのに。それにテレビの向こうにいる理想の自分は、現実世界にいるバカよりも自分のほうが相応しいって思うに決まってる。この噂が本当にあることなのに、なんで誰も事実なんて気づかないまま、マヨナカラジオとかふざけた都市伝説が受け継がれ続けてるだけなのか、ちよっと考えれば分かることなのにな』

「ちよっと待ってくれ、まさか、アンタは」

『そうだよ。数カ月前にこの世界に閉じ込められた大馬鹿だ。そして、アンタは、オレから生まれたシャドウの癖に汝は我、我は汝とか物知り顔で抜かすから、代わりに神薙晃になつてくれよ、って追いついたやつのはれの果てなんだ。記憶喪失になって自分のこと忘れて、神薙晃になろうなんてご都合主義の塊だな、ホントに』

「入れ替わった、のか？この世界は雨が降ったらシャドウが暴れてあんたも死ぬのに」

『へえ、そうなのか？襲われないってことは、もうオレは人間じゃなくなってるんだらうな』

「……………嘘だろ、冗談じゃない……………。なんでそんなバカな真似したんだよ」

『バカな真似、ねえ。その口が言うか。オレにとって理想的な人生を歩んできたアンタには分かんないだろうよ』

「……引きずり込んだ理由は何だ。私を殺す気か？私を殺したら、シャドウになっただんならアンタは道連れに心中するハメになるぞ？」

『さつきからいつてるだろ、久しぶりに話そうぜっていう気分で呼んだだけだ。でも、気が変わったな。アンタが神薙晃としての記憶を失ってるんなら、オレがアンタをあっちの世界に送り込んだ理由がなくなる。覚えてもらわねえと』

どういうことだ。難解な問答を丸投げされて頭が痛くなってくる。

それにしても、まずいことになったと携帯を見る。日付は11日。主人公が転校してくるのが明日、アナウンサーが足立にテレビに放り込まれ、シャドウに喰い殺されるのが翌日の放課後。つまり外の世界で霧が出て、この世界のシャドウが暴走するということだ。しかも13日には小西先輩が足立にテレビに放り込まれ、翌日の早朝にはシャドウに殺されている。14日、あと3日までに自力でクマのいるところまでたどり着くか、それともクマに見つけてもらえるまでここにいて人が放り込まれたということを聞いて、千枝や花村が私の存在に気づいてくれるのか、知らない。2回もシャドウが暴れる危険性があるとはいえ、ペルソナに目覚めていないただの人間である私を襲う奴はいないはずだ。できるのは私をここに

拉致したわりに、執拗に精神を追い詰める攻撃をするどころか謎な問答をしてくるシャドウもどきしかない。放り込まれた人間は水なしでも案外衰弱するだけだからこの世界では餓死は心配しなくて済みそうだ。やはりなんとか脱出するのが優先事項。

降りしきる雨の中、私はふと物音がして、顔を上げた。あ、と声をあげる。

いつの間にか人がいた。彼は私の存在など知りもしないで、ただ携帯を見つめている。

「何やってんだよ、雪のやつ。おっせえなあ。雨でも大丈夫だって言ってたくせによ」

その子は苛立ちを押さえず、乱暴にこうもり傘で石畳をがんがん、と八つ当たり気味にあてる。彼、いや女性の要素をすべて排除した服装ながら、体格や顔つきで隠せない生物学的な生物からして、彼女であろう。男性にしては高く、女性にしては低い声は怒りをはらんでおり、未だに來ない待ち人をただひたすら待っていた。携帯電話でメールを打ち込んだり、電話をかけようとしたりしては、相手の迷惑になるのではないか、と考え直してクリアーボタンを押してしまう。行く度目になるか分からないため息をついて、彼女は降りしきる雨の中、時間ねえのに、くっそ、と舌打ちする。ウチの手伝いは大丈夫だっていったじゃねーかよ、ウソつき。もう時間ねえのに、と焦燥感の混じった様子で、鳥居の向こう、赤黒のストライプの走る空間を眺めている。私が声をかけようとしても、触れようとしても、一切接触を取ることはかなわない。ただ彼女がひたすら待っている様子を見るしかない。あまりにも覚えがある光景に、私はこみあげてくるものがあって、じわり、と目頭が熱くなつて拭う。

一時間たった。待ち人き足らず。

二時間経った。彼女は待ち切れず、電話をかけたが留守電だったよ
うで、5時までなら待っていることを伝えた。どうしても伝えたい
ことがある、とだけ付け足して。待ち人以外に聞かれる可能性のあ
る媒体に、今まで生きてきた中で一番の覚悟を込めた告白をするつ
もりの彼女にはどうしてもできなかったようだ。雨はすっかりあが
っていた。

三時間経った。彼女の眼に若干の諦めと期待が混じりはじめ、せわ
しなく行き来していた足を止め、私のすぐ隣で座り込んでしまった。

四時間がたった。彼女はとうとう我慢できなくなって衝動的に電話
してしまいが、やはり留守電のコールを前に、ぐっと怒りを押し殺
し、手伝いがあるならあきらめる、と連絡を入れるにとどめた。

五時間がたった。もしかしたら、を捨てきれず、結局ぎりぎりまで
待っていた彼女は、泣きだす寸前だった。何度もぬぐうものの、く
すぶる激情を抑えきれず、やがてそれは嗚咽に変わる。うずくまっ
て、静かに静かに肩を震わせる彼女を見て、私はたまらず目をそら
す。あと一時間あるが、それは彼女が泣きやむまでの時間にすぎな
かった。ふたたび、雨が降り出した。

「オニーチャン。なにやってんの？」

私が顔をあげると、彼女も弾かれたように顔をあげる。傘をさした弟が、心配そうに顔を覗き込んでいた。すっかり涙が乾き、充血した目のまま、彼女はあわててこうもり傘をもつ。

「ひろこそ、なにやってんだよ」

「今日は×××の発売日でしょ？買って来いっていったの、一丁ちゃん」

ビニル袋を携えた弟に、彼女はああ、とかすれた声でつぶやく。

「ふられた？」

「それ以前の問題。すっぱかしやがった、雪のやつ」

「えっ、どうすんの？こつち帰ってきたの、最後の荷物の引き取りだけだろ？あさつてにはもうばあちゃんとなきやいけねえじゃん」

「もっかい話してみる。たぶん、都合付かなかったただけだろ」

「無理って連絡もなかったの？」

「たぶん、忘れるくらい忙しいんだろ。気づいてんなら、雪、絶対に連絡するはずだし」

「なにそれ」

弟はどこか不審な顔をしている。雪はそんな奴じゃねーよ、と彼女は低く唸る。すると携帯から無機質なアラーム音が響く。そこには待ち人からの連絡。彼女はぱっと明るくなり、あわてて電話に出る。もしもし、おせーよ、雪、と生き生きし始めた彼女を見つめて、弟はただ静観している。

「遊び？あ、ああ、まあ、な」

どうやら久しぶりに遊びに誘ってくれた親友の誘いをすっぱかしたことを詫げる電話らしい。彼女の顔が曇る。留守番電話を聞いていないか、もしくは電話と待ち人の間にすべてにおいて仲介が入り、大切な話があるから絶対に来てくれ、というくだりが省略されてしまったらしい。どんどん彼女の表情が苦痛を帯びていく。世間話や近況についての長電話が始まってしまい、彼女の口調はどんどんぎこちなくなっていく。弟はしばらく彼女のことを見つめていたが、とうとう我慢ならなくなったらしく、通話相手に聞こえないような音量で彼女に詰め寄る。

「――ちゃん、もう言っちゃえよ」

「は？な、何言ってるんだよ、ひろ！これはちゃんと俺が会って言わねえと駄目だろ！」

「お盆の時期だし、天城屋旅館も忙しいんだよ、きっと。急がなかったっていいじゃん。とりあえず、引越すことだけ伝えて、それについてはまた都合がついたらでさ」

「いや、でも…」

「一区切りつけたいのはわかるけど、今の状態で会えるの？」

「……」

「無理しないでよ、二丁ちゃん。二丁ちゃんだってまだいろいろぐらついでるでしょ？俺だって母さんだって父さんだってまだまだなんだし、もっと落ち着いてからで、いいだろ？」

な？といわれ、しばらくの沈黙ののちに、迷いが混じるのかたどたどしいまま、彼女は引越すことだけを伝えた。しばらくの会話ののち、電話が切れる。

「かえる？」

「わかった」

帰っていく二人の傘を見届けた。

あったかもしれない未来を私は体験しているということなのだろうか、と考える。あの時、私の親友は来てくれた。私は人生で一番の覚悟をもって思いを告げた。すべて打ち明けた。少々理解してくれるには、幾度か衝突寸前の激しい応酬があつたが、ものの見事に振られた。でも、まだ私の友達であってくれと約束してくれた。だから私は生れ故郷に帰ってこれたのだ。あらためてこの世界の私が歩んできた人生は、ニアミスの平行世界だと思ひ知らされる。一方的に告げられた事実と情報が驚愕的すぎて、私はずっとそのまま立ち尽くすしかなかった。

第11話　べるそな

じじじじ、というテレビの砂嵐を聞いているかのような、耳障りなノイズ。全体的にトーンダウンした暗闇の世界で、うごめく影。人の影だろうか。次第にクリアになるも、やはり目は慣れてはくれない、闇に満ちている。声は聞こえない。無声映画を見ているようだ。しかも、まるでパラパラ漫画のように、コマ撮りで進んでいく世界は、登場人物を断片的にしか、移してはくれない。今度はなんだ、と月森孝介は考える。

暗転する前の世界では、外は霧がかった高級そうなりムジンのソファに座っている、ごぶりんのようないでたちのスーツを着た奴に出迎えられたばかりだ。しかも声は目玉おやじ。傍らにはぞっとするほど美人の青いスーツを着た、本を傍らに置いた秘書がいて。

運転手が気になって、二人を無視して真っ先にその先のドアを開けたところ、延々と続く闇の中を無人の運転席が走っているのだけ確認できたことだけ覚えている。ぞっとしたとき、後ろから低い声で座るよう促されたのだ。そして聞いてもいないのに、タロットカードで占いを開始され、あげくがこれからの転校先で事件に巻き込まれ、解決しなければお前死ぬぞ（意識）とまで言われてしまった。いくら自分の不安が具体化した世界とはいえ、あまりにもぶっ飛びすぎてるだろう、と一度目を覚まし、ワンマンカーで一人ねこけていた自分を叱咤したばかりだというのに、今度はなんだ。頭が痛くなってきた。

すると、月森の前で過ぎていく映像は、ようやく登場人物を映し出す。ショートカットの妙齡な女性だ。だれだっけ？覚えてはいるものの、名前が思い出せない。その人は、右から左へ何かに追われるように、一目散に駆けていく。キャリアウーマンともいうべきスーツは台無し、しかも化粧はいろんな液体がぐしゃぐしゃにしている、勘弁願いたいほどになっている。ヒールが折れ、転倒。彼女はよほど躍りになっているのか、とうとう高そうなヒールまで脱ぎ捨てると、そのまま走り出す。追いかけてくるのは……？ここでまた、ノイズが入る。そして暗転。

なんでまた、何かを考えてるように、両手を組んでいるごぶりんの映像が入るんだ。

いらつとして舌打ちした月森の心境に呼応してか、再び映像が流れ始める。じじじじじじ、と脳裏を焼くようなノイズが無声映画を台無しにする。彼女はなにかにつかまれ、持ち上げられ、ぐらぐらと揺さぶられている。たすけて、だれか、と口走っているが声ははいつていない。必死で抵抗する彼女は、ぐわんぐわんと揺られる視界にふと眼に入った何かを見て、ますます青ざめ、目を閉じて、絶叫。彼女を捕まえて、暴行しているそれは、なぜかぞつとするほど白い手をしている。成人女性を持ち上げるほどだ、相当体格のいい男なのだろう、と思っていたのに、ちら、ちら、と除く腕は細い。

そして、彼女と同じスーツ色。ん？と月森は疑問に思うが、突然映像が反転し、一瞬だけ、異様に目がきらきらとした黄色く発光する眼光がうつった気がして、ぞっとする。そして、不自然なタイミン
グで映り込む、くくられたスカーフ。わっかだ。なんだいまの。

再び暗転し、今度は静かにうつむく、先ほどの美人秘書。ウエーブ
がかったブロンドがわずかに揺らぎ、彼女が目をあける。すると、
再びノイズが始まった。

今度は月森と同じくらいの子だ。ただ、パジャマ姿で、しかも
雨の中で外に飛び出したかのごとく、びしょぬれでドロドロで、い
かにもわけありといった様子。必死で前に進もうと手をのばして、
その先にある何かを止めようと、口走っているのはわかるが、さっ
ぱりわからない。その女の子を押しとどめているのは、女の子によ
く似た容姿ながら、不自然なまでに充血した異様な目をした男。あ
と月森は声をあげる。女の子が、男に背中から抑え込まれ、地面、
いや、高そうなカーペットが敷いてあるから室内だろう、床に押し
つぶされる。必死で抵抗するも、男は全く意に介さず、何かをささ
やくように耳元で呟いている。彼女は理解できないのか、首を振っ
て、何か罵っているらしい。読み取れる言葉は、女の子が口走って
いいような単語ではない。そして、彼女は何か聞こえたのか、顔を
あげる。そして、絶望しきった顔をして、硬直する。男は、さもあ

らん、といった様子で冷酷なまなざしをそちらに向け、ためいき。
女の子は耳をふさいだ。

はっとして目が覚める。

がたんごとん、と一定のリズムで刻まれる電車の中の座席。トンネルの中らしく、映りの悪い鏡と化した窓の先の月森は、いつもの増して顔色が悪く、嫌な汗をかいているのか、掌が湿っていた。

恥辱ものは好きじゃない。溜まってるんだろうか、と月森は知られざる自分の性癖が明らかになった気がして、しばらく落ち込んだ。

私のダンジョンは、ただひたすら、「この世界の私」が経験してきた、私にとってある意味あったかもしれない過去をただひたすら逆行体験するということに終始した。あの声は本気である。ずーつと私のそばにいて、ひたすらにいろんなことを教えてくれる。過去と経験とそして人生そのものを教えてくれる。頼んでなんかないのに。この世界の私の記憶が浸食していく。私の大切な記憶がどんどん浸食されていく。かけがえの無い思い出が塗りつぶされていく。ごりごりと上書きされていく錯覚を覚える。殺されるという恐怖に駆られることと、どちらが拷問なのだろう。死にたいと何度思ったか分からないが、このシャドウもどきは私をこのダンジョンから出してくれないのだ。

もう2日が経過している。携帯が壊れていなければ、きっと合っている。シャドウはただの人間は襲わない。だから、ただひたすら、階段を下っていけば、出られたはずだったのに。だから、希望を持ってしまったのかもしれない。このシャドウもどきは私を襲わない。もしかしたら、山野アナウンサーを助けられるんじゃないかと思っってしまったのだ。山野アナウンサーをこのダンジョンまで引っ張り込めれば、もしかしたらと。それが、このさまだ。

私は携帯を落とした。霧が出るとシャドウは暴走し、やがて宿主を喰い殺す。そして、シャドウは消滅し、ダンジョンは消滅する。ゲームをやっている当たり前のように受け入れてきた設定が、ここまでするものになるとは思わなかった。間に合わなかった！助けられなかった！せめて、一度でも、たった一回でもいい、あのスタジオのところまで行って、ゲームの記憶を頼りに、山野アナウンサーのダンジョンがあつたらしいところまで、奔走することができたなら、ただひたすら、階段を駆け上げれば。もはやシャドウのショーと化しているだろう。私の頭の中で、山野アナウンサーは、己の禍々しいまでの嫉妬と憎悪、孤独、絶望を受け止めきれず拒絶し、シャドウに喰い殺された。

分かり切っていたとはいえ、助けられるはずの命が無残にも消滅していく姿は、想像を拒否した。激しい吐き気と絶望なまでに無力な自分を思い知らされ、私はパニックになる。きっと空間が収縮する。きっとよりどころとなった宿主を失った世界は、収縮し、ゲームでみた、あの部屋になる。ぶらーん、ぶらーん、と振り子の如く、揺れている山野アナウンサーは、霧の如く消えてしまう。きっともう大騒ぎになっているだろう。八十稲羽市の猟奇的な連続殺人事件の開幕である。

「なんで、なんで、なんでっ！なんで邪魔をするんだよ！」

私は、私を邪魔したシャドウもどきをにらみつける。元の世界の私の姿をしたカンナギアキラは、平然と笑っていた。こいつやっぱり人間じゃなくなっている。かつてこの世界の神薙晃だったこの男は、普通なら現れたシャドウを拒否して、もっとも心中するところを、我は汝、汝は我というのなら、お前が本当の神薙晃になって現実世界を生きろ、そしてシャドウにその姿と存在をよこせと言い放ち、

実際に追い出してしまったのである。無茶苦茶である。自己否定と自己嫌悪の果てなのだろうか。誰もこいつを助けてあげられなかったんだろうか。そう思うとやるせなくなる。こいつは私が歩んだであろう中でも最も最悪の人生をたった一人ぼっちで歩む羽目になっ
てしまったのだ。中途半端に同情できないが、共感できるから尚更
辛い。

『お前が悪いんだろう？』

ため息交じりで、なんで分かんないんだよ、とシャドウもどきは苦笑いだ。人一人死んでいるのに、何だこいつは。

「私が？」

『そうだよ。お前がさつさと神薙晃ならないから、あの女を助けられなかったんだよ。わかるだろ？俺なんだから』

「どういう意味だよ」

『おいおい、しらばつくれるのはやめようぜ、そのままの意味だろう？あの女を助けたい、とアンタはいつてるけど、アンタはこうもいったよな。山野アナウンサーのシャドウとも戦わなくっちゃいけないかもしれない、ってな。どうやって戦うんだ？俺はアンタにしてもらわなくちゃいけないことが、沢山あるんだよ。勝手に死なれちゃ困るぜ。責任は果たせよな、本物になった神薙晃さんよ。シャドウってやつは、受け入れた時にペルソナってやつになるんだって言ったのはアンタだろう？違うのか？なあ？俺が神薙晃だった時に抱えてた問題は、アンタの中では全部解決してんだろう？まあ、平
行世界から憑依しちまったのはご愁傷さまって所だけだな、ならアンタが俺の代わりにこの世界に神薙晃として生きていくって決めて

くれば全てが解決するんじゃないか、なあ？そうだろ？そしたら
アンタは俺を受け入れたことになるし、俺はペルソナってやつにな
って山野アナウンサーを助けられたかもしれない。ほら、やっぱり
あんたのせいじゃねーか』

「……やっぱり、そうなるのか」

『ああ、そうさ。そもそも、俺がいまだに存在してるのが奇跡だ』

「ふざけるなよ」

『ん、まあ、そういうこともできるか？でも、アンタが心の奥では
拒絶してる限り、俺はアンタをここから出すわけにはいかないな。
だから、俺は直接力を貸せない』

「よくいう。山野アナウンサーを助けようとした私を、はがいじめ
にしておいて」

『そりゃ、「まだ」拒絶してるだけだからな。そのうち、お前はこ
の世界のカンナギアキラになるさ。そのためにひきこんだんだから
な。そうでもしなけりゃ、俺が死んじゃう』

「私が、受け入れるまで、閉じ込める気か」

『さすがは俺、分かってるじゃないか。ご察しの通りさ』

第12話 わたしたちはあまりにもあなたのことをしらない

昨日の11時ごろ、こちらを気遣って基本はメールで済ませるはずの雪子が、10分ものコールを耐えてまで電話をかけてきた衝撃は、忘れようがない。寝ぼけ眼で布団にもぐったまま、携帯をとった千枝が、一気にまどろみが吹き飛んでしまったくらいだ。てっきりしようにもない下ネタで笑わせようと嫌がらせ電話をしてくる花村だと思っただけに、衝撃はことさらだった。

携帯越しの雪子は、パニックにヒステリー状態が重なり、それはもう、平生の雪子からは考えられないほど、狼狽しきっていた。親友のあまりの状態に、かえっていつになく冷静になった千枝は、いつも雪子にやってもらっているように、丁寧に丁寧にはなしの論点をひろいあげ、つなげ、そして落ち着くようになるべくやわらかに慎重に対応した。ようやくまとものに会話できるようになっていたころには、すでに丑三つ時がまわっていた。転送されたメールがすべての概要である。なだめてなだめて、朝になったら会おう、と連絡し、いつにない早起きで辰姫神社に向かったのだ。雪子の焦燥感ぶりに改めて事情を聞いた千枝は、ようやく口を開いた雪子の言葉により、ようやく仲良くなったばかりの友人に迫っているであろう異常事態に気づいたのだった。

「アタシ達で晁を探そうよ、雪子！」

消え入りそうな声で嗚咽を必死にこらえて、話をしていた雪子は、しばらくの沈黙ののち、え？とひどく狼狽した様子で返した。買えない捨てられた子犬を抱えて、ぐずりながら泣いていた、初めて出会ったころの雪子と重なり、思わず自覚するより先に口が動いていた。何よりも、どこか嬉しそうにおそろいのストラップを眺めていた晃が脳裏をかすめ、いてもたってもいられなくなったのである。4月11日。二人は高校生になって初めて、学校をさぼった。

まず向かったのは、晃の住んでいるという、祖父母の家である。バスに揺られて、到着した田んぼだらけの農道をぬけ、集落道の坂を上り、張り出されている民家の地図を見て、ようやくたどり着いた。突然の訪問客に驚いた晃の祖父母は、雪子を見て、そして千枝から代わりに伝えられる事情の説明で、快く迎え入れてくれた。右の足に違和感のある祖父は、ありがとう、と頭を下げる。朝一番で飛び出し、朝食もろくにとれていなかった二人を見かね、おにぎりを出してくれたことをここに記しておく。

案内された晃の部屋は、ものの見事にモノクロで統一された部屋だった。白黒の四角い柄のカーテンが開いていて、風に揺れてさらさらと靡いている。あるのはベッド（これまたカーテンと合わせたのだろう）、同じ柄だ）と小学生のころから使っているであろう、学習用机、単体の色のじゅうたん、チューナーの付けられたブラウン管テレビ。わきにはゲーム機。本棚には、漫画が並んでいる。クローゼットの前には、制服が掛けられていた。

「最近物騒だから、夜は鍵をかけるよう言っているの。だからね、

窓も、玄関も、鍵がかかったままだったのに。晃ちゃん、どこ行っちゃったのかしら」

ほう、とため息をついている祖母は、行方が分かるようなものはない、という。何も動かしていないというその部屋は、確かに不審な点は見当たらない。千枝と雪子は、失礼します、と言ってお邪魔した。きよろきよろ、とあたりを見渡すが、確かにその通りだ。

家出にしては、おかしい。あまりにもものがありすぎる。衣服の類や生活用品の類は置かれたままで、しかも学習机には宿題や今日の準備がしてあるカバンが置かれていて、財布や定期券なんかも入ったまま。しかも着替えた形跡すらない。衝動的に飛び出した？どうやって？財布の中に家の鍵が入ったままだから、外側から鍵をかける方法はないはずなのだ。なにかトリックをしたにしろ、そんな冷静さがあるなら、パジャマ姿のまま裸足で携帯だけでもって飛び出していくはずがない。誘拐、という言葉がちらついて、千枝は首を振る。刑事ドラマの見すぎだ。実際にそんなことがあったとして、なんで晃がさらわれなきゃいけないのだ、と叱咤する。さらうだけなら、こんなに完璧犯罪なんてしなくていい。

ふと、テレビが傾いていることに気づいた千枝は、祖母に聞く。あらほんとね、と祖母はいう。よくよく見れば、なぜかブラウン管の前を払いのけるようにして、ゲーム機やコード、攻略本なんかが広がっている。散乱、というほどではない。座ってゲームをするなら、別におかしいことでもなんでもない。でも何となく気になった千枝は、祖母のためいきを聞いた。

「ありがとね、千枝ちゃん、雪ちゃん。あの子ったら、臆病な子だから、いろいろ気を使わせちゃってるんじゃないかしら？こんなに素敵なお友達がいるのに、ねえ。心配なんてかけちゃって。これからも仲良くしてくれるかしら？」

「そんなことないですよ、伸江さん。私、また晃ちゃんとあえて嬉しいから」

「アタシも、アタシも！探したいのは、当たり前です！」

「ふふ。でもねえ、学校をお休みするのは感心しないわ。今日一日、終わったら明日は絶対に学校におきなさい？大丈夫、あの子は強いもの。約束したもの。絶対に、何があっても、前を向いて歩くって。一人ですべてを投げうつことだけは、しないって、約束したものの。ええ、大丈夫」

「ごめんなさいね、と袖で目頭を押さえる祖母に、心底晃のことを心配しているのだ、と実感して、ますます千枝は探さなきゃ、という衝動に駆られる。

「ほっとしてるの。こんなに素敵なお友達ができて。ほんとうに、

よかった。よかったわ。あの子にはいつも無理させてばかりでね、今回もそう。もしかしたら、そのせいかもしれないわ」

二人の知らない晃がいる。雪子と千枝は顔を見合わせる。病気を患って大学病院に通うことになったとは知っているが、二人は詳細を一切知らない。

「あの、伸江さん、今回もって？」

「雪ちゃんは、知つてるとおもうけど、うちは八十神さんと園芸試験場さんに支援してもらって、直売所をやらせてもらってるのね。忙しい時には近所の人に手伝ってもらって、収穫や梱包、出荷を手伝ってもらってるの。うちの旦那、へんな歩き方してたでしょう？ あんまりことを荒立てたくないから、あんまり言ってないんだけど、実はね、昔の喫煙と大酒のみだったのが原因で、背中の変な部分に腫瘍がでちゃったの。幸い良性で、がんにならずにはすんだんだけど、手術の後遺症で車の運転はできるけど、今まで二人でやってきた仕事がうまく回らなくなっちゃってね。親戚はみんなこの時期は忙しくて、予定が合わなくて困ってたなら、晃ちゃんが今まで通ってた学校をやめて、こっちに戻ってきてくれるっていうの。さすがに学校をやめちゃ駄目って説き伏せて、八十神高校さんに入学してもらったの。晃ちゃんあんまり学校のこと話してくれないけど、最近はいろいろ話してくれるから何でかな、と思ったら、雪ちゃんたちのおかげだったのね」

二人は顔を見合わせた。ありがとうございました、と頭をさげる。そして、昨日晃が帰りによったと話していた、ジュネスや商店街を当たってみることにした。祖母が学校に行け、という以上、さぼるのも気が引けたが、もう我慢はできそうになかった。

唯一の手がかりらしき情報を手にした二人は、農道を帰る。

「晃こつちにきたの、去年からなんだ」

「私達、なんにも知らなかったね、晃ちゃんのこと。てつきり、一度もおんなじクラスにならなかったただけだって思ってたのに」

「ねえ、雪子。おかしくない？」

「え？」

「よく考えたらさ、入学式も一緒だったし、クラスが違っただけだったのに、なんで一度もアタシ達会わなかったのかな？普通だったら絶対どこかで見かけたり、あったりするはずだよ？明日来る転校生みたいにな、同じ学年だったら噂になったっておかしくないよね？」

「そういえば、そうだね。でも、伸江さん、入学したのはアタシ達と一緒にだつて。嘘ついてるようには思えなかったよ?」

「でも、やっぱりおかしいよ?なんで気付かなかったんだろ」

「……千枝、もしかして」

「うん。アタシもそう思う。5年ぶりに帰ってきたら、みんな変わったちゃうよね。アタシだったら、こわいよ、すつごく。一番仲良かった雪子だつて、その、今はアタシもいるじゃない?雪子を気遣つて、自分はすつごく不安なはずなのに、距離をどう取つていいかわからない、なんていうくらい、優しい晃だもん。居づらいんじゃないかな?」

「でも、初対面でも、普通にはなせてたよ?」

「そりゃ、4月はみんな初めて同じクラスになった人だつていっぱいいるもん。3学期はもうみんな顔覚えちゃつてる。アタシだったら、4月がいいなあ」

学校のことあんまり話してくれない、という言葉が決定打だった。

「やっぱり、私、避けられてたんだ」

「そんなことないって、雪子！晃、言ってたでしょ？もうどこにも
いかないって、ごめんねって！そんなこと言ったらダメだよ！」

「うん」

「やっぱりなにかあったんだよ。がんばって探そう？」

最後に立ち寄ったのがジュネスと商店街なら、何かあるかもしれない。
いはやる気持ちを抑えつつ、二人は帰路を急いだ。

第13話 あなたをさがして

携帯電話を切った千枝は、ため息を付いた。

失踪した日の晁の足取りは大体把握できたものの、居場所を特定出来そうな情報は収穫できずに終わった。部活が終わった晁は雪子の母親の見舞いのため家を開けた祖父母のメールに返信したとおり、ジュネスに寄って、棚のそばに置いてある期限間近の揚げ物とサラダを買っていた。財布に入っていたレシートにある時間帯を考えると随分とのんびり買い物をしていたようだが、流石に逐一で何を晁が考えていたのかは分からない。目撃証言などがあればいいのだが、なかなかである。

千枝と雪子は晁がいたのだろう場所をたどっていた。

もう学校は終わっているハズの時間帯だ。制服姿の雪子や千枝は目立はしないけれど、警察の真似事ができるほど簡単なものでもない。一応公園で夕方になるまで時間を潰した二人だ。なにせ、ただでさえ水面下ではアナウンサーの女性が行方不明であり、警官姿の人がちらほらと見かけられたので補導されるのはゴメンだった。その上中学校ではかわいいものだったが、高校ともなれば少しだけ商店街のおばちゃんや知り合いの人から伝わる社会というものの、世間というものも気になってくる年頃である。実際に歩いてみて分かったが、随分と晁は寄り道をして帰るのが好きだったようだ。商店街の惣菜大学や神社やシャッター街とかしている店店という代わり映えのない街を、まるで初めてきたかのような物珍しさで歩きまわってきたようである。その日はともかく、二人が晁について聞いてみると、やはり特定時間になると必ず時間つぶしに現れる若い子は珍しいらしく2月ごろから時々現れていたようだ。学校には行きづらいから祖父母には行く振りをしていたのだろうか。いや、流石に3ヶ月以

上不登校ともなれば学校から連絡が行くはずであり、祖父母が把握していないのはおかしすぎる。おそらく、学校にいくのは4月からということなのだろう。

目撃証言はもう望めそうにない。肩をすくめた千枝は、雪子にそろそろ行こうと呼びかける。励ますように、いこいこ！と笑いかける千枝のジャージを弱い力ながら引つ張る手がある。次はジュネスだ。振り返れば、表情が曇っている雪子の姿があった。

「ねえ、千枝」

「ん？どしたの？雪子」

「晃ちゃん、大丈夫だよね？」

「アタシも不安だよ、正直さ」

ここは不安を払拭してしまうくらいきっぱりと断言してしまう方が楽だし、おそらく雪子も望んでいることは分かっているものの、千枝は目を逸らす。先程あった晃の祖父からの電話が、そうさせてはくれなかったのだ。

もともと嫌な予感はしていたが、雪子からの情報と晃の情報を比較すると、晃の失踪はあまりにもアナウンサーの失踪した時の状況下が似すぎているのである。窓も扉もすべてが鍵がかかっていて、外出した形跡もなし。外に出て行くにしてはモノがありすぎるし、靴すらないのはおかしい。何よりも目撃者はおるかモノ音すら聞いた人間がいけないのはおかしい。ただの高校生とアナウンサーだ、全く共通点も距離的な意味での接点もないとはいえ、失踪した時間帯を考えると着目してしまうのも無理はない。しかも、直接的な接点が

無いとはいえど、間接的に言えばアナウンサーは天城屋旅館に宿泊していた客人である。そして晃は雪子と親交があり、晃の母方の親戚が天城屋旅館に時々パートとして働いているということで、天城屋旅館を通してつながっている。その上、晃の祖母の話ではなんと晃は雪子が不在だったため知らなかったのだが、クラス分けをして雪子と千枝が同じクラスになり喜んでいた放課後、帰宅途中で天城屋旅館によっている。母屋でお手洗いに少し邪魔したらしいが、もしかしたら何らかの形でアナウンサーを目撃した可能性がある。もちろんアリバイが確定している上、距離的な意味での問題から流石にアナウンサーの失踪に関係がある重要参考人という見解は見せていないようだが、何かを目撃したかもしれないと警察は思っているようだ。そうでなければ、高校生の不在をすぐに届け出た際に交友関係で遊びに行っている可能性があるという姿勢を一切見せず、いきなり警察が幾度も話を聞きにくるなんてありえないだろう。ふたりのことは黙っておいてくれたようだが、気を付けるようにと忠告してくれた晃の祖父母に気を使われ、迷惑をかけてしまったことが二人の気分を重くする。

でもさ！、と千枝は雪子の手を握り、二カッとわらった。ぱちぱちと瞬きする雪子に、千枝は自分に言い聞かせるように元気な声でいった。

「晃はもつと不安なんだよ、きっと。警察が見つけてくれるんなら、それでもいいでしょ？アタシたちが沈んじゃだめだよ。きっと」

「そう、だね。アリガト、千枝。そうだよ、私たちが頑張らないと」

商店会を抜けた先は、MOEL石油というガソリンスタンドが見えた。確か雨が降っているにも関わらず向かっていく晃を目撃した人

がいた。何しに行ったのだろうか。少しでも情報が欲しくて、千枝達は駆け足になる。すれ違いざまに車が通り過ぎていく。子供連れのようなが、平日のこの時間帯には少々珍しい。なんとなく振り返った雪子だが、千枝に言われて慌ててあとを追った。ぽつりぽつりとコンクリートに黒い点が広がってきていたからである。

「やばっ、雨降ってきた！ガソリンスタンドに避難させてもらおう、雪子。やばいよー、どーしよ、折りたたみ傘どこだったかなー」

「たぶん通り雨だし、ちょっとだけ雨宿させてもらってもいいんじゃないかな？」

案の定、下校途中だと思っただけ雨宿させてもらってもいいんじゃない、奥の休憩室を勧めた

天気に加えて時間帯的に考えても集客が見込めず暇なのだろう。何人か自販機やタバコで暇を潰していた。居座る理由が欲しくてリボンシトロンを買った二人は、話が聞けそうな人を探してみる。外は本降りとなっている。天気予報どおり夕方頃から天気が崩れて明日からは本格的な雨だと告げていたとおりになりそうだと気分も萎える。やはりアルバイトあたり？と相談している時に、声をかけてきた人がいた。晃がガソリンスタンドで何をしていたのか聞きたいのである。

すると、思わぬ幸運は自ら姿を表した。

原付で高校に登校しているならともかく、ガソリンスタンドに高校生が行く理由は殆ど皆無だろう。思いつきそうな理由はただ一つ。なかなかの重労働で接客も大変らしいが、アルバイトを募集していると教室で話していた男子の会話を思い出し、適当にでっち上げた千枝だが、そっか、と穏やかな性分らしい青年はごめんね、と肩を

すくめて柔らかく笑った。

「君たち、高校生？残念だなあ、ついさっき来た子で採用が決まっちゃったからアルバイトは締め切っちゃったんだ。ごめんね。また今度来てくれるとありがたいね」

「あ、そうなんですか。だってー、雪子。残念だね。せつかく晃が言ってたのにさ」

「うん、そうだね」

「…………へえ、お友達の紹介？」

青年はガソリンスタンドのロゴが入ったキャップを少しだけ下げると、ほんの少しだけトーンを落として聞いてくる。千枝と雪子は青年の態度を測りかねて顔を見合わせるが、素知らぬ顔で話を続けた。てつきりガソリンスタンドのアルバイトについて聞きにいったばかり思っていた二人は思わぬ反応に動揺を隠せない。わざわざ珍しくもないガソリンスタンドを見に行ったのだろうか？確かにMOEL石油なんてネタ以外の何者でもないけれど。

「あれ？昨日、アタシたちみたいな制服きた子、きませんでした？」

「えっと、髪が黒くてこれくらい短い、身長はお兄さんくらいの子で、神薙晃ちゃんっていうんですけど」

「…………神薙？昨日は知らないけど、その珍しい苗字の子なら覚えがあるね。数ヶ月前に、お祖母ちゃんと一緒に来てたな。君たち、お友達？」

「はい、友達です」

「あの、数ヶ月前ってことは、2月くらいですか？」

「2月の……そうだね、下旬くらいかな。春休みに入ってるのに制服来てるから珍しいからよく覚えてるよ。なんでもおばあちゃんの手伝いをするとかでね、外から来てるんじゃないかな？」

アルバイトで採用した子と同じで長旅でつかれてたのか、気分が悪そうだったけど大丈夫かな、と青年は心配そうに先程走り去った車の方を眺め見た。

「その子は、昨日来てたのかい？」

「行っただとばかり思ってたんですけど……」

何のためにガソリンスタンドによったのだろうかと首を傾げる二人に、青年は思い当たる節があったのか、もしかしたらと話してくれた。

「もしかしたら、マヨナカテレビのことを教えてくれるつもりだったのかもしれないね。いつも僕はこの時間帯にシフトを入れているから。昨日は……いなかったんだ」

「まよなか……？」

「テレビ？」

「うん。最近ちょっと流行ってるらしいんだ。ちょっと気分が悪そうだったから、気晴らしにって教えてあげたんだ。試してみたら、

結果を教えてくれると言ってたしね」

青年は教えてくれた。マヨナカテレビとは、この街で数年前からすこしずつ流行り始めている都市伝説のことらしい。真夜中0：00にテレビを消して画面を眺めると、運命の相手が見える、というもので、それはどこことなく学校の怪談でいう鏡関連の話を連想させた。条件は外に雨が降っていること。部屋を真っ暗にしておくこと。そしてひとりで見ること。君たちも試してみたらどうだい、と怖がらせたいのか、ぞっとするような笑顔で微笑む青年にどぎまぎしつつ、逃げるように二人はガソリンスタンドをあとにした。帽子でなかなか目元が見えづらく表情が読みにくかったが、顔立ちはなかなかだし身長もあるし、あまり見かけないようなタイプの美形だった。マヨナカテレビかあ、とつぶやく千枝だったが、あんまり関係なさそうだね、と反応の薄い雪子に大いにうなづく。マヨナカテレビの噂は気軽に試せそうでなかなか楽しいものがありそうだが、いかんせん晃が行動に出た時間差が大きすぎる。噂を聞いたのが2ヶ月くらい前ならすぐにでも報告を上げそうなものである。4月より2月の方が気候は安定しないし、雨の日も多かったと二人は記憶しているからだ。ちょうど狙ったように今日も雨だが、流石にそんな気分にはなれない。

小雨になった街路樹に行く。

「花村に電話して、一度きいてみよっか？」

「そうだね、お願い出来るかな、千枝」

「任せといて！さー、レッツゴー！」

雲をつかむように分らない、晃の足取りに浮かぶ不安を振り払う

ように、二人の足取りはどこまでもまっすぐだった。

4月12日火曜日 朝

「俺の運命の相手は、山野アナだーっ！」

先週の朝、登校早々この痛々しい発言を叫んでいた本人は、すっかり落ち込んでいた。雨の日の深夜0：00に電源を切ったテレビに映った相手が運命の人。マヨナカテレビという噂を実行してみた彼は、1度目はぼんやりとしか女の人の輪郭しか見えなかった。次の日試した2回目で、テレビで今話題になっている議員秘書と不倫関係にあったテレビ局のアナウンサーが見れたと興奮気味に友人に語ったのである。なぜ落ち込んでいるのかといえば、そもそも彼が再びマヨナカテレビの噂を話したときに信じていなかった友人たちに否定されるのが悔しくて、今度はみんなで見ようと提案したのである。その日から体調不良を理由に欠席している一人は置いて、もう一人もマヨナカテレビを見ることができたと信じてくれはしたが問題は、なんと彼の友人もまた山野アナを見たというのである。三角関係ってことか、どういうことだ。当然疑問はわきあがるわけで、一昨日もずっと休んでいる友人を待っているわけにもいかず、もともと3人組のうち一人だけ隣のクラスの人間だった彼は、隣の席のクラスメイトも巻き込んで昨日もう一度マヨナカテレビを見たのである。その結果がこの落ち込みようだった。3人とも山野アナを見たのである。ここでマヨナカテレビは、運命の人を映すわけではなさそうだということに気づいた彼は、すっかり落ち込んでしまったというわけだ。元気出せよと肩をたたきながら、友人は笑う。マヨナカテレビおもしろいじゃない。まあ、たしかに、と彼はため息をついた。昨日はまるでメロドラマのように嫉妬に狂う山

野アナが、無我夢中で演歌歌手の美鈴のポスターを破って絶叫するという度迫力の映像が見られたわけである。どういう原理で放送しているのかはわからないが、なかなか面白い。今度もまたみようよ、とクラスメイトがくくったところで、話題はなかなか登校してこない女子生徒に話題が移る。

「また休みなんだよな？神薙」

「あー、下駄箱見たけど靴なかったし、今日もたぶん休みじゃね？バス通ならもう遅刻確定だし」

「神薙って、そのずっと休んでる女子の？」

「そうそう。りせちーファンなんだってさ。まじでどうしたんだろうな。風邪？」

「さあ？でもさ、一昨日から何回もメールしてんだけど、全然返信ないんだよ。メールしたら速攻で返信してくんのが。やっぱり携帯触れねえほどなんじゃね？インフルエンザ？」

「季節はずれにもほどがあるだろ。アイツ結構真面目なやつだからさ、連続遅刻記録を着々と8日に伸ばした誰かさんみたいにサボりはしないだろーし」

「うつせーよ。あーあ、せっかく俺が直々にりせちーの初回特典つきDVDセット持ってきてやってんのに。早くこねえかな、神薙。結構重いし、もろきんに見つかったら結構ピンチなんだけど、俺」

「気をつけたほうがいいよ、もろきんりせちーファンらしいし」

「げ、マジで？」

うつわ、引くわ、と彼らは笑った。遅刻魔と揶揄された彼は、がらがら、と戸の開く音がして視線を向ける。ちょうど里中と天城が入ってくる場所だった。二人してそろって昨日欠席している。何があったのやら検索する気はないが、中学校が同じだったらしいクラスメイトがいうには、結構二人でサボって遊びに行くことがたまにあったらしい。案外真面目ちゃんじゃないのか、と意外に思いつつ、彼は席を立つ。もともと里中の席だ。わり、勝手に借りてる、といえば、いいよとあっさり許してくれた。不自然に増やされた席数で作られた座席表はくじにより里中の隣席が不自然に空いている形になっていた。よく彼の仲間内の席が近いため、よく勝手に使っているのだ。おはよう、と軽く挨拶を交わした彼は、立ったまま思いついたように里中に聞いた。

「なあ、そういえば里中と天城って神薙と仲いいよな？」

「え？あ、うん、まあね。よくどっか遊びに行ったりするけど、なに？」

「晃ちゃんが、どうかしたの？」

基本的に男子の対応は里中が受け持っている。珍しく天城が食いついてきて、よっぽど仲がいいんだなと思いつつ彼は続けた。

「神薙、今日も来てないじゃん？何でかしらねーかな、と思ってさ。DVDとCD貸す約束してたのになーって気になって。メール送ってんの返信ねえし。病気らしいけど、何か知ってるか？」

「せっかくマヨナカテレビのこと一緒に笑おうと思ったのにな。こ

いつ、山野アナが運命の相手だとかいってえこと叫んでやんの！」

「なんで今？なんでこともあろうに今いうんだよ、こんの馬鹿！」

「あ、あれ、君だったんだ？ふーん、そっかー」

里中のにやりに彼はぎゃーっと叫んで、口を滑らせた友人を羽交い絞めにする。

「・・・・・・・・ごめんね、知らないの」

「そっか、ごめん。みんなでマヨナカテレビ見ようって約束した次の日から来なくなったからさ、ちよっと心配してるんだよ」

「そうそう、こいつが運命の人が見えたってうるさくてさ、みんなで見ようってことになったんだよ。もしかしてそのせいで体調崩したとかだったらどうするよ？寒かったしなあ」

「げ、マジで俺のせい？」

彼はぎよっとする。ようやく拘束から抜け出した友人が、責任取れよー、DVD一枚譲渡くらい在意気込みで、とはやす。ぐっ、た、確かにでもこれは観賞用しか確保できてない一品もの・・・・・・・・！とどうでもいい漫才が始まる。あはは、と里中は笑ったが、天城がふと顔を上げてそれをさえぎる。いつにない真剣な声に、思わず男子生徒たちは固まった。

「マヨナカテレビっていったよね？それって、あの、雨の日の真夜中にテレビを見るっていう噂のこと？」

「え？あ、おう。まあな。へー意外だな、天城ってこういうの興味あるんだ？」

「もし見たいなら、画面触っちゃだめだぜ？消えちゃうから。なんかこう、波紋えがいてさ、消えちゃうんだよ」

「え？あ、えーっと・・・・・・・・うん。わかった」

助けの視線を汲み取った里中が、すかさず運命の人発言を穿り返し、彼らの話題を掻っ攫う。ひとしきり彼のいじりが終了したところで、噂好きのクラスメイトがいい加減話題に飽きてきたのか、今日来る転校生について口にしたので男子生徒たちの関心はすっかりそっちにうつってしまふ。やがて登校してくる生徒の数も増えてきて、彼らは隅のほうによっていった。

男子生徒たちを見送った二人は顔を見合わせた。

「・・・・・・・・千枝」

「うーん、まさかの振り出しかー。いいヒント得たと思ったんだけどなあ」

がつくしと千枝は肩をおとした。昨日、晃の行方を突き止めるべく彼女のたどった道のりを巡っていった二人は、最後の仕上げにと花村に電話して晃を見かけていないか聞いたのだ。ジュネスのアルバイトリーダーをしている花村である。よく学校で晃と出荷する野菜がどうこう、搬入がどうこう、と家業の仲介をよくしているのが見かけられる。学校が終われば部活もせずにアルバイトに精を出している花村ならば、従業員やパートを通じて晃がどこらへんを巡った

のかわかるかもしれないと思ったのである。まるで探偵のようなあら捜しにさすがに難色を示した花村だったが、二人が一日かけて得た晃の失踪事件について洗いざらい説明すると、あー、と思い出したかのようにつぶやいた。やはり警察がすでに捜査したあとだったらしい。父親の話の思い出しながら断片的に教えてくれた花村によれば、晃はレシートと同様のものを購入するついでに、なぜか家電売り場に足を運んだらしい。少し気になる点といえば、それくらいだ。晃の家はすでに地デジに対応したテレビしかおいていなかったことを思い出した二人は、少しでも取っ掛かりになるのでは、と思っていたのだが、どうも検討はすれなかったらしい。

レシート通りの買い物をしたのなら、彼女の買い物経路は家電売り場を通るのだ。これは昨日確かめたからわかる。展示品のテレビにぺたぺた触っていたという不審行動も、マヨナカテレビを見るという約束を前提にすれば何のことはない。衝動的に試したくなっただけだろう。波紋を描いて消えてしまうというマヨナカテレビ。真夜中でなくても、もしそんな話を聞いた後なら、なんとなく試してみたい気がする。買い物途中で大きなテレビがあり、しかもあまり店員がおかれていない上、人も少ないとなれば、こっそりと。映像が写っているテレビではなく、電源の消えた展示用の商品ではない大型薄型テレビに手を伸ばしたのだから、マヨナカテレビが頭をよぎったのは間違いないだろう。

これで晃の行方をたどれそうなヒントは尽きてしまった。正直気分が重い。はあ、とため息をついた二人。千枝はうーん、とあごに手を当てる。ここ数日間ずっと頭を使っている気がする。知恵熱でも起こしてしまいそうだ。

「マヨナカテレビかあ、なんか手がかりなのかな？アタシ全然スルーしてたよ。雪子、やってみた？」

「ううん、やってない」

「ははっ、だよねえ、当然だし。でもさ、晃がマヨナカテレビを見てからどっかいつちやったんなら、もしかしたら何かヒントあるかも。これ以上打つ手なしって落ち込むよりはさ、やってみない？ 今度」

「うん、わかった。なんか晃ちゃん見ちゃったのかもしれないし、雨降ったら見よう、千枝」

なんだか展開がホラーじみてきたぞと心の中で感じながら、二人はあたりを見渡す。まだ花村はきていない。もし来たのならば、家電売り場の詳細について聞かなければ。晃がなぞの行方不明になつてから、すでに3日が経過している。無事であることを切に願いながら、心のどこかではまさかにおびえている。何もできない無力な自分を自覚しなくて、雪子は小声でいう。

「……ねえ、千枝。今日はジュネスの家電売り場、いつてみない？」

「そーだね、昨日はスルーしちゃってたし。終わったらそっこー帰る？」

二人はうなずいた。

時計ではまだHRまで時間がある。がらがらがら、と普通よりやけにスローな音に振り向いてみれば、死に掛けている花村が登校してきていた。別のグループが転校生についての話題で盛り上がってい

る。そういえば隣は空席だ。転校生が隣ならやつぱり面倒見なくちやだめだよね、と千枝は思った。2年生からの転校生はなかなか珍しい。晃の家庭事情を思い出した千枝は、どことなくほうつておけない衝動に駆られる。ちら、と視線を向ければ、雪子もうなずいた。それはそれとして。挨拶を交わす余裕もないのか、そのまま慎重に慎重にいすに座った花村は、がくくしと死んでしまった。聞きたいことがあるのに、といらつとしつつ、何死んでるの、と発破をかければほつといたげと悲痛な叫びが聞こえてくる。くすつとわらつた二人だった。

第14話 あかしくれこーどのほづぶく

クマがいない。ゲームやドラマCDでのみ存在が示唆されたものの、最後まで出てこなかった住処とやうに生息しているのだろうか。スカジオに幾度も足を運んだが、出会うことはかなわなかった。霧が濃くなってきた世界で、ひたすら薄い場所を探していたが、結局私はあの男がいる辰姫神社にたどり着くしかなかった。最上階しかなかった。

「アンタは、いつからここにいるんだ？」

『散々カンナギアキラの詮索して、次は俺についてか？ああ、なるほど。お前シエヘラザードにでもなるきか？』

男は笑う。イランの伝説上の王妃である彼女ほどの才能があるならば、とつくの昔にこの心の底から歪みきった根性をしているこの男の問答なんてカンパし、むしろ仲間に引き込む聡明さがあるだろう。さすがは世界は違えどもあったかもしれない私のシャドウだ、お見通しのようなのである。ご名答、と私は苦笑いして肩を竦めるしか無い。最も史実通りなんて究極の自己愛にも程があるから、あくまで揶揄だ。最初の妻が不義を犯して別の男との経験が会ったことに激怒したイラン王が、処女の女をめとっては一夜を共にして殺すという八つ当たりにもほどがある残虐行為を繰り返していた。それをやめさせるために貞操を捧げた上に賢明さと聡明さ、そして教養をフル活用して3年も話し続け、そして子供3人も作った上に旦那を賢王にしてしまうなんてしたたかすぎる彼女には到底呼ばない。とうの昔に精根尽きはてて疲労はもはや限界に達している。でもその瞬間に私は死ぬだろうということは分かっているから、なけなしの気力を振り絞って、懸命に私はこの世界の私のもつシャドウとの対峙をひ

たすらひたすら延期し続ける手段を取っていた。

『死にたくないってか？滑稽だな。安心しろよ、お前のその余計な知識のせいでうかつに手が出せないんだからな。シャドウとしての本能とお前を殺した瞬間に俺も死ぬなんて恐怖とを拮抗させるなんて、つくづくお前はむかつくよな。さつさと俺になればいいのに』

「……なんだ、私の影響も受けてるんじゃないか」

『だからお前はもとの世界のお前は死ぬべきなんだ。んで、俺になつてくれりゃいいんだよ。意地きたねえなあ』

「ふざけるな。そんな理由で殺されてたまるか、冗談言つな、人外が。そもそもこの世界の私のシャドウなら、なんだって今でも存在していられるんだよ」

『俺の居場所を奪つといてよくぞまあそんな暴言が吐けるな、バカが』

にたりと笑っているが、黄金色の瞳が殺意に満ちていた。気圧されてはいけない。同情してはいけない。一瞬でも気を抜けば強かながらに私の存在を全否定するこいつの思惑通り、悪夢のような手段でもってこいつは精神だけでも私を殺そうとしてくるだろう。目を背ければ、切々と私が憑依したせいで失われたと主張されるこの世界の私の人生が巡り巡って私のあり方を揺さぶってくる。でも、これだけは譲れない。男が暴走してしまうことは承知の上で、私は頭をふった。

「単なる嫉妬じゃないか、くだらない」

私は鼻で笑った。男はどうしても言え、と言つづやいて押し黙つてしまう。この表情を私は知っている。かつて体験したつらい感情だ。生まれて初めて自分の特殊性と今まで抱えてきた感情を告白した時に、一言すっぱりと今まで親友として生きてきた彼女に全否定された瞬間の苦痛だ。冗談でしょ、笑えないってそれ。本気？気持ち悪いよ、晃。軽い気持ちなのだろうその言葉は、今でも心をえぐる。すべてが崩壊する、足元もとも奈落に突き落とされるような絶望が走ったのを覚えている。私が彼女に何を過剰に期待していたのかを改めて思い知らされ、裏切られたという思いが広がると同時に、あまりにも独りよがりだった気持ち客観的に見れた瞬間でもあった。顔面蒼白で、呼吸を忘れるほど辛くて、衝撃のあまり、私は彼女に殴りかかるうとまでした。でも彼女が好きであるという感情がそうはさせてくれなくて、泣き崩れるしかなかった。ただひたすら私の気持ちは冗談ではないし、一時の気の迷いではないし、私は私なのだと認めてもらいたくて懸命に情けないくらいの必死さで彼女に言い続けたのだ。私は生まれた時から男だし、女になった覚えはない。ずっと好きだったと。だから分かる。男がここまで私に強烈な殺意を抱くほど怒り狂っているのは、一方的な嫉妬だ。私はあの日、彼女に会えた。でもこの世界の私は出来なかった。たったそれだけ、でもそれ以上に無いほどの出来事の違いが、ここまで世界が違うとはいえ人生を様変わりさせるのだ。男は私の記憶を知っているようだし、無理もない。きつと、男は当時の私なのだろう。最終的にすっぱりと振られてしまったけれど、これからも友人でいてくれると柔らかく笑ってくれた彼女の笑顔に救わなかった私。理不尽なまでの劣等感を自分が抱えていることに気付かず、異様に彼女に嫌われることを恐れていた、依存していたことに気づかなかった。気づくのを恐れていた、私。5年前から芽生えたどす黒い感情が抑圧されてきたところを見ると、どうやら不幸にもこの世界の私は自らを受け入れてくれるような存在を見つけられるほどの余裕なく生きてきてしまったようだ。臆病になるのも無理はない。でも、

それは決して天城のせいではないと感じているが故の私に対する嫉妬は、私らしいと思った。

男は理性が決壊したのか、叫んだ。勢いだけの意味のない言葉の羅列。必死に抑えても抑えても止まらない涙。激情に任せ、支離滅裂な咆哮。耳を塞ぎたくなるが、背けてはいけない。嘲ることができたら、どんなに楽だろう。本当に赤の他人に憑依していたならこんなややこしい事態にはならなかっただろうに、と私は思った。アンタ最低だよ、とせせら笑えたらどんなに愉快だろう。そんなことができないことくらい、1番分かっている。私の最も大切な記憶の一つだ、汚すことなんてできない。冷酷無情に成切れない。きっと私は泣いているんだろう、目頭が熱くなってぬぐいながら、私は告げた。

「八つ当たりするな。いくら強要されても無理なものは無理だ。私は私、この世界の私にはなれっこない。所詮記憶と人格が共通してる赤の他人だろう？私にとってはとくに昇華した感情だ。いつとくが私は一度足りともアンタを拒んだ覚えはないぞ？それでもお前が私の中に帰れないのなら、それは眠ってるか消失したか知らないが、アンタの宿主様がアンタを拒否してるだけだろ。勝手にアンタの宿主様の体を奪つという散々な言い訳かもしれないが、私だって好きでいるわけじゃないんだ。勘弁してくれ」

『………… お前がそれを言うのか、本当に卑怯だな。俺がいつ生まれたのか知ったときながら、そんなこというのか』

男はポツリと呟いた。自我を持ったシャドウは、宿主に存在を否定されることで行き場を失って暴走するとクマは言っていたはずだ。私の言葉は凄まじい身勝手だが、私の歩んできた人生を全否定して、この世界の私に迎合するなんてお断りだ。突っぱねた私は、静かに

ため息を付いた男を見た。

『暴走もなし、か。はは、笑えるな』

「赤の他人にお前はカンナギアキラじゃないといわれても意味はな
いってことだろう。アンタが私にカンナギアキラになって欲しいの
と同じ理由で、私は私でありたいんだ。悪く思うなよ」

ひとはくおいて私はつぶやいた。

「でも、私はアンタを否定したことは一度も無い。だから、居場所
がないなんて思うな？ 帰れるなら、いつでも帰ってくるといい。こ
の世界の私が目覚めるか、私の中に溶け込んでしまったのかはわか
らないけど、勝手に私がいる理由は変わらない。だから、できるこ
となら協力する。だから、そのかわり、私がここにいることはかん
べんして欲しい。力を貸してくれないか？」

どこまで厚かましいんだと男は笑った。よかった、少なくとも自分
に殺されるなんて馬鹿な展開になりそうも無い。いつまでも降り続
いている雨の下、私たちは神社のしたで待ち続けていた。

『断るにきまつてんだろーが。はつきりいつて、アンタはどうであ
れ、アンタは俺にとつて、『理想の自分』なんだよ。手放してたま
るかよ。もう戻れないんだよ。俺はもう人間じゃねーんだ。ここか
ら出るには、もう、これしかないんだよ』

結局平行線のまま、何にもかわらないけれども。

ふと浮かんだ疑問を私は口にした。

「ところで、どうやってシャドウを現実世界に放り出したんだ？」

『いきなりなんだよ』

「そもそもアンタはシャドウもどきだろ、人間からシャドウになっちゃったとんでも野郎だろ、クマが人間になれたからまあ、全然おかしくはないけど。でも、いくらなんでもおかしいだろ。現実世界との行き来が出来るのは、クマだけに与えられた特権だろ。なんでただのモブが出来るんだよ」

そもそもクマは、もともと用意されたシャドウだと私は思っているのだ。結局誰のシャドウなのかすら明言されなかったけれども、あつちの世界とこつちの世界を繋ぐなんて特殊能力が無ければ、そもそも主人公達はのたれ死んでいたに違いないし、事件を解決するなんて約束を外に出すという条件と共に引き受けることなんてできなかったはずだ。設定ありきのゲームならともかく、ここはペルソナ4の世界なのである。クマはきつとあのベアード様が初めから用意したんだろう。だからなんにも覚えていないのに、一度も外に出たことも無い現実世界のことをやけに知っていて、ここの世界を冒険する上で必要最低限な役割をナビゲーションする役割を背負わされた。だって実際にクマのシャドウが出た時に、クマは星のコミュニティを持っていても関わらず、月のカードが表示されていた。干渉を受けているのだ。シャドウだから。あのベアード様に。若しかしたら、クマは知らない間に、クマはクマの目を通してベアード様が主人公達を見るための役割をしたのかもしれない。そう考えると、クマが誰のシャドウなのか、分かる気がする。だって、どんなにコミュニティを無視しても必ず上がるコミュニティは2つしかないの

だ。非公式の殺人事件を追いかける会とクマの星のコミュニティ。不自然なまでに統一されているヤスのペルソナと主人公の初期ペルソナの符号。真ラスボス考えると思いつきり出来過ぎている。まあ初代以来の原点回帰でイザナギだったのかもしれないけども、かつてはヒロインだったのがまさかあんな扱いになるとはごによごによ。まあどのみち、こいつはヤバイ、無条件にヤバイ。だってクマの存在否定である。いろんな意味で。

「言つてただろ。ここから出られないって。シャドウを追いつけたんなら、なんで自分も追いかけていかなかったんだよ」

『しるかよ』

「はあ？何言ってるんだ。あ、いや、クマの存在否定してるのは私なのか？シャドウが人間になるっていうアイデンティティ分捕ってるわけだし」

『シャドウになるって決めたんだよ。だから出られなくなったんだよ。何がおかしい』

「いやだって、クマはシャドウから人間になっても相変わらずあつちの世界とこつちの世界を繋げてたし……って、ちょっと待て。分からないのか？お前、私を引きこんだ時手が出てただろ、なんでそのまま出てこなかった？」

『アンタだけなんだよ、俺が干渉できるのは』

「マジか」

『ああ』

「にしても、クマは自我が出来てから身体が出来てたわけだから、私が憑依するにしても無茶苦茶なことしたな。空白の3ヶ月間、シヤドウは何してたんだか」

『さあな。俺は知らないね』

「自分の体だったくせに」

『アンタにとっても俺にとっても、この身体が本当の自分だろ?』

それを言われてしまつては、もう反論の余地はない。

「にしても、理想的な自分ってこれまた変な騙され方したな」

『は?』

「マヨナカテレビは、理想の相手、運命の相手、つまりアンタが好きだった天城がつつるかもっていう噂なんだぞ?どこで聞いたんだよ」

『アンタの言うらっしゃーせーの人だよ』

「……は?」

『何驚いてんだ』

「なんで?おかしいだろ。らっしゃーせーの人が運命の相手がつていうマヨナカテレビの噂をちまちま流してんだぞ?なんでアンタピンポイントで違う噂を流すんだよ」

『そっちの噂の方が新しいから、方向転換したんじゃないか？マヨナカラジオは理想の自分っていうのが主流だったんだから。だから俺騙されたんだよ。50年前の噂と一緒にだったから』

「……………は？なんだよそれ。マヨナカラジオってあれだろ、全部終わった後に、似たような事件を真ラスボスが起こしてましたよっていう後日談を通りすがりのおじいちゃんが聞かせてくれた、あれだろ？設定集にもちよろつと乗ってたあれだろ？なんだその不自然なまでの方向転換は。マヨナカテレビの噂が流れ始めたのは、数年前だぞ。なんでお前にだけらっしやーせーの人は嘘ついたんだよ。まるで実験するみたいに……………」

『実験？』

何かを思い出そうとした男は、突然立ち上がる。大丈夫か？と思わず声を上げた私は、男の背後に異常なほどのオーラが沸き立っているのを見た。これはまるで宿主に存在を否定された、暴走寸前のシヤドウ。なんで？どうしていきなり？！何度呼びかけても返事がない。霧は少しずつ濃くなっている。シヤドウとしての本能が凌駕してしまったのか。にしてはあまりにもいきなり過ぎる。不自然すぎる。一抹の期待を込めてなんとか男に呼びかけるが、まるで誰かの干渉を受けたかのように男は何も言わない。ただ一歩ずつ私に近づいてくる。恐怖がもたげてきて、わたしは少しずつ後ろに下がった。

【——死ね】

世界が、暗転した。

第15話　そしてかれはいいゆうになる

『マヨナカテレビって知ってる？』

帰りが一人なら一緒に帰ろうと誘ってきたのは、隣の席になった里中千枝という女子生徒だった。聞き慣れない単語に、月森は当然首をふった。緑ジャージにいくつもの缶バッジをつけた彼女は、屈託ない顔で笑う。じゃあ教えたげるよ、雪子もするって決めてるんだ、と傍らで歩いている真っ赤なカーディガンを着ている天城雪子という女子生徒に視線を走らせた。ね？雪子、との言葉に、へ？あ、なに？とワンテンポ遅れて天城が返す。里中は苦笑いした。なるほどと大体の二人の関係性を把握した月森は、どうかしたのかと助け舟を出してみた。やっとくるか！と一抹の期待を胸に彼女たちと肩を並べて、両手に花状態で帰宅していた月森は、またスルーか、とこっさり落ち込んだ。待っていたのは、最近はやり始めたと言う都市伝説、噂だった。田舎なのに都市の伝説とはこれいかに。

月森はもうすでに心が折れそうだった。どうして誰も俺に突っ込んでくれないんだろう。元のクラスの連中だったら、休日にも関わらず部活もないのに制服で出かけようものなら、どんだけお前は制服マニアなのだとコンマ一秒で突っ込んでくれたというのに。刑事だと母から聞いていた叔父なら、前を全開にして制服で来たら、風紀がどうたらこうたら、って指摘してくれるかなという意味不明な期待を元に駅についたが普通にスルーされてしまう始末。普通に挨拶

されるし、従兄弟の菜々子という少女にはなんだか人見知りされてしまうし、やたら握手を求められるから手汗が気になってしまうし、車酔いしたのか気分が悪くて寝たらよく分からない悪夢を見て目が覚めたし、散々だった。電車の中では恥辱もののグロムビーな夢見るし。これはあれか、スルー検定を実施中なのかとどうでもいいことに思い悩んでいた。転校早々制服を全開にしてみたのだが、今まで先生はおろか生徒も誰一人としてツツコミを入れてくれる人間は不在である。まさかのポケポジションの大量発生に、いい加減引込みがつかなくなった月森は、ここでやめたらカツコ悪いと誰と戦っているのかは不明な決意を新たに、ツツコミがくるまでこの服装を通すことに決めた。早々にちゃんと制服を着るのを諦めた。めんどくさい。どうもこの二人は、落ち武者なんて最悪なあだ名をつけられまいという衝動から誰が落ち武者だと口走った転校生である月森を横に、こそこそと内緒話をした上で話しかけてきた節がある。ようやく、つつこんでくれたモロキン先生というあんまりなあだ名を付けられている先生には、泣きたいほど感謝したのだ。なのにこっちの切実なつっこみしてほしい症候群にも関わらず。あの先生は反抗する生徒は大つきらい、リア充死ね、つか退学しろを地で行くらしく、すっかり嫌われてしまった。なかよくなりたいのになあ。何を企んでいるのだろう、と心のなかで身構えている月森である。そもそも諸岡という先生の口走った腐ったミカン帳なんて言葉、ここに居る生徒の何人に通じたか分からない高度すぎるジョークである。悔れない、とどこかずれた評価を月森は下していた。昭和のドラマの大ファンだった母の影響がなければ、金八先生のネタだなんて誰が分かるだろう。格好からして某大物漫画家のキャラをそのまま生き写しにして実写化したかのような再現率なのに、それをあだ名にしないのが良い証拠だ。勿体無い、と思いつつ月森はいわないことにする。どうにも何処かお前はずれている、天然入っているだろうと旧友に散々なじられた古傷が痛むのだ。失礼な話である。全力で面白いことがしたいだけなのだ。転校する事実を、あ、俺明日

学校休むわ、的なノリであっさりと切り出したときにさんざん言われた。どうせ理数系の特進クラスなんて女子生徒の割合が絶望的なまでに少ない野郎だらけのクラス、1年離れてもメンツは変わらないだろう。国公立や私立大学に進学する他ホームはともかくとして、哀しいかな月森の在籍していたクラスには、クラス替えなんて青春イベントは存在しない。いらないだろう、どうせメンツなんて1、2人くらいしかかわらないだし。3年に進学したらまた会えるのだ。そう言うやいなや、薄情にもほどがあるだろバカヤロウと財布がすっからかんになるまで近くの食堂でおごらされた。理不尽にもほどがある。そんな環境で生きてきた月森にとって、あまりにもボケが多いこの稲羽市で充実した生活を送るためには、やはりボケを上回るほどのボケをかまさなければならぬだろうという結論に至る。もっぱらボケ担当だ、ツツコミ役にまわるきはない。

それはさておき。天城なんて、男子生徒との会話を何処か苦手としていることがわかるほど、どこかぎこちない様子でこちらをみている。笑顔は明らかに違和感がある。何処かつかれた様子に月森は笑わせてあげたい衝動にかられるが、流石に自重した。つかれたなら、心の底から笑うことが特効薬なのだ。それが月森の持論である。里中も花村とかいうオレンジのヘッドフォンを付けている男子生徒と仲がいいようだが、別け隔てなくクラスメイトなら誰でも馴染めると言った様子でもなさそうである。2人はずっと机を向かい合わせにして熱心に何かを話しあっていたわけだから、明らかに浅く狭く、な人間関係を得意とする分類なのだろう。個人的には花村という男子生徒と知り合いになりたいと月森は目星を付けていた。里中との掛け合いなんてまるで夫婦漫才までの領域に達している。あれはなかなかにできるものではないし、月森の中では彼は先天性のお笑いの星に生まれたのではなからうか、というほどなにかと不運な立ち位置にいる。初対面が全速力のマウンテンバイクをゴミ捨て場のコンクリートの壁に激突させ、しかも今はまさに机の角にちよくにぶ

ち当てている。種なしになったら大変だなあ、と心配しつつ、里中に促されて月森は先を急いだ。つつこみの相方として、仲良くなれるかもしれない。

天城越えの単語を聞いたとき、まの字をえの字に変えた変態一色の替え歌をよくカラオケで歌ったことを思い出し、脳内ループが止まらなくて立ち尽くしていたのは内緒である。通学路もずいぶん歩き、周囲は田んぼが流れて行く。稲羽市を紹介したり、里中が天城を恋人募集中と勝手に宣伝して怒られたりしながら、月森はじつくりと彼女たちの本題を待ちわびた。

「ねえ、なんでこんな時期に転校してきたの？珍しいよね？」

来た。天城も心なし乗り出している。月森は好奇心というよりは、まるで誰かと重ねているかのようにどこか不安そうにつぶやく里中に若干の不安を覚えた。まさかどこかの誰かさんは転校しましたなんて犯人が復讐を遂げてから犯人を捕まえる探偵の孫のような展開を連想してしまい、月森は背筋が凍る。部屋のダンボールを片付けていたときに、すっかり事件簿シリーズを読んで、じっちゃんの名にかけてが出るまでに犯人を特定しようと躍起になって伏線回収に没頭していたのを思い出した。引越しとジャンプ並の危険なコラボである。何を考えているのだと脱線する頭を叱咤して、月森は言った。はたから見ればクールなイケメンである。世の中は理不尽なものだ。

「父さんも母さんも海外転勤でいないんだ。で、俺は一人っ子だから、今は叔父さんのところでお世話になってるんだ。1年間だけ」「へー、そうなんだ。なーんだ、もつとしんどい理由かと思っちゃった。あはは、ごめんね。雪子ん家って結構病気を直すとか何とかで、よく来る人いるからさ、うん」

「1年ってことは、来年には帰るの？」

「うん。残念だけど」

「そっかー、大変だね」

ほっとしたらしい里中と天城が顔を見合わせて笑った。よくわからないものの、彼女たちの持っている不安を増長させることはなかったと判断して、月森はこっそりため息を付いた。でも、驚くほど冷静だよなお前、といわれ、失礼な、状況把握して顔に出るまでのプロセスが遅いだけだと言ったら怒られたようなポーカーフエイスを携えて、月森は聞く。なにやら金田一を読んだせいでどうにも事件フラグが気になって仕方ない。なぜ里中の席が不自然に空いていたのだろう。花村の横の席があいていたのだろう。転校生である月森の席が里中なら、あの空席はなんだ。どこどのように遺跡に入った人間をミイラにして墓場に放り込む代わりに、生徒としては失踪扱いで処理してしまうような学校なのだろうかと恐ろしくなったのだ。

「そうだ、里中さん、聞きたいことがあるんだけど」

「なにになに？」

「花村ってひとの横、席あいてたよな？今日休みなの？」

二人の顔が凍りついた。言い繕おうとして、天城に止められる里中は、えーっと、その、と目をそらしてしまう。月森は本能的に地雷を踏み抜いたと察して、血の気が引くのをかんじた。まさか本当に自分が転校してくる前になくなったのかというあらぬ妄想に取りつかれてしまう。花瓶に花がおかれていないのだから考えすぎなのだろうか、と思いながら、彼女たちの返答を待つ。

「……………やっぱり、バレちゃってるよね、あはは。ごめん、何も言わないと気になるよね」

まさか、とあらぬ方向にシナリオを勝手に捏造し始めた頭を黙らせつつ、月森はつばを飲み込んだ。天城が今にも泣きそうな声で、つぶやいた。

「晃ちゃん、えっと、神薙晃って子がね、3日前から行方不明なの」「え？」

「うん、そうなんだ。変な噂立てられたら困るから、誰にも言わないでよ？実はね、晃、3日前突然家からいなくなっちゃって、行方不明なんだって。ほら、今ニュースで山のアナウンサーが天城屋旅館に泊まって大騒ぎされてるし、あんまニュースにはなっていないと思うんだけど…実は、山野アナウンサーと同じ失踪の仕方で大騒ぎになってんの」

「晃ちゃん、その、3学期からの転校生だったから、うん。悩みがあって出て行っちゃったから、月森くんもそうだったら大変だなって思ったの。ごめんね」

「転校生つつつたら、花村もそうなんだけどね。昨日の今日だから、やっぱ重ねちゃうんだ。あはは、おせっかいでゴメンね？もし何か困ったことあったらさ、アタシとか雪子とか、花村にも気軽にいつてよ？あ、アタシは勉強以外で」

予想を遥かに超越する重大事件がすでに発生しているという現実、月森は別の意味で戦慄せざるを得なかったのである。そういう話の流れの中で、里中と天城は神薙という女子生徒を探して、花村も巻き込んで探偵のようなことをやっていると聞いた月森が耳にしたのが、「マヨナカテレビ」という噂の実証だった。どことなく夢に見た女子生徒と神薙という子の外見が一致したりしなかったりした気がしたが、流石にそれはどんなフラグだと全否定せざるを得ない。おもしろいことを全力でしたい月森であっても、身の危険を感じるようなことなんてしたくないのである。彼女たちもすっかりお手上げ状態なのだという行方不明の友人探しは、マヨナカテレビの検証

くらいしかもうすることが残っていないのだと悔しそうに里中は話してくれた。流石にそんなことを明かされてああそうですかと無関心を決め込むことができるほど、月森は薄情ではない。俺で良ければなにか協力するといえ、二人は幾分和らいだものの、転校してきたばかりの月森に気を使わせてしまったことを、いたく後悔しているようでもあった。微塵もマヨナカテレビについては信じていなかったが、話の成り行きでマヨナカテレビを実行することになったのである。下校途中に堂島さん達が検証していた現場の傍らで聞いた野次馬によれば、山野アナウンサーの死体が上がったのだという。しかも、逆さづりで民家のテレビのアンテナに引っかけた状態。明らかに異様な殺人事件、もしくは事故だが、彼女たちの戦慄はますます高まったように思う。なんでも山野アナウンサーとその神薙はほとんど失踪状況と時期が同じなのだという。それはまずいと焦燥感にかられるのも無理はない。マヨナカテレビをみたらしい夜から出奔している神薙。これはますますマヨナカテレビを確認しなければという焦燥感が伝わってきていた。これは自分も協力するというのが筋であろうと思われたわけである。

雨のふる深夜0：00丁度に電源を切り、真っ暗なテレビを一人で眺めると、運命の相手が見えるという噂。マヨナカテレビをみたクラスメイトによると複数の人間が山野アナウンサーを見たことから、

少々噂とは齟齬が生じているようだが、同じ内容の番組が何故が見ることが出来るらしい。怪奇現象に代わりはない。実際に見た人があるのなら、やはり気になるのは仕方のないことだった。月森にとっての最大にして最悪の大誤算は、自分用として割り当てられた部屋にテレビが無かったため、菜々子が寝静まったことを確認してから、こっそりとリビングにある薄型テレビを見なければならなかったということだ。流石に母親のことを聞く勇氣はないため知らないが、小学一年生の娘を抱えた父子家庭の家にテレビが2台もあるのはおかしい。贅沢をいえるわけがなかった。

天気予報によれば、明日の朝には上がるらしいがしばらく霧は続くとのことである。いつもならば蛙の声がうるさくて驚いたものだが、今はさあざあと降り注ぐ雨音しか聞こえない。静かな夜だと月森は改めて思う。電気をつけてしまうと菜々子が起きてしまうかもしれないため、足音を忍ばせながら階段を降りた月森は、携帯のディスプレイを確認しながらリビングに向かう。そして、テレビの前に座り込む。遠くで雷轟が聞こえる。カーテン越しに光るものがあつて窓を見ると遅れて大きな雷の音が聞こえた。瞼の裏側が白い。しばらく瞬きを繰り返した。もしかしたら、すぐ近くで雷が落ちたのかもしれない。携帯を見ればあと数秒でマヨナカテレビの時間だ。すぐさまテレビに目を向けた月森は、携帯のディスプレイから映るヒカリを頼りに目を凝らした。そして、息を飲む。電源を入れていないにもかかわらず、じじじじ、という砂嵐にしては随分と高い音域のノイズが走り、勝手についたテレビ画面に砂嵐が映る。写りの悪いテレビのように、絵コンテが速いスピードで流れて行くような白黒が映し出されて行く。少しずつすこしずつ鮮明になっていく光景。

「……これは」

写りやがった。まじかよ。うそだろ、かんべんしてくれ、なんのフラグだよ。月森は目の前で展開される怪奇現象に呆然としているしかない。一瞬テレビが明るくなる。映し出された映像はひどく臃気である。背景もろくにわからないが、明るい日差しが見える。外の映像だろうか。隅の方には赤いものをかけた塊が両脇に鎮座している。もしかして神社の狛犬だろうか、と思った所、少しだけ映像がクリアになった。続いていく階段。必死で逃げる人影。背後から襲いかかってくる何かからその人影は逃げていた。見覚えのある構図に月森は困惑する。デジャブだ。なんでよりによってこんな時に欲求不満の塊だと片付けた映像がマヨナカテレビに映るのだ。脳裏によぎっていく夢で見た趣味の悪すぎる夢。あれは山野アナとよく似た年上の女性だったが、今回はあれだ。よく似た造形の男に羽交い締めに使われていた女の子が……。

「……」

一気にクリアになる映像。思わず凍りついた月森は、後ずさりする。なんだこれ。ワケが分からず混乱するしかない月森に、さらに非現実の現象がたたみかける。

『我は汝』

悪寒が走った。がつん、と頭に響くどこかで聞き覚えがありながら、何故か違和感のある声が響き、月森はあたりを見渡したがだれもいない。

『汝は我』

頭の中で響く声が頭痛を引き起こし、めまいを覚える。くらりとき

た月森は頭を抑えた。がんがんと頭の中で何かが暴れている。それは例えば電話で話したときに受話器越しに話している時の声であったり、あるいは部活の代表者会議でやらされた新入生向けの部活紹介の司会で持たされたマイク越しの声だったり。ふざけて旧友たちと携帯の録音機能でとった時のいつも聞き慣れているのとは違う、どこか気持ち悪い声だったり。月森は目を開けた。そうだ、これはまさか。びっしょりとかいた汗が現実を知らせる。いつの間にか肩で呼吸していることに気づいた月森は、前を見た。大型テレビでは女の子が怯えた目で何かから逃れようとしている。まさか、神薙という女子生徒だろうか。そう思ったわりに、随分と月森は自分が確信を持っているのではないかと思えるほど、その口から出た言葉は断言に近かった。もしこれが夢と程近い状況ならば。月森孝介はぞっとした。

山野アナウンサーはなにからにげていた？その先になにがあった？そうだ、わっかだ。スカートの輪っかだ。あれにつり下げられて。しかも翌日アナウンサーはどうなった？民家の屋根に逆さづりである。ひっかかったっていつてなかったか？あの主婦の人たち。こともあろうに付近には山野アナウンサーの住んでいた高級マンションがあった。そこから突き落とされた、としか思えない。月森孝介は確信した。神薙は間違はなく殺される。助けなくては、と月森は思った。テレビに映った映像であることも忘れて、月森は手を伸ばした。

『双眸を見開き、汝、今こそ発せよ』

テレビ画面に触れると、波紋を描いて消えていく映像。ふと、マヨナカテレビに触れると映像が消えてしまいうらしいと里中から聞いたことを思い出し、慌てて離れようとした月森は、テレビの向こうに人影を見た。見たこともない装束に身を包んだ、しかも武器を持っている物々しい雰囲気のある姿。だが、これまたどこかで見たことがあ

るような姿形である。しかしこればかりは何故か靄がかかったかのように思い出すことができない。何故か不思議と懐かしい感じがして、思いのほか恐怖は感じない。まさかとは思うがこれが俺の運命の相手？と見当はずれの思考をめぐるあたり月森らしい現実逃避の仕方である。手が伸びてくる。ぐいつと凄まじい力で引き込まれた月森は、絶叫を上げる暇すらなく、テレビの中に引きずり込まれた。

テレビは波紋を描き、やがて真っ暗になってしまふ。

「……？」

すごい音がして目が覚めてしまった菜々子が扉を開けてリビングを見るが、だれもいない。目をこすり、あくびをした菜々子は、きつと雷が煩いから起きてしまったのだろうと思い直して、再びフスマを閉めた。

「ぐっ……！」

どごとという鈍い音が響く。落下した月森は、地面にたたき落とされた。全身を強く打ち、凄まじい激痛に体が悲鳴をあげる。呼吸すら忘れた月森は悶絶をしてうずくまるが、容赦なく降り続く雨が月森を濡らしていく。まさか外に放り出されたのだろうかとあたりを見渡すが、見たことのない場所にいるようだ。狛犬の傍らに落ちたらしい。ここは神社？だとしたらマヨナカテレビに写っていた場所

？何故こんなところに入れてしまったのか全く状況把握ができずに混乱する月森は、一時的ではあるが痛みを忘れた。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

女の絶叫が耳をつんざいたのである。聞いたこともない声だったが、はっと我に返るには、十分過ぎるほどの衝撃だった。あわてて立ち上がった月森は、自分がパジャマ姿であることも忘れて、全速力で走る。もしここがマヨナカテレビの世界ならば、神薙という女子生徒が誰かに襲われているはずなのだ。助けなくては。それだけが月森をつき動かしていた。脳裏をよぎるあまりにも生々しい女性の最後。目前で行われているのだとすれば、助けなくては。理性も平常の冷静さも置き去りして、月森は、その金切り声目指して走った。

『汝、今こそ発せよ』

月森の衝動的な行動と呼応するように、頭の中の声がより大きくなっていく。そしてはつきりと自覚した。これは、俺の声だと。体の中で響いている声だと。ワケの分からない状況下になると、人間はそのワケの分からない状況下でしか使えない冷製で常識的で良心的な判断を下そうとする。それはその状況下においてのみ、正常である。たとえば、平常時では幻聴ではない精神状況の異常からの症状だとしても、このときの月森にとっては誰よりも代え難い味方を手にいれたような、そんな気がしたのだ。走り抜ける月森の視線の先に、禍々しいオーラを放つ金色の目をした男が女の子めがけて何かを放つ所だった。月森に気づいたらしい彼女は絶句している。月森はさらに加速した。

『我はペルソナ』

「ぺ、る、そ、な？」

体の中から声が聞こえる。

『我はイザナギ。汝、今こそ発せよ！』

「い、ざ、な、ぎっ！！」

とたんに聞こえた自身の声につられて口にした瞬間、月森の中でワケの分からない感情が爆発する。それは歓喜なのか、絶望なのか分からないが、何故か胸に込み上げてくるものがある。力任せに爪が食い込むほど利き手を握り締めれば、ヒカリが生まれる。青白い光がまるで炎のように揺らめく。やがてヒカリが収束し、一枚のカードが手の中に有った。月森は口元が釣り上がるのを感じた。その衝動に任せて月森はありったけの声を張り上げる。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！」

月森の背後から、ワイルドカードに属するペルソナ、イザナギが発現した瞬間だった。

アナライズ

LV・3

アルカナ：愚者

ペルソナ：イザナギ

初期スキル：ジオ（電撃。SP4 敵単体に小ダメージ）

スラッシュ（物理攻撃 HP消費5% 敵単体に小ダメージ）

ラクカジャ（味方単体の物理・魔法防御力を上昇）

習得スキル：レベル3の時、ラクンダ（敵全体の防御力を下げる）

電撃に耐性、闇無効。弱点、疾風。

日本神話において神世七代の最後にイザナミとともに生まれた。国産み・神産みにおいてイザナミとの間に日本国土を形づくる多数の子を儲ける。イザナミが、火の神であるヒノカグツチを産んだために陰部に火傷を負って亡くなると、そのカグツチを殺し（その血や死体からも神が生まれる）、出雲と伯伎（伯耆）の国境の比婆山に埋葬した。

しかし、イザナミに逢いたい気持ちを捨てきれず、黄泉国まで逢いに行くが、そこで決して覗いてはいけないというイザナミとの約束を破って見てしまったのは、腐敗してウジにたかられ、雷に囲まれたイザナミの姿であった。その姿を恐れてイザナギは逃げ出してしまふ。追いかけるイザナミ、雷、黄泉醜女らに、髪飾りから生まれた葡萄、櫛から生まれた筍、黄泉の境に生えていた桃の実を投げて難を振り切る。

黄泉国と地上との境である黄泉比良坂地上側出口を大岩で塞ぎ、イザナミと完全に離縁した。その時に岩を挟んで二人が会話するのだが、イザナミが「お前の国の人間を1日1000人殺してやる」というと、「それならば私は、1日1500の産屋を建てよう」とイザナギは言い返している。

その後、イザナギが黄泉国のケガレを落とすために「筑紫の日向の小戸の橋の櫛原」で禊を行うと様々な神が生まれ、最後に天照大神^{あまてらす}・月夜見尊（月読命・つくよみ）・素戔鳴尊（建速須佐之男命・すさのを）の三貴子が生まれた。イザナギは三貴子にそれぞれ高天原・夜・海原の統治を委任した。

『ちつ、面倒な奴が来やがって。なんでお前がもうここに居るんだよ。随分と速いお出ましじゃないか』

男は舌打ちをする。むしろ初対面なのに何故月森のことを知っているのか、とか、なんでここに来ることを予期していたかのような意味深な発言をいきなりかますのかとか、いろいろ突っ込みたいことはあるが月森は一切を無視した。呆然としている女の子の元へ走った月森は、かばうように立ちふさがった。

「大丈夫？」

「——だ、い、じよ、……げぼっ」

心配するなと伸ばされた手。それが嘘だとすぐに分かった月森は見咎めの視線を送る。それとなく避けると、月森はゆっくりと男と自分の前に降り立つイザナギの背中を見据えた。すでにぼろぼろのパジャマと血色の悪い顔色、しかもところどころに暴行の後。おそらくこの男にされたのだろうことは明白だ。裸足で、しかも雨に打たれている彼女はびしょ濡れである。取り繕おうとするが、声はすでに死にかけている。ろくに言葉も話せないのか、激しく咳き込んでいる。衰弱しきっている彼女は、疾走していた神薙晃で間違いないだろう。

「俺は月森孝介。君は、神薙晃さん？」

目を見開いた彼女は頷いた。

『邪魔するなよ。これはこいつと俺の問題だ。お前は引っ込んでろよ』

「断る」

『じゃあシネ。俺はこいつじゃないし、こいつは俺じゃない。だから、こいつは邪魔でしか無いんだよ。——まだ俺は、死ぬわけにはいかないんだ。まだ……やらなきゃいけないことがあるんだよ。そこをどけ！』

「できるか」

『お前に何が分かる。俺は俺なんだ、なんだってどうでもいいことに囚われて、言いたいこともろくに言えないまま消えていかなきゃいけないんだ！俺の気持ちがお前に解ってたまるか！俺は、俺は……！途中から男になったわけじゃない！初めから男なんだ！女になった覚えはない！なのになんだってこいつは俺のくせに何も失ってないんだよ！在るが儘の自分を受け入れてくれるような人がいるんだよ！なんで俺だけこんなに苦しまなきゃいけないんだよ、ふざけるな！』

支離滅裂な言葉の羅列。ヒートアップして行く男の激情は、やがて咆哮に変わる。禍々しいオーラがぐるぐるすると取り巻いて行く。いっしか雨は上がり、そのかわりに血のような真っ赤な空が広がっていた。月森は男の言動をどうにか理解しようと務めたが、どうにもこの男の姿をした化物と神薙晃という少女の接点が見つけれず、困惑を極める。男は、真っ赤な血の色に変色して行く。ばきばききという音と共におどろおどろしい形相へと変化を遂げ、大きな角が生えて行く。どこから繰り出したのか、巨大な鉄の棒を振り回し、雄叫びを上げた。

人は嫉妬に駆られると、鬼に変質するという民話がある。羞恥に駆

られると鬼に変わるといふ民話がある。しかし、鬼というにはあまりにも猛々しい。そしてどす黒いものがある。何よりも、その姿を覆い隠す黒い黒いものは、まるで女の身体の造形にあてはめられたように、苦しそうながっちがちの拘束具ある。まるで女子生徒の制服みたいな、そんな歪な造形である。

これが月森孝介の前に現れた、最初の敵、シャドウである。

アナライズ

神薙晃の影

LV・3

アルカナ：愚者

名称：暗黒天

本来電撃耐性なのだが、彼がこの感情を抱くに至った雨の日、雷鳴がなっていたことにより、雷使いでありながら、雷を弱点とする矛盾を持っている。

元人間であつたため、アトラスの伝統により、光に対しては耐性がある。

スキル

淀んだ空気（敵味方全員の状態異常付着率が上昇する）

マズルシユート（物理攻撃。HPの9%消費。敵単体に小ダメージ（魔封）

ジオ（sp4 敵単体に小ダメージ）

吉祥天の妹。また閻魔王の三后（妃）の1人ともされる。

中夜を司り、不吉・災いをもたらす女神。

黒闇女、黑夜天、暗夜天、黑夜神、あるいは別名“黒耳”（不幸・災難の意）などとも呼ばれ、その原語は、元来“世界終末の夜”を

意味する。

つねに姉の吉祥天と行動を共にするが、彼女の容姿は醜悪で性格は姉と正反対で、災いや不幸をもたらす神とされる。

『涅槃經』12には「姉を功德天と云い人に福を授け、妹を黒闇女と云い人に禍を授く。此二人、常に同行して離れず」とある。

吉祥天という女神が七福神の中に入れない理由は、この姉と妹は表裏一体であり、常にいなければいけない運命にあるため。

ヒンドゥー教では、別名である原語の“黒耳”が擬人化され、シヴァ神の妃であるドウルガーと同一視され、またヤマ（閻魔）神の妹とされた。

ただし、『大日經疏』10に「次黑夜神真言。此即閻羅侍后也」などとあることから、密教では中夜を司り閻魔王の妃とする。

彼女の図画は胎蔵界曼荼羅の外金剛部院に確認できる。その姿は肉色で、左手に人の顔を描いた杖を持っている。

手をつかまれて振り返ると、神薙が必死で首を降っていた。にげろ、にげて、はやく、と口の形だけが先行し、声はこぼれこぼれにしか聞こえない。月森は首をふった。

「あれ、は、このせ……の、わた、の、うほっうほっ」

「しゃべらないほうがいい。ここは俺に任せて」

神薙は絶望しきった顔で首を振る。はやく逃げてくれと懇願する手を振り払い、月森はいつの間にか手元にあったカードを握りつぶす。ぱりん、という音が聞こえた気がした。

「こい、イザナギ！」

『死ね！』

豪快に振り下ろされた金棒から衝撃波が飛ぶ。呼び出されたイザナギがすかさず身を翻して、月森達の前に現れた。何故か来ない衝撃。まるでイザナギを避けるかのように衝撃波は二分し、背後の木々を豪快になぎ倒す。あつという間に藻屑とかした木々が揺れる。神薙は絶句していた。月森はほっと息をはくと、頭の中に浮かんだワードの中からふさわしい言葉を選びとる。

「ジオ！」

古来より雷は神々の力の象徴である。放たれた雷撃。吹っ飛ばされた鬼は、どうやら弱点だったらしく動きを封じられた。月森はすかさず頭の中でイザナギが使える技を見比べて、この敵を倒すための

戦術を重ねる。

「ラクンダ！」

防御力をさげるイザナギ。いらついたように叫んだ大男は鬼へと完全に姿を変え、大きく金棒を振り上げるとイザナギに襲いかかった。だが、イザナギの方が速かった。軽い身のこなしで避けたかと思うと、翻弄するように背後につく。イザナギが発現するのはほんの一瞬间で、もしあの一撃をくraidでもしたら月森も神薙も待ち受けるのは死というのは明白だ。まるで宿主を守るために少しでも遠ざけようとしているのか、誘導するイザナギ。怒り狂った鬼が振りろした一撃は空ぶった。

「ラクンダ！」

だが、これでは終わらない。流石にイザナギの出現するタイミングを把握したのか、実体化した瞬間を捉えた鬼の豪快な一撃がイザナギに炸裂する。全身に走る痛みに月森は絶叫した。突然苦しみ始めた月森に慌てた様子で神薙が背中をさする。心配そうに覗き込む神薙に、大丈夫だとやせ我慢で笑った月森は、もう一発食らえば死ぬだろうと自覚した。イザナギは汝は我といった。どうやらダメージはこちらにそのまま還元されてしまうようだ。一撃で、仕留めなければ。しびれの走る拳を振り上げ、月森は叫んだ。

「駆ける、イザナギ！スラッシュ！」

第16話 ひとはそれをこいという

女性アナウンサーの死体が上がった。転校生の月森くん、そして千枝と共に帰宅途中で遭遇した揺るぎのない衝撃の現実には、雪子は打ちのめされそうだった。一緒に帰ろうか、と心配してバス停までついてきた千枝に頭を振って笑った雪子は、バスの中で携帯電話の使用を抑えるというアナウンスを無視して、メールを送った。帰宅したら、入院している母への見舞いや旅館の人々と共にマスメディアやお客人を迎えたりする段取りが山積みだ。その打ち合わせに余念がなく、ひっきりなしにうつメール。最近メールを打つ速度が上がった気がする。雪子と思う。いつもそこまで使う機会のない携帯電話はあつという間に真つ暗となつてしまい、じつと雪子はバスにゆられながら待ちわびた。

雪子は帰宅してから、あわてて部屋に駆け込むと充電器につないで、一度晁に電話する。もしかしたら、もしかしたら、という期待を捨てきれない僅かな希望にすがって、雪子は耳を傾けた。日を重ねるにつれて、旅館に尋ねてくる警察や旅館の人たち、そして家族を見ていると否が応にも感じてしまう、もたげてくる最悪の結末から少しでも逃避したいのである。言葉ではいくらでも晁の安否を気遣う声は聞こえた。雪子を気遣う、励ます優しい優しい言葉、なんとか安心させようとする人々。だが、精神的に消耗する自分を自覚する雪子は、心の余裕をなくしつつあるようにあると気づいている。疑心がどうしても混じってしまう。もしかしたら、みんなもう晁が死んだんじゃないかと思っているんじゃないだろうか、なんていう恐ろしい妄想。雪子は頭を振る。

晁が行方不明になってから、何度目になるか分からないメールを送

るものの、一向に返信はない。電話をしても電源を切っているか電波の届かないところに携帯電話があるという女性のアナウンスが雪子をひとまず安心させるに至っている。携帯電話がその機能を失わずに通信機能がまだ健在であるということは、携帯電話が壊れた、もしくは破壊されたという結末はとりあえず消去されてほつとする。もし、もしだが、晃が何らかの事件に巻き込まれたのだとしたら、唯一紛失している携帯電話は彼女の唯一の持ち物であり、いつまでも持っているということは事件に巻き込んだ誰かがいるとしたら、それは邪魔でしかない。携帯電話は受信した地区から探知で搜索できるから、真つ先に処分対象になるはずだという知りたくもないことを聞かされた雪子は皮肉にも安堵を得る形になっている。もし誘拐事件ならば、まだ犯人は晃の携帯を破壊するまでにはいつていない、つまりまだ生きているはずだというお粗末にもほどがあるが、無理矢理にでも作り上げた理論だ。限りなく猫箱だが、晃はまだ生きていると信じる以上それが雪子の真実だった。警察が躍起になって女性アナウンサーをあらゆる手段を持って探していたとき、何度も目にした光景なのだ。アナウンサーの親族や友人から携帯電話を探知し、場所を特定しようという試み。携帯電話はコールが入る前に、幾度か、ぷっぷっぷという音が入る。これは長く続けば続くほどそれだけ遠い中継地をまたいで電波を飛ばしている証だそうだ。警察が躍起になった理由の一つは、この探知によって特定された中継地はいずれもこの八十稲羽市内だったということだ。さすがに具体的範囲までは教えてもらえなかったものの、不幸にも死体となつて見つかった女性アナウンサーの発見された場所に迅速に警察が動くことができた理由は、お察しあれということだと雪子はわかっていて。電話する度にコールに入るまでにかかる電子音は、女子アナウンサーの携帯電話と同じ回数なのである。そしてそのコールすら途絶えたときを雪子はお手伝いのおばさんから聞いていた。警察はいっつになく焦って旅館のみんなから事情聴取を行っていたのは、いつだった？つまり少なくとも晃は此の街のどこか、近くにいるは

ずだと雪子は信じていた。場所的には同じかもしれないが、表裏一体となった不思議な空間である可能性など、この瞬間の雪子は知るはずもなかったのである。

ほつと息をついた雪子は、そうだ、と思い立った。伸江さんに晃はまだ生きているから、それだけでも伝えてあげなくては、と思ったのである。晃の寄宿先である伸江さん祖父母夫婦は、きっと夕方のニュースの一面を飾っている猟奇的事件と晃の失踪の状況が同じことを知っているから、その不安は極限なはずだ。きっと、自分以上に。即決に判断して、すぐに行動に映せたのはきつと、雪子自身が狼狽して混乱していつもの冷静な思考回路を辿れない今、率直な自分の心と向きあうのが怖かったのである。そして少しでも気を紛らわせるために、誰か他の人の世話をやくことこそが巡り巡って雪子の心を安定させると言っても過言ではなかった。

時計を見れば、夕方である。こんな時間に電話するのはかれこれ5年ぶりだろうか。授業が終わる度に放課後、どこかへ遊びに行く約束を下校途中で取り付け、出かける前にすれ違わないよう一応お互いの家に電話をかける。小中学生の帰宅を促す放送やどこかで聞こえる6時を知らせる学校のチャイムが鳴り響くまで、遊んだ記憶がよみがえる。懐かしさで胸が一杯になるが、感傷に浸っている場合ではない。雪子は電話を掛けた。

『もしもし、神薙ですけど、どちら様ですか？』

受話器越しの声は雪子の予想に反して、若い男性の声だった。一瞬掛け間違えたかと思って画面を見るが、やはり表示されている神薙伸江夫婦の固定電話の番号。電話越しの声は実際に聞くよりも違って聞こえると言うが、いくらなんでも夫の声にしては若すぎる。神

薙と名乗った彼は、誰なのだろう？雪子は思わぬ展開に面食らう。だが、もしもし？と一向に言葉を発しない雪子に不信を抱いたのか、声の主はどこか訝しげだ。慌てて雪子はごめんなさい、と声を発した。ひっくり返る声に羞恥がかあつと顔が赤くなる。

「あ、天城です。天城雪子ですけど、えっと、その、伸江さんいらっしやいますか？」

天城、という言葉聞いた男性は確認を取る意味なのか、それともつぶやくつもりだったのか、いずれにしろどこか驚いた様子だ。だが、はい、と雪子が肯定すると、受話器越しに聞こえる沈黙。雪子もまさか男の人が出るとは思わなかったのか、すっかり別の意味で沈黙してしまった。

『すいません。祖母なら今手が離せないんで、かけ直してもらえます？』

もし雪子がいつもの調子ならば、きづけたかもしれない。なんでもんな時にと不快をにじませる舌打ち。その小さくこぼされたため息に。礼儀正しい中にもどこか隠しきれない感情を含ませる、と邪推させる無機質な声に。何故か同年代くらいの声な気がするのだが、あまりにも他人行儀なつなぎの違和感に。同年代の男の子と会話する機会などめったにない雪子はすっかり緊張しきってしまい、気づかない。天城屋旅館に神薙農園は野菜を出荷している古くからの付き合いのある家であり、大切なお得意様でもある。天城屋からだとかかってきた電話ならば、要件は何かを聞いて、言伝を預かろうと

するのが普通である。最も今は平和なやりとりを想定するような状況ではないのだが、それにしてもすぐに切ろうと早々に話題を切り上げようとしてしまう雰囲気。では、と電話を切られそうになり、あわてて雪子は静止した。

「待つてください！その、晃ちゃんのことで！」

その言葉が相手の態度を一変させた。

『何かあんのか?!』

「つた、え……え？」

『なんか知ってるから電話かけてきたんだろ？なんか分かったんだよな？なあ！何処にいるんだよ！晃につ』

切羽詰った声に雪子は萎縮してしまう。え、あ、その、と言葉を紡げない雪子は、アキラニ？と首を傾げる。晃は女の子だ。姉ちゃんが続くならいざしらず、にとは一体どういう事なのだろうか。流石にいくら男の子っぽいとはいえ、流石に兄貴呼びを願うほどのものではないと雪子は思った。相手は何かに気づいたのか、あー、と声を上げたあと、イヤ、なんでもない、と口を閉ざしてしまった。

『ハジメマシテ、天城サン。俺はヒロキ。アンタの友達の弟。よく話は聞いてるよ。今俺以外のばあちゃん達全員、警察呼ばれて家中すっからかんで、誰も帰ってこないんだ』

「は、はじめまして。そっか、アナタがヒロくん？晃ちゃんから聞

いてるよ。大変なときに電話してごめんね」

いや、いい、と弟は気まずそうにつぶやく。病気で祖父母と暮らしている姉が突然失踪したとなれば、離れて暮らす家族も流石に駆けつけるのだろう。なんで気付かなかったのだろうか、と雪子は思った。そういえば、実際にこうして話すのは初めてかもしれないが、晃には2つほど年の離れた弟がいたはずだ。やはり姉弟で友人同士ニアミスするのは気まずいからと、晃の家で遊ぶときはいつも部屋に閉じこもっているか出かけているかの二択で面と向かって話したことはない。いつも晃がヒロヒロと呼ぶものだから、てっきりそういう名前なんだと思っていたのだ。

『で、ばあちゃんに何の用？』

雪子は事情をかいつまんで説明することにした。

『わかった、ばあちゃん達にいつとく。ありがと』

「うつん、いいの。そうだ、えっと……ヒロキくん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

『何』

「知らなかったらいいんだけど、ね、その……晃ちゃん、怒ってた？私ね、また晃ちゃんと仲良くしたいんだけど、やっぱり5年前に約束破ったから、嫌いになっちゃったのかと思うと怖くて、その」

はあ、という溜息が聞こえた。

『だからいったんだよ、あのバカ』

「ヒロキくん？」

『5年前となんにも変わってない。ホントどう仕様も無いよ、あのバカ。勝手に思いつめて、勝手に傷ついて、身勝手なところなんにも変わってない。安心していいよ、天城サン。そんなこと全然ないから。今でこそ笑えるけど、確かに怒ってたし泣いてたし、あんだけ荒れてたの初めて見た。けど、全然逆。本人がいうべきだからこれ以上は言えないけどさ、心配する必要は何のもないと思う。ただ、さ』

「？」

『天城サンの思っている以上に、あのバカ、ずっとずっと子供で、中途半端で、臆病で、どうしようもないくらい全力なんだ。だから、中途半端だけは残酷だからやメテ欲しい』

「ちゅうとはんぱ？」

『あとは本人から聞いて。俺がいうべきことじゃないし』

「……………うん、わかったよ。ありがとう」

よく分かっているまま、雪子は電話を切ることになる。
がちゃん、ときられた音はかなり辛辣に聞こえた。

そして、雪子は、千枝共々、真夜中テレビというブラウン管越しの世界で、全く知らない男としての神薙晃と出会うことになるのである。

赤裸々に語られる神薙晃という男の叫びに心の底から驚愕し、様々な符号がかちり、と収まるとき、雪子はその意味を悟ることに成るのだ。

ヒロトは、はあ、と苛立ち気味に電話を切る。八つ当たりだとは分かっているのだが、家族贔屓になるのも仕方ない。赤の他人と家族だったら家族を取るのが当たり前だ。多分天城屋の雪子さんは晃兄のことなど微塵も意識していないのは明白だったから、余計辛いのだ。人の想いなんてもともと自分勝手きわまりないんだとヒロトは知っている。そうでなければ、たかが初恋でなんでここまで自分の姉みたいな兄みたいな晃という家族はここまでむしろだらけの道を裸足で歩まなくちゃいけないのか分からないのである。

なんで私は生まれてきたんだろう、とつぶやいた兄の言葉をヒロトは今でも覚えている。

月森、と居心地悪そうなかすれ声が聞こえて、月森は背負いこんでいる彼にん？とだけ返した。目覚めたばかりの彼はやはりもう一人の自分からすべてを聞いたと聞かされた瞬間、この世の終わりのような顔をしていた。生まれてきてから他人に明かすのは初めてだと男がこぼしていたのを思い出し、とてもではないが無神経な言葉はいえるはずがなかったとこっさり月森は振り返る。彼の命を救って男の暴走を止めたことで寄せられた信頼から来る秘密の暴露。そこまで信頼を寄せられるのであれば、答えないわけにはいかなかった。こうして今も何も言わないで淡々と進んでいく月森に切り出せないでいる。ようやく決意をしたらしい彼は、真剣なまなざしで聞いた。

「あいつから、どこまで聞いたんだ？」

あいつ、と称した記憶を失う前の自分。受け入れないから未だにペルソナになれないのだと寂しそうに語っていた男を思い出し、少々複雑な気分になるが月森はそっとしておくことにした。神薙晃という彼の抱える問題はアイデンティティの根幹に関わるものであり、マイノリティの問題からなかなか公言しにくい話題も絡んでくる。思い悩んでいるのは彼のはずだから無粋なことは聞けない。でも気を使えば使うほど思いつかなくなっていく話題。沈黙を打破したのは彼だった。月森は男からの暴露を思い返して、まとめる。

「えっと、神薙さんは男だと思ってるのに、体が女の子だから苦労したって話と、今まで家族以外には打ち明けられなかったってこと。マヨナカテレビで男になった自分と出会って混乱したせいで、記憶がどっかとかんじやった部分があること。だな」

「そっか。……あの馬鹿、先走りやがって。初対面なのに、ごめんな。迷惑かけて」

「そんなこというなよ」

きっぱりと言い切る月森に目を丸くした神薙だったが、はは、と力なく笑った。

「悪い、言い方が悪いな。助けくれてありがとう。それと、話、聞いてくれてありがとう。本当に、有難う。はは、涙が出てきた」

枯れたはずなのにな、とぼやく彼は鼻声だ。

「月森、は、初対面はみんなさん付けなのか？できたら、その、呼び捨てで頼む」

「わかった。神薙」

「あと、その、できたら、さ。トモダチやってほしいんだ。オトコとして」

「何言ってるんだよ。もう、トモダチだろ？」

初対面で随分とディープな部分まで知ったから、と笑う月森に、どこまで人間が出来ているのだと別の意味で神薙は呆れる。

「ちょっと聞いてほしいことがあるんだ。長くなるけど、聞いてくれないか」

「？」

「あいつに聞いたかもしれないけど、私からもいいたいんだ。私のこと」

「わかった」

ありがとつづばやいて、神薙はゆっくりと深呼吸して口を開いた。

体のラインが次第に丸みを帯びていく恐怖に蝕まれたとき、待っていたのは違和感の連鎖だった。思春期の価値観は揺れやすいし、影響されやすいと保健室の教科書じみた漫画にあったのを頼りに、女の子になれるよう努力もしてみた。興味もない雑誌を読みあさり、ファッションやオシャレに疎いと笑う彼女に引つ張りまわされながら、自分なりに女の子であることを楽しむ、としたこともある。待っていたのは、どうしようもない程の違和感とそれを抱いてしまう自分への背徳感だったけれど。結局居心地のいいメンズものに身を包んだけれど。ふとした瞬間の彼女への想いに気づいたとき、それによる男への変身願望なのだと安心して、一時的な平穏とひた隠しにする罪悪感とバレないかという恐怖と普通ではないということへの恐怖という別の階段がまっではいたけれど、これがきつと入り口だった。

ブラスバンドで同じパートを担当していた男子に告白され、付き合おうとしたこともある。恋をすれば、恋愛をすれば彼女のようにになれるかもしれない、という一抹の期待を込めて返事をしたこともある。1週間も持たなかった。どうしても友達から先の関係が見えてこないのだ。あの時の自分は男子のことが好きだと思い込もうとしていたのだろうか、女がする恋愛に憧れていたのだろうか、周囲に溶け込もうとしていたのかは分からないけれど、自分は自分だと意識しようとするたびに自分の特異性を意識してしまつて身がすくむのだ。決定打は、男子と共に過ごす恋愛という好意にくくられるすべての行為に気持ち悪いという感情が真つ先に生まれてしまったことだ。軽いノリとは又違う、男から女に向けられる特有の視線とか、スキンシップとか、甘い言葉とか。どうしてもその先に彼女を見てしまう。恋愛という関係を通したとき、私に生まれたのは男子への劣等感だった。体格的にも声の変換にも、そして私にはない何もかもを持つている彼らに嫉妬しかないと気づいたとき、私は混乱した。女性が好きになる私はなんのしがらみもなく恋愛という話題に触れられる異性に嫉妬したのか、それならこの胸にこみ上げるもやもやはなんだ。自分で自分がわからない。同性が好きなのだと感じた私は、いつまでも付き合い続けることに苦痛しか感じられず、罪悪感にも駆られることになり、私の拳動の不審さを感じたのだから男子とは自然消滅という形で終止符を打った。

でも、それとはまた別の側面で、私は日々違和感に悩まされることになる。もともと苦手だったが、規則だからと我慢していたスカートが耐えられない。逃げるようにジャージに着替えた。よく生徒指導の先生には注意されたが、制服を着る生徒たちの間では浮いていたが、衝動的に脱ぎ捨ててしまうのだ。次第に子供から女へと変化

していく、第二次性徴が私の中で開始されたとき、それを自覚したときは私は恐怖を感じた。身体測定の度に变化していく自分の体にいよいよのない不安感を覚え、体重や胸の大きさで一喜一憂する女子たちの中に自分がいるということに罪悪感を覚える。記録を見せてと無邪気に笑う彼女の下着姿を見るたびに羞恥に駆られ、背徳感に悩み、そしてどこかで喜んでゐる自分に嫌悪した。

男子生徒と女子生徒にわかれて行われる性教育が重なるたび、来なければいいのに、と切実に願った。でも一方で体が女に近づいていけば、自分の恋愛観も性癖も男としての自分も女に近づいていくのではないか、という最後の願いのようなものはどこかであつたのだろう。まだ始まらない、始まった、お腹痛いから体育を休む、薬を飲む、という話題で盛り上がる彼女たちを見るたびに、焦る自分もいた。体が大きい方が早く始まる、といった世俗的な噂に影響される多感な頃だ。無理もない。

やがて私にもその時期が訪れたのだが、それは貧血を起こすほどの目眩とろくに立てない激痛、そして泣きたくなるほどの生理現象に見舞われた地獄のような苦しみだった。やはり男としての意識では子供をつくることができる体になってしまったという絶望と拒絶反応は私の考えていた以上に凄まじく、日々の誰にも打ち明けられない悩みにブルーになり続けていた私は精神的にも非常に不安定だった。誰にも相談できないことが増えいき、悩みのたびに無表情になる私を心配する彼女や家族、先生、クラスメイトたちの優しさが苦痛でしかない。

そんなある日、私は倒れた。保健室に運ばれた私はあまりの症状に病院に搬送されたわけだが、皮肉にも私はそのまま多量出血が原因

で緊急搬送されて手術を受けた上に、入院する事になってしまったのだ。病室で目を覚ましたとき、両親と弟が駆けつけてくれたわけだが、そこで医者に聞かされた私の体の特異性は今でも忘れようがない。私の体には、子供をつくるための卵巣は辛うじて右側だけ存在しているものの、その排出された卵子をうけとめ、やがては生命を10ヶ月守り育てるはずの場所が異様なほど小さく、退化していると言ってもいいほどであり、子供を生むことが出来ない体質なのだと言われたのだ。だから生理現象があるたびに子供を育てるために作られる膜がそのまま血液同様吐出されてしまい、あの時味わった地獄のような苦しみは月1で発生するのだと聞かされた。女としての価値はそれだけではないとはいえ、実際に告げられた時の衝撃はない。欠落品だと言われたような気がした。それ以上に私を打ちのめしたのは、心のどこかで歓喜する自分に気付いてしまったことだ。母になりたくないなんてピーターパン症候群の一時的なものだろう、と考えていた私は、意志の力は強大だと恐怖したし、嬉しくもあった。自分で自分が分からなくなった。医師が言うには、精神的な部分も痛みには関連している、とほのめかされた。家族は子供を産めない喜びを奪われた私が本能的に悲鳴を上げていたのだろう、と解釈したが、この時私は私の考えている以上に私が女になりつつある身体を心の底から嫌悪していることを否応なく自覚することになったのだ。普通ではないということとは、予想以上に私を追い詰めた。

退院してまもなく、初めて自宅の浴槽で自分の体を鏡越しに見据えた私は、もう我慢の限界だったのだろう。置かれていたカミソリに手が伸びた私は、真下にある脂肪の塊に躊躇なくその端を突き立てた。傷は残るけれど縫い合わせなくても案外ふさがるものだと思ったのは、数週間後だった。切り取ろうとした跡は端からみて一発で分かるほど盛り上がっているし、ぱっくりと開いた血の道を見事に残しているけれども。それよりもそのせいで下着が真っ赤に染まっ

てしまうと気付いて、バスタオルで止血しながら母に相談したときの狼狽ぶりから、自分が行った衝動さに気づいた有様だ。ここまで来て、ようやく私は自分が精神的にも肉体的にも限界に来ていることに気づいた。最後まで自分が異様だと突きつけられてしまいそうに抵抗したけれど、このままでは私が壊れると祖母に抱きしめられたので、うなずくしかなかった。その重なるカウンセリングや今までひたすら溜め込んでいた悩みの変化を吐露する場所を与えられたことで、ようやく私は自分が男の意識を持ちながら女の体を持っているために今まで苦しんでいたのだ、と自分の中によりやく納得出来る答えを見つけられた気がした。ちなみに勝手に勘違いしていた同性愛と性同一性障害の違いは、自分の性別を違和感なく受け入れられるかどうか、だけであり、個人の性癖は性同一性障害とはなんら関係がないことを学んだのはこの時だ。どちらもある人もいるし、どちらかしかない人もいるし、線引きは長いこと時間をかけて専門家と話し合っていくしかない。そして私は命を落とすことがあったとしても、性を転換しようとは決断した。そして彼女にすべてを打ち明けるつもりで、呼び出したのである。その結果があれだ、と神薙が指さす先が遠くで泣いている女の子。月森はそっか、とつぶやいた。

「彼女って、天城さん？」

「……アイツにとってはそうだろうな」

まるで私が焦がれていた初恋相手は違うのだとでも言いたげな神薙だ。彼の辿ってきた人生は月森にとって憶測でしか推察できない、一生涯理解出来ないであろう悩みと苦悩、そして喜びと悲しみの連鎖で形作られている。記憶がない部分があるということは、人格的に

も別の存在なのだろうかと考えもしたが、主人格とその他の人格は違うというし、同じ記憶を共有しているのかとかこれまた空想の世界の話だ。何か思うところがあってそういう態度なのだろうと納得して深くは聞かない。自分の中の一部分が乖離したままなのに受け入れることが叶わない彼は、いつか月森のようにペルソナとして受け入れる日が来るのだろうか。きたらいいな、とぼんやり思った。

「好きだった？」

「綺麗な思い出なら、アイツはここにいない。きつとな。私の出る幕じゃない。いつか、アイツがいうべきなんだ。雪に」

受け入れがたき己の一部分に対して、こんなにも慈悲めいた笑を浮かべられるだろうかと月森は疑問に思いながらそっかと返した。

「別に好きな人がいるような口ぶりだな、神薙」

「私の好みのタイプは千枝なんだ」

やっぱり別人格かもしれないと月森は思った。

第17話 アムリタ

「大丈夫？」

「……っ?!」

至近距離からのナミカワボイス。ぎょっとして目を開けた私は、目の前にある灰色の頭に混乱するが、暴れないで、と困ったように言われ、ようやく自分が背負われていることをしる。よりによって野郎におんぶという屈辱的な状況下におかれていることに気づき、私は必死におろしてくれと叫んだ。錯乱しているとも思われたのだろうが、落ち着けと幾度もいわれ、ようやく私は主人公の月森孝介に助けられたことを思い出す。声はすでに死んでいて、かすれ声もいいところだ。

「ケガをしてるんだ、歩けないだろ？」

「……っ！」

「確かに初対面の奴におんぶとかキツイだろうけど、我慢して。俺だって、その、男をどうかとは思っただけど、一応体は労らないと」

「……………はああ」

「あはは、堪えてね」

笑い声がする。先を見つめれば、今にも笑い出しそうな顔で必死にこらえている男の姿がある。私はのぼせ上がるのを感じた。ゆっくりと歩いていく先で、鳥居をくぐるとわずかながら通路が見える。

こ、の、や、ろ、う！！月森の身長が本来の私の姿を模した男より遥かに高いのがまた気に入らない。身長は花村と五十歩百歩だが、やはり巽と花村のダンジョン会話は正しかったようだ。5センチ近く差があるのは、いいしれない屈辱感がある。しかもまるで当然のように介抱を理由にされれば、抵抗できなくなる。つよりによつてこの男、月森にあらうことかすべてをぶちまけてしまったらしい。勘弁してくれ。私はめまいを感じた。男は笑った。

『いつか本人が目覚めるまで、貸してやる。だから、カンナギアキラが戻ってくるまで、絶対に後悔させるような人生は送るなよ』
「ありがとう」

「記憶喪失は、大変だと思うけど、頑張れ」

「……………は？」

「全部聞いた。数日前から記憶がなくなってるんだろ？で、喪失した部分がこの男だけど、記憶が蘇ったわけじゃないから、受け入れられなくて、暴走させたんだよね？無事でよかった」

私が気を失っている間に、好き勝手に捏造されてしまったらしい。確かプレイヤーがゲームの世界の自分に取り付いたなんてむちゃくちゃなこと、流石に月森が信じるはずはないし、私もどう説明するか困ってしまうけどもこれはまたややこしい事態が想定され、私はめまいを覚えた。いろいろと好都合ではあるけれど、そこに根ざすであろう問題については丸投げする気らしい。勘弁してくれ。私は大きく脱力した。

「なんで、ここに？」

「マヨナカテレビを見たら、テレビに引き込まれて落ちたんだ」

「え？」

「ああ、そうか。俺、今日転校してきたばかりなんだ。叔父さんの家に居候してるんだけど、リビングにしかテレビが無いんだ。小さいテレビなら引っかけた助かったんだろうけどな」

里中たちと迷い込んできたわけではないらしいと、私は月森の服装でようやく気づく。なんと月森は初めてペルソナの声を聞く中二病的展開の時に、勢い余って落ちてしまったらしい。………どうするんだ、出られないじゃないか。途方にくれる私は、心配いらない、と笑う月森を見た。

「先客がいるらしい。いってみよう」

「？」

ふらふらと青い蝶が飛んでいた。

「キミたち、誰クマ?!」

「……俺は月森孝介。こっちは神薙さん。キミは？」

「え？ボク？僕はクマクマ」

「……………ここはどこ？」

「えーっと、えーっと、その、シャドウとボクしかいないとーって
も危ない所クマ。なんでキミたちここに居るクマ？！早く帰った方
がいいクマ！霧が晴れるとシャドウ達が暴れるクマよー。だれかが
ここに人を放りこむからボク迷惑してるクマ！何とかしてくれって
行っというて欲しいクマよ！」

月森は身を乗り出した。

「それって、神薙さんじゃなくて？」

「ふえ？……………あり？」

まずい。私はあわてて隠れようとしたが遅かった。

「な、な、な、なんでシャドウがここにいるクマあああああ！！
食べないで、食べないで、クマは美味しくないクマよおおお！！」

凄まじい勢いで後退したクマは必死で叫んでいる。クマの鼻は限り
なく優秀なようである。私の憑依している身体を持ち主をぴたりと
言い当てやがった。どうしよう、と一瞬悩んだものの、それを吹っ
飛ばしたのは、月森の憤りを交えた怒鳴り声だった。

「落ち着け！」

ぴしゃり、と響き渡った怒声に、思わず身がすくむ。クマと私は月森を見た。

「なにがシャドウだよ！神薙さんは人間だ！いくらなんでも神薙に失礼すぎるだろう！

この人は1週間近くこの世界で一人ぼっちだったんだぞ！

俺が居なかったら危つく食い殺されるところだったんだからな！

変な言いがかり付けて勝手に怖がるんじゃない！」

「え？で、でも……シャドウのにおいがするクマよー」

ばちばちと大きな目を瞬かせたクマは、うーん、と大きく頭を悩ませてしまう。月森は凄まじい形相でクマを睨みつけていた。なんでもかばうクマか、とクマはクマで私を見比べて、途方も無い違和感の前に呆然とするしか無いらしい。なるほど、分かる人には分かるようだ。クマはシャドウだ。シャドウが自我を持って、誰かに好かれるという気持ちがあるクマという入れ物を作り出した方がいいが、シャドウである自分が自分に意味を与えられるほど自信があるわけでもなく、あまりにも不安定すぎた自分を安定させるためにクマは自分を忘れてしまう。そして主人公たちと事件を通じて交流し、戦い、ふれあうことで自分とは何かを見出し、確立して行く。自分という不確定さをして、それに意味を与えてあげられるほど成長しきったとき、初めてクマはベルベットルームに入ることができるほどの存在に成長できるのだ。だから今のクマが空っぽでシャドウだ。鼻はびんびんセンサーを発動させており、私に対してずばっと正体を言い当てるのはさすがと言えるが、さすがに面と向かって化け物呼ばわりされて平常心でいられるほど私は大人ではないらしい。ぱんぱん、と月森に肩を叩かれて、ようやく私はうつすらと滲む者があることに気付いたのだった。月森が声を上げてくれるのは嬉しい

が状況的にはクマが正しい。厳密に言えば私はやがてクマがたどる道を先行しているわけだ。アメノサギリの介入を露骨に受けたり、シャドウのことや一度も外に出たことがない時点で誰かが人を放り込むという事件の大前提を何故か覚えていたりする時点で、この世界の創造主に何らかの役割を与えられていることは否定出来ないシャドウである。私は何と言おうか考えあぐねているうちに、月森が冷たい口調で問い詰めていた。

「シャドウって？」

「シャドウはシャドウクマよ。だから、そんな、ボクわかんないクマよ！だからその、そんな怖い顔でそんな大きな声ださないでしょう……！」

今にも泣きそうな顔で懇願してくるクマ。不安にかられている私をよそに、月森は終始無言のままクマをじいつと見つめていた。月森？と一抹の不安を感じた私は思わず話しかけたが反応がない。背負われている現状は変わらない中、私は耳元で大声で叫んでみた。びっくりとした月森はようやく思い出したように振り向くが、ひどくぎこちない笑顔がそこにある。ああ、なんていい奴なんだろう。どこかいびつな笑顔である。得体のしれない生物である私のために怒ってくれているのだ。いい奴過ぎる。

「月森、落ち着け」

「神薙！」

「こつもあからさまなのはずいぶんと久しぶりだけど、慣れてるからいいんだ。」

言葉は通じるみたいだし、話を進めよう。感情論は何ももたらない。

危険性が全く感じられない相手を前に、タロットカードを握り締めるのはどうかとおもつぞ月森。

やめてくれ、私たちがここから脱出できる方法を知っているかもしれないだろう?」

「……とにかく、神薙はシャドウじゃない。なんでそんなこと言うんだ」

「だ、だってシャドウのにおいがするクマよ」

「シャドウのにおい? 気配じゃなくて?」

「………あり? な、なんで君と同じシャドウの気配があっちの方向からするくまかつ! ?」

「あの男がシャドウっていうのか。なら、神薙はそのシャドウに監禁されてたんだ。」

「おいくらい移るだろ」

「月森、案外クマの言うことはあたってるんじゃないか?」

私もシャドウみたいなものだろう。4月からの記憶がないんだ。

理想的な自分を妄想した神薙晃のシャドウかもしれないだろう?」

「それは……。でも、神薙は化け物じゃないだろ。それは単なるキオクソウシツだとあいつもいってたじゃないか。そう卑下するなよ」

あの男は私にこの世界の神薙をさせたいのだという意図が透けて見えるようで、私はため息をついたのである。月森は畳み掛けてくる。

「じゃあ、神薙は人間だ。俺だって変な力に目覚めたけど、人間を辞めたつもりは無いよ。

そんなこといったら、俺だってシャドウかもしれないだろ。埒が明かない」

「まあな」

私は肩をすくめた。だめだ、やっぱり私の中でこんきよとなる証拠はもちろんのこと、推論に推論を重ねた仮説すら出ていないことを説明、提示するには、時期尚早すぎた。月森に私の複雑怪奇な状況を説明するのは難しすぎる。私があればこれ考えあぐねている間に、月森はクマにここから出る方法を知らないかと尋ねている。まずい、まずい、まずい、と私は焦る。このままではクマは記憶喪失になった人間はシャドウみたいな気配がする、匂いがする、けれども人間なのだという誤った情報を受け付けられてしまう。まあ、キオクソウシツキヤラはクマ本人だからある意味伏線的な感じでいいのだから？頭の中で混乱している私に、月森が何度か呼びかけてきて、我に返った。

「神薙は人間だよ」

「そうだといいな」

「神薙」

「正直、人間かどうかは自信がない。いろいろあるんだ。説明しき

れないほど。

それに、クマにとっては私は怯えるほど強力なシャドウらしいからな」

クマは気まずそうにうつむいてしまった。ずいぶんと嫌われたものである。まあ、無理もないけども。シャドウの癖にシャドウを怖がって逃げ回ったり、隠れたり、アイテムを拾って自己防衛したのがクマというシャドウだから。一定の距離は埋まらない。私はとりあえず人間だと明言するのはやめておくことにした。月森のいらいはクマに向かう。だからクマに八つ当たりするな、私の憑依している身体の発祥は、少なくともこの世界の神薙晃のシャドウだったのは事実なんだから、私はクマを否定するわけにはいかないのだ。もちろん口にすることはできない。そのもどかしさを私は落ち着けという言葉に集約した。月森に引つ張られて内緒話開始。

「なんで神薙がクマをかばうんだよ」

「まあ、もう二度と来ることはないだろう、こんな危ない場所。クマだってこの怯えぶりから察するに、私はここにいてはいけならしいから。」

もう逢うことはないんだ、心象はよくしたいんだ」

な、と私は言葉を紡いだ。うまく笑えているだろうか。月森は私を見て、根負けしてくれたらしい。ため息をついて苦笑いが浮かんだ。2、3のステップにつられて現れるブラウン管テレビの塔。クマは、これで外に出られるクマ、と笑ったものの、私と目が合うと反射的にすぐに目をそらしてしまう。そして、はっとなってあわてて何かを言おうとした。

「え？君も外にいくクマかつ！？」

「私は外から来たんだ。帰るのは当たり前だろう」

「……………」

クマはなにやら考え込んでいる。そりゃそうだろう。シャドウが外に出るとかバットエンドでしかお目にかかれないう状況だ。まあ、すべてはクマが人間になればたらの話ということにしよう。

「ねえ、君たち、名前は？」

「神薙晃」

「月森孝介だよ」

「分かったクマ。覚え得とくクマ。えっと、その、あの、ごめんなさい」

「謝ることはないんじゃないか？」

「え、でも」

「私は嘘を見抜くのは得意なんだ。シャドウだと思っている存在を無理やり人間に見立てるのはよくないぞ。でも、私は外から来たから外に帰る。ここは私の居場所じゃない。クマはクマの知っている人間を人間、シャドウをシャドウと呼べばいいだろ。もう二度と会うこともないんだ。気にするな」

これくらい意地悪しても罰は当たらないだろう。

はつとなつたクマだったが、月森に言われて、そのまま外に出してくれたのである。

放り出されたのは、やっぱり深夜閉店中のジュネスの家電売り場。当然警報が鳴り響く。

月森と私はそのまま警備員さんに保護されることになったのだった。

まぶたの裏がうつすらと赤らみを帯びた頃、私は目を覚ました。まだまだぼんやりとしている視界はうつろで、世界がまだ浮遊している。ふわふわとした感覚が抜けない。眩しくて目を細め、視界がやがて焦点が合い、クリアになっていくにしたがつて五感が返ってくる。風が吹いているのか、さらさらと清潔そうな色をしたカーテンが風に煽られて揺れていた。望める天気は生憎の曇りながら、降り

出しそうなほどの層は為してない。まばたきのあと、私はいつも愛用している硬い素材の枕ではなく、頭が沈んでしまいそうなほど柔らかい枕に頭を載せていることに気付いた。ここはどこだ。家じゃない。状況を把握し切れない焦りがもたげてきた頃、私はあたりを見渡した。白いシートと毛布に挟まれていた身を起こそうとすると、微妙な違和感。左上から伸びているがテーピングされていることに気付いて横を見れば、点滴の袋が逆さまになって透明な液を私に運んでいた。私が不用意に動いたせいで微妙にこっちに近づいているような気がする。力が抜けてしまい、ふらりとした私はそのままベッドに沈んだ。そういえば身体が無性にだるい。くらくらする。ちらと腕を見た私は、丁寧に施されている包帯のあとや消毒のあとといった我ながら痛々しい体を見て、ようやく自分がどこかの病院に担ぎ込まれたのだろうと思いついてホッとする。

恐怖を通り越して、釣り上がるのは笑みだった。ため息に似た安堵を吐き出したとき、ようやく私は生きていることを実感したのだった。テレビに引きこまれてから何日たったかよく覚えていないが、ほとんど気力で持ちこたえていたようなものだった。よくぞまあ、あれだけ気丈に自分を殺そうとしている奴に対して振る舞えたものだ。それもこれも、ペルソナ4をクリアしたことで蓄積していた知識と、奴がかつて私の経験した出来事を凝固した結晶みたいなもので、敗北すれば私の礎とも言える彼女との思い出すら蹂躪しかねないという危機感。あとはもっぱら拒絶したら私自身の人生をすべて否定しかねないという特殊すぎる状況が支えていたのだろうと思う。なにはともあれ、もう二度とテレビの外には出られないのではないか、という恐怖は脱することができて何よりである。人は安心しきったとき、真っ先にやってくるのは空腹か眠気か知らないが、私の場合は眠気だったようで、すっと眠りに落ちてしまった私が二度目を開けたときには、すでに夜を迎えていた。

人影があつた。しゃりしゃりしゃり、といい音がして横を向いた私は、真つ赤で美味しそうな形をしたリングの皮を向いている祖母と目が合う。椅子に座り込んでいる祖母は、ぱちぱちと何度か瞬きをしたあと、息を詰まらせるような顔をして、ゆっくりとナイフとむいている途中のリングを置いた。あきらちゃん、と消え入りそうな声がして、私は、ん、と返事をしようとしたが、一瞬だけ声の出し方を忘れてしまい沈黙してしまう。祖母はクマが出来ていて、可哀想なほど体調が悪そうでやつれ切っていた。なんとか安心させて、私はかすれた声で祖母の名を呼んだ。

「あきらちゃん！」

涙をいっぱいにためて、よかったよかったと繰り返しながら祖母がおもいっきり抱きしめてくる。臍をおこそうとしたが、我に帰ったらしい祖母が今にも泣きそうな笑顔で伸ばしかけた手を私の右手に重ねてきたので、未だ感覚が戻らない違和感を抱えたまま私はやりわりとくるんでくれる温かさに顔がほころんだ。かつて私を抱きしめてくれた時となんら変わらない包容力を持つて祖母はぎゅうっと包んでくれた。無事でよかった、とぐしゃぐしゃになりながら私の背中をひたすら私の頭を撫でてくれる。いつもならまるで小さい子供やオンナノコにするような仕草だから、と跳ね除けるところだが今回はかりは純粹に嬉しかったので、照れ笑いしか出来ない。

「おじいちゃんは飲み物買ってきてくれるからねえ、すぐ来るわ」

おばあちゃんはアキラちゃんが無事だって信じてたからねえ。お仏

壇でありがとうございました。お礼言わなきゃいけないね、辰姫神社さんのところにもおじいちゃん達で毎日毎日お願いしてたんだからねえ、助けてくれたんだねえ。せきを切ったように話し続ける祖母に私はうん、うん、とうなずいていく。晃ちゃんが無事ならこそ、もうそれだけがよかったわ、と心の底から心配してくれているのがわかって、私は申し訳なさで一杯になっていた。テレビの中で祖母や家族のことが脳裏をよぎったのは何日前だっただろう。ひたすら私、私、私、と考え続けていたせいかな、追い詰められていたとはいえ家族のことが思い至らなかったことを少しだけ後悔した。そうなのである。私が私であれたのは、私がどんな人間であろうと受け入れてくれた、それが当たり前だとひっぱたいてまで力説してくれた祖母や心配してくれた家族があったからなのに。ごめん、とつぶやいた私に、祖母は大きく首を振っただけだった。晃ちゃんは悪くないの、なんにも心配せんでいいからねえ。また晃ちゃんがいろいろ考えてたのに、気付いてあげられなくてごめんねえ、と謝られてしまい、私は首を振った。そして、不意にこちらの現実世界での私の立場を考える余裕が初めて生まれてきたとき、私は無性に恐ろしくなっただけで体がこわばるのを感じた。突然の失踪、行方不明、私がテレビの中に突き落とされたのはいつだった？ごちゃごちゃしている脳内がうるさい。アキラちゃん？と祖母が心配そうに覗き込む。怖いこと思いついた？ごめんねえ、と謝られ、私は無言のまま首を振った。やがて祖父が返ってくる。心配させたことを叱られ、祖母と同じように頭をなでられた。私の記憶と何ら変わらない畑仕事と手荒れで硬くなりきったゴツゴツした手で有る。緊張感が不意に抜けてしまい、私は訳の分からないまま泣くしかなかった。狼狽した祖母がナースコールをしてやってくる。やがて医師による判断で記憶の混乱と精神の不安定さが原因だと告げられた。祖母が一緒に寝ようか、と言ってきたが、さすがに恥ずかしいのでやっぱり断ったが、結局連絡を受けて駆けつけた両親と弟が駆けつけるまで、祖母は片時も一度も私の手を放すことはなかったのだ。

数日間、私は家族とゆっくり過ごすことになった。医師の判断で面会謝絶はそのまま。ありがたかったが、暇だったのは言うまでもない。

家族や看護師、医師の話を総合すると、私は家出してトラブルに巻き込まれ、そのままジュネスで解放され、倒れているところを花村陽一さん（花村のお父さんだ）に保護された、ということに成っているらしい。月森も真夜中に帰宅した堂島さんがテレビの前に置き去りにされた携帯電話を不思議に思い、二階に上がったところ行方不明と発覚。奈々子が大きな物音を聞いたことを覚えていたため、それはそれは大騒ぎになったらしい。空白となっている3ヶ月間、神薙晃の体に入っていた誰かさんは、どうやら勉強するのが嫌いだっただよう。学校にいくふりをして、何かと遊びに出かけていたらしい私の家では、あまり珍しいものではなかったらしくあつさりと家出で片付けられてしまった。まともに通い始めたのは4月からだそうだが、いったい何をしていたのだろうと思うと背筋が凍る。私が奴から逃げるために飛び降りたり、よじ登ったりしたケガが多いせいで、二階の窓から飛び降りたのだろうと憶測を立てられてしまったのだ。当時雨が降ってたせいで足跡は流されたのだろうということだった。これ幸いと乗ったはいいものの、窓はどうやって閉めたんだ、とかどうして家出をしたのだという言及には頭を捻るハメになった。そしてトラブルについては最も困った事態になってしまった。確かにテレビの中で奴に相当精神的にも身体的にも痛めつけられていることを考えると、誤魔化しようがない。成人男性としか思えない手のあとがくつきりと残った腕とか、首の周りとか、打撲

痕から痣、一方的としか言い用がない暴力のあとがありありと残っているのだ。私もさすがにごまかしようがない。ごまかそうものなら、口封じのために脅されたと勘違いされそうで、下手に言うことが出来ず、相当神経を尖らせて言葉を選ぶ必要があったのは言うまでもなかった。その姿すらぶつちやけ拳動不審の何者でもないと思うが、ではどうせよというのだと自問自答するハメになった。生田目がすでに誘拐事件を起こしているのかは分からないし、無関係なのに誘拐事件と関連付けるのはさすがに私も困る。時期が時期である。月森と早々に接触したことで何かストーリーに影響が出ているかもしれない。だから私にできたことといえば、月森に話したことをそっくりそのまま言った上で、事件についてはさっぱり覚えていないという要するに記憶喪失を押し通すことしか出来なかったのである。テレビに手をつつませれば、家族には明らかにおかしいし矛盾だらけの証言をしている理由、隠していることの重大さを説明できたかもしれないけれど、さすがにそれはまずいだろう。いろんな意味で。それこそ、奴が突然暴走することで死にかけたことを考えると、余計なことをすると容赦なくどっかの力が介入したりしてフラグが立つかもしれないと思うと、恐ろしくてできるわけがなかった。それはともかく。私の失踪がアナウンサーの殺人事件と同様の状況、しかも時期が近すぎるということ嫌な予感を感じていたのだが、1週間後、警察が私の病室を訪れることになってしまった。頭がいたい。

でも、中学生の頃からずっと私を支えてきてくれた精神科の先生が来てくれて、時々話を聞いてくれただけでも十分落ち着いた生活を送ることができたのはよかったと思う。一つ気になることといえば、何時まで経っても小西早希先輩の死体があがったというニュースが流れないということくらいである。もしかしたら、月森たちがなんとかしてくれたのかもしれない、と予感めいた期待を抱きながら私は過ごしていた。

刑事が2人訪ねてきたのは、私の身体的にも精神的にも安定が認められてきて、祖父母と家族の連夜のお世話が目に見えて負担と成っているのがわかって、私が無理やり家に返した日の午後のことだった。私のそばには、主治医の人。さすがに警察の事情聴取に私が一人で望むのは酷だとの判断なのだろう。ありがたい配慮である。

「晃くん。嫌だ、と思ったら正直にいうんだよ。私が代わりに答えてあげるから」

「ありがとうございます、先生。今は気分もいいですし、大丈夫だと思います」

「では、いいかな？最近、このあたりで物騒な事件が起きているんだ。知ってるね？」

「はい、アナウンサーが殺されたって事件ですよ。みんなに怒られました。危ないのに一人で飛び出していくバカがあるかって。ご迷惑おかけしてすいません」

「ああ、そうか。まあ、無事でなによりだ。身の回りに不審な奴は見かけませんでしたか？」

「いえ、特に怪しい人は……」

「じゃあ、質問。どうして家出しようと思ったんですか？」

「晃くん、大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

「はあ、と溜息をつく。」

「中学までずっと一緒だった1番の親友が別の仲がいい子と一緒に久しぶりだねって声をかけてきたんです。嬉しかったけど、本当は嫌で嫌でたまらなかったみたいです」

「あー、仲がいい子が取られちゃって？」

「はい。でも、その子も新しい親友もドツチもすっごくいい子だから、嫉妬する自分がますます情けなかったみたいです。別の友達からマヨナカテレビを教えてもらったんですけど、そこに写ったのがその子だったからますます混乱しちゃって、こっ、ぷつんと今までこらえてたのが爆発しちゃったみたいで、全部嫌になっただんです」

「マヨナカテレビ？」

「あれ、堂島さん知らないんですか？今流行ってる都市伝説ってやつですよ。ねえ？」

「はい」

「足立、その、あー、マヨナカテレビってのはなんだ？」

「雨が降ってる真夜中に一人でテレビを見ると、運命の相手が写ってるーって奴ですよ」

「……………友達がアナウンサーをマヨナカテレビで見たっていうんです。運命の相手がーって話なら、アナウンサーが運命の相手だけど、友達が4人全員同じ人を見たっていうから……………おかしいネって話になったんです。だったら私も参加して、運命の相手じゃなくてみんな同じ人を見るんじゃないかって調べてみることにしたんです」

「そしたら、その子が写っちゃったと」

「……………嫉妬している自分に気づいた、ってことかな？」

堂島さんが私の顔を見て唸っている。単なる嫉妬を自覚したぐらいで、衝動的に家出するとは思えないだろう。疑惑ではないが、意図的に私が伏せていることに感じているようで、それをどう聞き出すか思案中といった感じた。刑事の勘でストーリーに食い込んでくるような人だ。隠す必要はない。ただ、少しだけ、怖いだけだ。先生が落ち着くようにそっと肩を叩いてくる。無理しなくてもいいんだよ、と声をかけてくれるが、私は大丈夫です、と繰り返し試みる。正直笑えている自信はない。息を吐いて、私は口を開いた。

「性同一性障害って、御存知ですか？」

「ん？」

「えーっと、ああ、ニュースでやってたね。戸籍の性別を変えられるとかどうとか」

「私、実は性同一性障害なんです。体は女性ですが、精神的には男

性という、心と体の性別が違っんです。性同一性障害と同性愛の違いは、自分が今の体の性別を受け入れられるかどうからしいので、私は性同一性障害になります。今はできないですけど、いつかお金溜めて、手術して、戸籍も男にしたいと思うってます」

予想の範囲ではあるが、驚愕の表情のあとでどう返答していいか困惑している様子は幾度となく見てきたことだ。この瞬間はいつも嫌になる。なれることはない。だから私は余程のことがない限り、打ち明けようとまではしないが、状況が状況だ。私は続けることにした。言葉を一つ吐き出すたびに、精神をえぐられる苦痛を伴うが仕方ない。先生が詳しく性同一性障害についての説明を加えている横で、私は覚悟を決めた。少し、長くなるけどいいですかと前置きした。足立刑事の好奇の目が痛い、一度覚悟を決めた私は全部話すことにした。いらぬ疑いをかけられるのはお断りだ。そのたびに何度も何度も話すのも嫌だ。一拍おいて、私は話し始めた。これは家族と会話していく中で齟齬が出ないように必死で創り上げたこの世界の私の置かれていた環境を話すことにもつながってくる。手を抜くわけにはいかなかった。

「私が初めて自覚したのは、中学1年生の頃でした。中学まで一緒だった親友がいたとお話したと思いますが、その子が私の初恋です。当時は戸惑ったし、気の迷いだと思って男子と付き合ったこともありましたが、ストレスが溜まっていく一方でした。だれにも言えなくて、女になっていく自分が嫌で、でもなんでそこまで嫌悪するのか分からなくて、パニック状態になることが多かったんです。実は私の体は生まれつき子宮がありません。初潮が来たとき大量出血で入院して初めて気付いたんですけど、その時子どもが産めないことに絶望するどころか嬉しいと思う自分がいて、追い詰められていた私はもう訳が分からなくなってその、一度自分の胸を切り落とそうとしたんです。その時に入院した先で今の精神科医の先生の勧め

でカウンセリングを受けることになったんで、一度この街を離れることになったんです。親友は何も知りません。私がかんな体なのも、ずっと好きだったことも。ただずっと私が何も言わないことを知ってて、心配してくれてました。何も言わずに居なくなるのは耐えられなくて、一度だけ全部打ち明けようとしたんです。結局スレ違いでできなかったけど。……この街に帰ってくるなんて思いもしませんでした。精神的にどん底だった私を支えてくれた祖父が癌で倒れて、治療の副作用で農業にまで差し障りが出てくるなんてことがなければなかったと思います。あとは、さっきお話したとおりです。初恋の人にはもう親友がいて、私はかつてのような親友にはなれないし、彼女は彼女で私と会う約束をすっぱかしたから私が怒ってるって勘違いして、謝ってくるし、私と彼女を仲直りさせたい親友がいろいろ誘ってくれるし。でももう一度全部告白するユウキは正直今の私にはありません。正直八方塞がりにも程があるのに、全然気づかないふりをしていたんでしょう。マヨナカテレビには運命の相手が誰かってうつすらしいので、彼女が見えてしまった時の衝撃はその、想像以上だったみたいです」

家族の話とテレビの中で見てきたこと、そして私の過去を絡めながら延々と話し続ける。先生が横でこの世界の私の通院や入院、カウンセリング内容について触れながら説明補足してくれるのを聞いている限り、私のように彼女の受け入れと友達宣言を携えてこれなかった代償は大きかったようだ。自分を自分で自信を持って肯定してあげられない自己評価の低さが顕著に洗わえているエピソードの羅列。正直聞いていること事態が苦痛だった。

「私は小さい頃から癇癪持ちで、かつとなったり気に入らないことがあったりすると感情の押さえが効かなくなるんです。最近は落ちて着いて周りを見ることができるようになったんで、無神経に当り散らして周りに迷惑を掛けることは少なくなったと思うんですけど、

今度はその鬱憤を打ち明けられる相手がなくて貯めこんでたんです。転校してきて環境に不慣れなこととか、もともと転校してくる前はこの街で育ったんでかつての友人たちもいるんですけど、仲よかった友達にはもう親友って呼べる人ができてたりして。もともと友達づきあいが下手くそなんで、新しい友達作りも不安で……そのうち学校に行きたくなかったんです。でも2年生になって新学期に入って、学校も行かないでふらふらしてるのはおばあちゃん達は気付いてたけど、あえて何も言わずいつも送り出してくれてたのでずっと罪悪感があったんです。これを基に学校行ってみようかなって思ってたんです。そしたら、新しいクラスで何人が友達ができて。それでやっと学校に行けるようになって、今までのストレスは忘れた気になってました。でも、そんな事なかった……！！」

一度話し始めたら、もう止められるものも止められなくなっていた。狼狽する刑事二人には置いてきぼりで、私は延々としゃべり続け、気づいたらもう20分も立っていた。先生とのカウンセリングの中でも一度も泣くことがなかった私が、いつの間にか目尻を熱くしていることに気付いたとき、ああ、一時的にでもこの世界の私が入り込んできたのだろうかと思つた。

「……………すみません。みんな優しいから聞いてくれないんです」

「あー、その、なんだろ。辛かったのにいろいろ話してくれてありがとう。無神経なこと聞いちゃったね」

「いえ、事情を説明するにはこうするしかありません。気にしないでください」

「……………だが、やはりパジャマ姿で家出は少し、いただけないな。これからは気をつけなさい。男だろうが女だろうが、事件に巻き込

まれてしまうことには変わらない。いいね？」

「はい、気をつけます。ありがとうございます」

「あとは警察に任せてくれれば、君にヒドイことした奴も見つけるからさ。もし何か気付いたことがあったら、電話してね」

「はい、わかりました」

二人が先生と対話している。これは終わりかな？という空気が流れ始めた頃、おもむろに足立刑事が手帳を広げた。そうそう、と取ったつけたように言われるが、どこか視線が鋭くなったような気がして私は身がすくんだ。

「そうだ。確か君、アナウンサーが亡くなった日、お祖母ちゃんと一緒に天城屋旅館に行ってるよね？トイレ借りたらしいけど、何か不審な人とか見なかった？」

「…………よく、覚えてないです。緊張してたから。でも、母屋の方だったからか、変な人は見ませんでした。でも、」

「でも？」

身を乗り出すような視線。もしこの部屋にあるテレビが小さければ、また突き落とされていたのだろうか、と思うと恐怖に駆られる。

「反対側に通路が見えたんです。旅館の方の。誰か、喧嘩してたような気がします。男の人と女の人の言い争う声がしたんで。でも遠かったし、すりガラスと障子ごしだったからぼんやりとしか姿は見えてないです。とりあえず、女の方は白っぽい服で、男の方は黒っぽい服で、」

い服の人ってことくらいしか」

「なるほど。貴重な情報、どうもありがとう」

殺気が緩む。私は始終初恋の人とその親友については名前を伏せていたけれど、祖母や天城の母、番頭さんから天城屋旅館に行くまでの経緯を聞かなければそもそもこのことは聞かれないはずだ。だから多分足立刑事は天城が私の初恋の人だと気付いている。私と天城が親戚経由の知り合いで、小学校からの付き合いだという話題に彼らが触れても不審な点は無いはずだ。この世界の私は天城以外には特別仲の良い友人はいなかったようだから、かつての親友と呼称すれば天城が浮かんでくるはずだ。この世界の私の置かれていた精神状態は憶測ながら散々ぶつちやけたから、その人の家に行くことがどれだけストレスと緊張に苛まれるか検討くらいは着いているはずだ。目撃したという事実を伏せるということは、本当は男の姿が検討が着いているのに意図的に黙っていることにつながる。これでは目が間違いないくあっている犯人が私を見ているはずなのにおかしいことになる。黙っている理由はない。でも具体的に証言してしまうと立つのは死亡フラグだ。そもそも私が犯人を予め知っている状態でサスペンスドラマを見ている状況だったからこそアイツはだれかはつきりと判断するに至っている。だから私が怪しまれない方法はとりあえず見えたことを臆気ながらも話すことが1番だろう。その予想はどうやら当たっていたようで、足立刑事から殺気は感じない小西先輩に迫ったのは可愛かったからだろうし、拒否されて逆上した拳句のテレビに突き落とすはずだから、いろいろと抱えていることをぶつちやけた私に変な幻想をいだいて襲ってくるのは余程の変態くらいしかないだろう。

お疲れ様、という労いと共に刑事二人が去っていく。はあ、と今までで1番大きなため息を吐き出したあとで、私は倒れこむようにべ

ツドに沈んだ。無駄に疲れた気がする。お疲れ様、と先生に肩を叩かれて、ようやく私は自然と笑うことができたのだった。

アムリタは味方全体のダウン・死亡以外の状態異常を治療するスキルのことである。

神話によるとアスラ族との戦いに疲弊した神々が、アスラ族に協力させて造ったとされる。乳海と呼ばれる海に様々な素材を投げ入れ、マンドラ山を攪拌棒に、ヴァースキ竜王を綱として1000年の間攪拌した末に、ダヌヴァンタリ神がアムリタの入った壺を携えて出現した。神々とアスラたちはアムリタを自分たちだけのものにしようとしたが、ヴィシュヌ神の機転によって神々のものとなった。しかし神々がアムリタを飲んでいるとき魔神ラーフがまぎれ込んで盗み飲んだ。ラーフはヴィシュヌ神によって首を切り落とされたが、アムリタの力で死なず、ラーフとケートウという天の遊星となり、日食、月食を起こす悪星となった。

その後、アムリタは神々によって厳重に保管されたが、ガルダがこれを略奪した。またナーガはアムリタの壺が置かれていたところを何度もなめたために舌が二股に分かれたとされる。

第18話 ハートビター ハートブレイク

2011年4月27日 雨

私の復帰後初の登校日はいつもと変わらない日常の中にある。いつもより少しだけ早いバスに乗った私は、隣町に通勤するために無人駅のホームに消えたサラリーマンを見送って、運動部の朝レクなのかジャージ姿で登校している生徒たちが駆け足で雨の中消えていくのをぼんやりと眺めながら、ゆっくりと通学路を歩いていた。八十神高校の指定ジャージは全学年で共通の色のため、彼女たちが下級生なのか同級生なのか上級生なのかすら判別ができない。しかし、バスに乗りこんできた私に対して物珍しさにちらと視線は向けたものの、彼女たちは話しかけてくる様子もなく、ほかの乗客が見とめるのにも気づかない傲慢さで会話を再開していたところからして、察せられる関係せいだから無視してもかまわないだろう。私は私で読みかけの文庫本を広げてウォークマンを聞きながら世界に没頭していたから、途中で肩でも叩かれたりしない限り気付かなかったことは断言できる。今日は何となく気分が重い。それはきつと数日降り続くという雨の予報によるものでもあるし、わざわざ8時にすらなっていない時間帯に学校に歩いている現状でもあるし、何よりも。数日の無断欠席と入院生活からの復帰初日ということとは、昨日祖母につれられて校長室に足を運び、事情説明とご迷惑をおかけしたという謝罪をしに行った時のことを思い出すからだろう。仙人のような様相のミリオタ校長先生からやんわりとしたお叱りをうけたのは、家出扱いとなっている私の衝動的な失踪と数日の無断欠席に対して。そして大人に対してだれにも頼ろうとしなかったことに対する無謀さについて。まだまだ大人と同じように爪先立つには早いから、もう少しだけ守られる側にいなさいといわれた。高校生

となつてしまつたものの、頭の中ではサラリーマンも経験した大学生だ。面と向かつて叱責されることは少なくなつたことを思えば、なかなか衝撃だつたのを覚えている。これがどんなにありがたいことなのか、本来気付くのはもつともつと後のはずだからいい経験になつたと思えばいいだろう。そして傷害事件に巻き込まれたことに対する気遣いと私の持つている特殊な事情に関して、少しでも確認事項があつた。どうやら私が転校してくる前から何度か祖母と校長先生は私に関していろいろと意見を交わしていたようで、私は何度か問われた質問に対して首を縦に振るだけでよかった。個人的には途中から参加してきた担任である諸岡先生からも同じような叱責と気遣いを受けたことだろう。生徒指導に熱い先生だったという生徒のうわさも遜色なかつたといつていい。私が休んでいた期間にたまりまくつた課題や進んでしまつた倫理の範囲を指摘され、明日までに提出するようにという鬼のような指導が入つたのは流石に閉口した。まあ、忙しい方が外聞を気にする暇もないだろうといううれしくない気遣いだったのは別の話である。他教科については随時先生からもらつてくるようにと言われたのはめんどくさい以外の何ものでもなかつたが。ただ、一言二言ふさわしくない言動と態度が出て、校長先生と祖母から指摘を受け、訂正するという場面があつたのはご愛敬だ。その中で言われたのが、長期にわたる無断欠席と入院生活は様々な憶測を呼んでいたらしく、小さい規模の高校の特性上、ずいぶんと根も葉もないうわさが立っているとのことである。教員からのフォローはなるべく入れるとありがたい言葉はあつたものの、全てをフォローすることは無理だと言われた。クラスメイトや友人や同じ部活のメンバーといった身近な存在から、少しずつでいいから誤解やうわさを自分からも訂正して言つてほしいとのことである。無理をする必要はないから、つらいならば保健室登校も視野に入れるという選択肢も提示されたのだが、いずれにせよ根も葉もないうわさに飛びつくような赤の他人にまでおびえていてはどうしようもないから登校すると私は言つた。普通に生活していても自

分の知らないところで何かしら言われるのが学校生活なのだ、今回のような騒動の渦中にあるような人間は格好の標的なのは仕方ない。ひそひそいわれるのは気分が重いものの、私に対応すべきなのは明確な意思をもって詮索したり、態度で示してきた人たちだけでいい。実家に帰ってから数日は私の身を心配したという名目で訪ねてきた近所の人たちに対する対応でもうある程度覚悟の地下はできていた。いつてもいい。的外れな指摘や助言であつても謝罪と参考にするという笑顔を持って対応すればたいいは満足して去っていく。問題は高校生はまだよほど人間ができていなければ、オブラートに包むという作業を知らない人が多いということだろうか。まあ、気にしなくてもいいだろう。どうせ家出して傷害事件に巻き込まれた自業自得な人間の噂話よりも、これからはもつとももつと話題をかつさらうような強烈な事件や事故、そしてマヨナカテレビという存在が学校中に広がっていくのだから。

げた箱で靴をはきかえた私は、まっすぐに職員室へと直行した。失礼しますと中に入れば、すでに何人か先生が準備を始めている。早速力バンから倫理の課題を挟んだクリアファイルを諸岡先生の机に置いた私は、メモ用紙を切り取って私のクラスと出席番号と名前、そして倫理の課題だと軽く情報に乗つけた。これから大変だと溜息が出る。私にはおおよそ2週間のブランクという大きな壁が立ちはだかつていると改めて自覚せざるを得ない。根も葉もないうわさに悩まされるよりも、週に1時間しかない科目ならともかく、主要五科目、特に私の苦手な理数系科目に関する課題や授業に追いつくための復習や予習が山積していることの方が憂鬱だ。恐るべき高校生生活。復帰後の生徒の本業はあくまで勉強だと残酷な事実を突き付けてくれる。ああ、そうである。ぶっちゃけ校長先生からこれから大変だけど今までの学生態度なら頑張れば追いつけるさと投げやりな指摘をされるまで全く視野に入っていなかったのは秘密である。幸いなのは私の欠席が授業の初期であつたため中間テストの日数を考

えればまだ何とか追いつけそうな気配がすることくらいだろうか。
メモ帳に記した教科一覧の倫理にバツをつけた私は辺りを見回した。
毎回小テストをするような科目だと内申点も結構響いているはずである。少しでも取り返さなくてはならないと私はおぼろげながらに覚えている担当教員に手当たり次第に聞いて回る作業を開始した。
個人的に一番堪えたのは、英語兼体育を担当している近藤先生から「体力テスト」を体育の時間に受けるよう指示があったことである。
体力づくり的な意味で長距離走や短距離走、身体を動かす内容を中心にやっているらしい中で、一人だけ淡々と記録を取るのには相当恥ずかしい。私は迷うことなく昼休みを選択した。そのせいでブラスバンド部の顧問の先生から、現在本番練習に差し掛かっている定期演奏会には出せないと通知があった。まずい。非常にまずい。吹奏楽器は毎日毎日きちんと使って手入れしてやらないとすっかりとした音色を奏でてはくれない。しばらくはまた基礎練習からやり直しである。本当ならば、朝れんと昼休みと放課後はブラスバンド部に捧げられるというのに。とそうこうしているうちに8時を過ぎ、会議があるからと職員室から退室を促された私はカバンいっぱいにならないばかりの課題を抱えて教室に帰ることになったのだった。すっかり忘れていたが今の時期は小西先輩の事件でマスコミに対する対応と事態の鎮静化、表ざたになっていない天城の失踪に関して隠そうと躍起になっていいる時期だったはずだ。天城が救出されたのかどうかは分からないものの、先生方は相当忙しいはずである。私に意図的に情報が与えられていないのは、まだ衝動的に家出したとはいえ傷害事件に巻き込まれた人間だったから気遣ったのだろうか？にしては「マスコミにあることないことしゃべるな」というわざわざ朝礼を開いてまで通知すること、そして生徒が亡くなったことを言わないのはあまりにも不自然すぎる気がしてしまう。もしかして、と何となく予感めいた期待が胸を去来するものの、チャイムが鳴って我に帰った私はあわてて二階に向かうことにした。

扉越しの教室は静寂に満ちていた。久しぶりにやってきた教室は誰もいない。時計を見れば、いつも私が学校に到着するより少しだけ早い時間帯を指していた。いつもの登校時間ですら30分経過しないと朝練習を切り上げてきた運動部のメンツや日直といった特別用事があつて早く来ているクラスメイトとは会わない。誰もいない教室を見られるのは、朝早く来る人間の特権である。さっそく久しぶりに一番後方の席に着いた私は、なんとなく嫌な予感がして机の下に手をやってみるとこれでもかといわんばかりに詰め込まれたプリントやノート。本屋のロゴが入っているビニル袋を広げみると、いつだったか久慈川のDVDを貸してくれると約束していた男子生徒の借りものが入っている。これはひどい。全部引っぱり出して数えてみるが、カバンに入れた課題と復習分のプリントを合わせるととてもではないが今日中に全部処理するのは無理そうだ。幸いロッカーの中には全教科分の教科書やノート、資料集が突っ込んであり、わざわざ家に持ち帰る必要はないものの、昼休みもつぶさなければ間に合いそうにない。何せ全ての課題には提出期限がある。追加されたプリントの提出期限をひとつずつ確認しながら、もらってきた課題とかぶっているものは除外していくが余り削減に協力してくれない。教科ごとに課題を分けた私は、まずは得意教科から先に終わらせてしまおうとロッカーに向かうことにした。正直今にも泣きそうである。進んだ教科についてノートやワーク、問題集の写しを頼まなければならぬし、考え付く限り済ませなければならぬものが山積している。溜息しか出なかった。ゴールデンウィーク前には終わらせることができるだろうか。しばらくはこれらと格闘する必要があるそうである。もう嫌だ。今日一日が始まりもしていないくせに、私はもう別の意味で心が折れ掛かっていた。それにしても、思っていたより保存状態がいいプリントには驚いた。折りたたみもせずそのままどんどん入れられていったプリントは、最終的にはめんどくさくなって奥の方にくしゃくしゃになってしまっているものである。私がいなくても毎日教室は掃除される。誰かが適当に入れ

るだろうことを考えると、私はバスと歩きで遠くから来ているから、私のクラスには同じ方角の出身者はいないはずだし、わざわざ届けてくれるにしても毎日は流石に面倒なのだろう。小学生じゃあるまいし。だから正直プリントはすさまじいことになっている想像しかできなかったのだが、これはいい意味で裏切られた。おそらくこのプリントの山の管理を任されていたであろう隣の席に私は小さく笑った。てつきりBかO型かと思っていたのに、キャラブックのまさかのA型設定に驚いたものだが、案外あっているのかもしれない。

さて、問題である。

朝登校してきたら、2週間も学校を休んでいたクラスメイトが久しぶりに登校してきていたとする。そのクラスメイトは根も葉もない噂から信憑性のある憶測までいろんな噂が飛び交っていたものの、いまいちクラスメイトに何があったのかよくわからない。親しい友人が心配してメールをしても一通たりとも返事がこない。やがて病欠から入院と担任に知らされ、しかし面会は出来ないといくぎを刺されていたとしよう。噂ばかりが先行していた渦中の人物である。今まで話したことのないクラスメイトですら真相が聞きたくて好奇の視線を向け、どこかそわそわしているとする。そんなクラスメイトが今にも泣きそうな顔をして必死に電子辞書片手に英語の課題と格闘していて、しかも山のようなプリントを机の上に乗っけていて、しかもパンパンに膨らんだカバンを机の横にかけていたとするならば。ちらちらと柱にかけられている時計を時折見ながら、少しでも問題を進めようとぶつぶつ考えながらシャーペンを走らせ、力が入ったがためにシンが折れ、不機嫌になりながらペンケースを探つて

いたとするならば。誰が声をかけられるだろうか。

無遠慮に今まで何をしていたのだと軽口叩けるのは仲の良い人間だけであろう。クラスメイトというつながりしかない人間はなかなか声をかけずらいという意識が芽生える。2週間も休んでいればたまるものはたまるかと同情や悲哀を感じるかもしれない。そして鬼気迫る様子に気後れして、そうっとしておこうという選択肢を選ぶかもしれない。少しでもそのクラスメイトの機嫌が良くなるであろう課題の処理が終わるまで見守ろうとするかもしれない。ようやくホームルームが始まる10分前になって、ようやく英語の課題だけ終わらせることができて、できたー、と思わずつぶやいた私はなんだか微妙な空気が漂っている教室に気付いて辺りを見渡した。どこともなく気まずそうなクラスメイトがいる。話しかけていいのか悪いのか悩んでいる友人がいる。気づけばずいぶんと教室は騒がしくなっていた。あはは、と思わず苦笑いがこぼれた私は、視線があった友人たちに軽くおはようと笑いかける。どこかほっとした様子で近づいてくる友人たち。再び喧騒が帰ってくる。片付けてくると消しかすを下敷きでかき集め、私は後方にあるゴミ箱に捨てに行く。軽く手を払った私は、小さく息を吐いた。きつとこれから怒涛の質問攻めが待っているに違いない。昼休みは体力測定で時間がつぶれてしまうから、ヘタをしたら下校時間ぎりぎりの7時半まで残っている必要が出てくるかもしれない。あまりに遅くなったら祖母に電話しなくては。例の事件で私が一人で登校することに難色を示していた祖父母と家族を説き伏せられたのは、毎日メールをするようにと義務付けられたからに他ならなかった。GPS機能を付けるという方向も割と本気で検討された時にはどうしようかと思っただが、これから高校受験が待っている自分をほっといて過剰に保護しようとする家族に嫉妬した弟の微笑ましい問答があり、私自身今回の件で再び

家族と暮らすという選択肢は見えてこなかったため現状維持という形で落ち着いている。里中や天城はわざわざ実家を訪ねてくれたそうである。少なくとも何も言えないまま転校するのはあまりにも咎めた。

振り返った私は、里中と月森が入ってくるのをみた。後から遅れて息を切らせた花村が入ってくる。机で私を待っている友人たちの輪に溶け込む前に、私はひらひら、と手を揺らして軽く会釈した。

「おはよう、久しぶり」

たった一言笑った私に、一瞬だけ硬直してしまった里中は何度か瞬きして見る。

「おはよう。あ、俺は月森孝介。12日から転校してきたんだ、よろしくな」

「私は神薙だ。今後ともよろしく」

クラスメイトは月森と私が知り合いなのは知らないことを考慮してか先手を打って挨拶と自己紹介をしてくれた月森に、私は小さく肩を揺らした。横から出てきた花村が私を認めておー！とあいさつしてくれた。

「よーっす、神薙！久しぶりだな。もう大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫、それより見てくれこの課題の山。今まで休んだっけだって。死にそうなんだけど」

「うわー同情するわー。俺の汚いノートでよけりゃ見せてやつからさ、頑張れよ」

「昼休みは体力測定もあるからしばらくは休めそうにないな。もうやだ、帰りたい」

「あはは、がんばれー」

「あ、そうそう、引き出しのプリントありがとな。綺麗で驚いた」

「おいそれどーという意味だよ！確かによくA型って言ったら驚かれるけど」

失礼じゃね？と席に着いた月森に花村が振る。え、A型だったのかと真顔で返された花村はおいおいおいと月森に詰め寄った。お前もか、月森い！とどこか必死な花村に友人たちと笑っていると、緑色のジャージがぴよんぴよんジャンプしている。ちよつとまったーつと大きな声とともにぐいつと花村と月森を押しつけ、私の前に飛んできた小さな影はずいっと私のところに近づいてくる。

「アタシのこと忘れてない？華麗に無視しないでよね、傷つくじゃん！おはよう、晃！」

「ああ、おはよう、千枝」

向日葵のように笑う彼女を見て、私は心の底から笑った。あとは雪が揃えば後で話ができるなと小声で話すと、一瞬だけ里中の表情が曇る。あの、その、と不自然に口ごもる里中。否応にも分かっけしちゃう状況。まさか。ああ、それなら。口に出すより早く彼女の沈黙を汲みあげたのか、月森が花村に何やら耳打ちしてけしかけていた。月森と私は初対面であるという前提でクラスメイト達、友人たちはこの問答を垣間見ている。話を振るなら花村の方が自然だと思った

らしい。横からひよいと顔を出した花村がさりげなく笑った。

「順番は守れよ、里中。神薙はもう用事ができてんだから、昼休みでいいだろ？」

「むー、分かったわよ、うつさいなあ」

「じゃあ、後でな」

「ん。後でね、晃」

千枝達を見届けて、私は友人たちとともに談笑することにした。もたげていた不安を必死で押し殺しながら、少しでも平穏な日々につきりたくて話の中に溶け込んでいく。チャイムが鳴ったのは、そのあとのすぐのことだった。

外は雨が降り続けている。

昼休みは体育の時間の体力測定に全力を費やし、授業はなんとか終わることが出来た。今日はプラスバンド部の練習は休みだが、個人練習をする人間がちらほらという曜日だ。人がまばらになり始めた教室で、みんなで話をしようとしていた私に、月森が職員室に行こうと誘った時には驚いたのである。里中と花村を連れて職員室を潜り抜けた私の前で、月森はさも当たり前のようにプラスバンド部の一番最初の部員がやっている鍵と日誌を取ってくるという作業をやったのけていた。ああ、そう言えば文化部の解禁日は25日だった、昨日じゃないか。そうだ、すっかり忘れていた。プラスバンド部は

文化部の選択の一つじゃないか。そうか、月森はブラスバンド部に入ったのか、節子攻略してくれるのか、これはいい。なんという福眼！こつそり心の中でガッツポーズをきめつつ、私はこれからよろしく、先輩、と冗談めかして笑う月森に、肩をすくめて笑うしかなかった。

「お、お邪魔します」

「すつげえ、音楽の時間以外でくんの初めてだわ、俺」

控えめなノックの後、ドアノブを回して顔だけ出した里中が呼びかけるので、私は上靴を持ってそのまま入るように促した。部員が使っている準備室のげた箱の中に入れてしまえば何人この部屋にいないなんて分かりはしないのだ。拳動不審気味に入ってきた里中と花村が私を搜しているの、こつちだと呼びかければあわててかけてくる。月森はと言えばああ、上履きはそこのげた箱に適当に突っ込んでいてくれ、どうせ今日は誰も来ないから、とすっかり部員の顔をしていた。どうやら気が合う部員と会えたらしい。投げやりに言われた花村たちは、昨日の今日でこれってどんだけ適応力があるんだよと顔を見合わせていた。ずいぶんと順応が早いらしい。さすがは主人公だ。それに加えてずいぶんとマイペースなところがあるらしい。私はと言えば2週間ぶりに手にした楽器を手入れするべく収納場所からケースを引っ張り出していたところで、これそこらへんに置いておいてくれ、と里中と花村に渡してある。おもつと驚いている二人だが、エレベータなんて便利なものがあるわけもないこの学校で演奏会などで毎回3階までの上り下りの運搬もブラバンの仕事なのだといえは驚いていた。手入れする布とスプレーを引っ張り出し、すぐ隣の音楽室に行こうと告げた。

自称特別捜査本部は雨天により屋上は無理、教室では私に対するク

ラスメイト達の好奇心な視線のせいでいろいろと話ができないため、臨時支部という形で音楽室で行う運びとなっている。ちなみに顧問の先生から楽器の手入れと練習をしたいと申し入れて鍵は借りて来てある。実は部員同士がこっそりここでお昼を食べるために顧問の先生には内緒でスペアキーがあったりするのだが、どこぞのアホ男子学生が食べたパンの袋をごみ箱に捨てるという証拠隠滅を怠ったため現在鍵は変えられており、すっかり意味をなさなくなっている。最悪である。私たちはフローリングがひかれた部屋に適当に座った。一応私はここで練習と手入れをしたというアリバイ工作をしなければならぬ。個人で管理が任されている楽器は普通ほかの部員が勝手に触ることはない。ヘタにチューニングや調整をしてしまうと音が変わってしまうからである。案の定2週間ぶりの様相を呈しているホルンにうわあ、と思いつつ、私は1から手入れを始めた。わざわざ個人用ではなくて共用の部活品を使っているのは、隅っこにある洗面所で洗った後に物干しざおに通すためだ。興味しんしんで見つめる千枝達に軽く説明しながら、やがて手入れを終える。そんな感じで楽器を片づけた私は千枝たちの前に戻ってきた。

「じゃあ本題に入ろうか。まずは月森、私のことはどこまで話したんだ？」

「えっと、とりあえず晃が失踪したのはもうひとりの自分に連れ去られたことと、そのせいで4月に入る前からの記憶があいまいなのは話した。そのせいでもうひとりの自分を受け入れている状態なのに、ペルソナにすることができないってことも」

「そうか、ありがとう。あいつには？」

「いや、まだ千枝達とは会わせてない。というよりもあの時と今とじゃはいる場所が違うから、あの場所まで行く道がさっぱり分から

ないんだ。それに今はそれどころじゃない」

「それどころじゃない？」

「ああ、そっからは俺が話すよ。いいか？」

分かった、と先を促すと花村が口を開く。

「天城は旅館が忙しくて帰っちまったんだけどさ。こいつがお前を助けたとかわけわかんねーこというから里中が冗談言うなって怒っちまって、実際にテレビに入れるかどうか見せてみろって話になっちまったんだよ」

「だからごめんってば！その日マヨナカテレビ見たら、なんか晃が誰かに襲われてるっぽい映像見ちゃうし、途中でテレビが消えちゃうしですごく怖かったんだから！雪子は泣きそうな電話してくるしもうどうしようかって。そしたら月森君があっさり大丈夫だっていうんだもん。だってさ、そんな信じられるわけないじゃん」

「あれは俺の言い方も悪かったと思うから気にしてないよ」

「ありがと、月森君」

「そのせいで俺も巻き込まれてテレビに吸い込まれる羽目になっちまったんですけどー？」

「う、うっさいなあ！ごめんっていつてるでしょー？いつまでひきずんのよ、ヒーロー願望全開だったくせに」

「だあああっ？！何言っちゃってんのこのひと？！」

「……月森、解説してくれると助かるんだけど」

「実は俺があの日落ちてきたのは、そもそも里中さんが晁のことを心配してて、少しでも行方が分かったらってことでマヨナカテレビを見る約束をしたからなんだ。マヨナカテレビだと俺が助けに入る直前で放送が切れたらしくて。その日は天城さんお休みだったんだけど、里中さんはもう、なんだろうな、パニック寸前だったから、つい「大丈夫」だって言っちゃったんだ。里中さんは何も知らなかったから、最近知り合った俺が何の根拠もなく慰めるようなことを言ったから怒っちゃって」

「ホントごめん。アタシ、かーってなっちゃうとなかなか前が見えなくなっちゃって」

「ううん、いいよ。それで…その、なんで知ってるんだと言われたから俺が助けたってつい」

「テレビに入れると言っちゃったわけか」

「うん」

「正直俺もあんなときはちょっとあれだと思ったわ、うん」

「そっか、心配かけてごめんな、千枝」

「ううん。無事だったからいいよ」

「えっと、まあ、なんだろう。仲直りできてるようで安心した」

「そりゃーさあ、ジュネスの家電売り場で堂々と腕やら首やら突っ込まれちゃ怒りもふつとぶつて。何してんだお前——って思わず叫んじゃったもんなあ」

「お客さん来た時にはどうなるかと思ったよねー。月森君、中は広そうだとか空間が広がってるとか冷静に実況するんだもん」

「空間で何だよ、広いつてなんだよつていちいち突っ込ませるような問題児だとは思わなかったぜホント。普通そんなことになったらひっこ抜こうとするだろ？そしたら里中の奴どーんって突っ込みやがってさ」

「わけわかんなくなっちゃったんだもん、どうしろつてのよー！」

「その先でクマと再会したんだ」

「冷静だな、そこー！」

「クマはなんて？」

「神薙もかよ。おい、里中、あんまり話脱線しすぎると蚊帳の外にされちまうぞ」

「花村のせいだろがー」

「なんで俺？！」

「あんたが漏れそうとかなんとか信じらんない！」

「だからさりとてピンポイントで暴露すンナよおい！」

「悪い、二人とも静かにしてくれ」

「ちょっとづるさい」

「はい」

「内容は初めて会ったときと変わらなかったな。相変わらず自分が何なのか分からなくて困ってるみたいだった。ただ、前よりは随分と落ち着いて話せるようになってた」

「本人はさびしんボーイらしいからな」

「……そうか、な」

「で？」

「アナウンサーの部屋に案内してもらった。クマは晁の場所は覚えていないようだったから案内はなかったけど、俺があっちの世界に来たことがあるって証明してくれて助かったよ。とりあえず俺の疑いは晴れて、花村たちと一緒に帰してもらったんだ」

「それでさ、その日雨だったからマヨナカテレビ見てみようかって話になったの。こんなことあったら気になるじゃない？」

「……そしたら、今度は小西先輩がうつってたんだ」

「小西先輩が？」

「ああ。まだ、こう、ぼーって感じだったけど。一番最初に気付い

たのは正直寝れなくてさ、まだ月森の携帯番号とか聞いてなかったからやきもきしながら見てたぜ。心配になってメールしたんだけど、そしたらあっさりどうしたんだってメールきたから安心したんだけどさ、その日からバイト来なくなっちまって。家の都合かなって思ったら……」

「そしたら晃の時みたいにマヨナカテレビうつっちゃうんだもん。びっくりしたよね」

「あんときは月森しかテレビん中入れなかったからさ、放課後になつたら月森に頼んでみようってそれだけで頭いっぱいだったからなあ」

「だからってフードコートで模擬刀ぶん回す馬鹿がどこにいのよ。月森君のおじさんがいなかったら補導歴ついてたくせにー」

「へいへい、わるうございましたってば。そう言えばテレビん中に初めて入った時も、小西先輩のときも月森の「落ち着け」って声は結構効いたなあ」

「うんうん。だから特別捜査本部のリーダーは月森君なんだよね」

「今思えば戦う手段もねえのに、雰囲気出しのノリで突撃するなんてあほなことしたよな、俺ら」

「だよねえ、むしろ月森君にすごく負担かけちゃって。もしわけないって感じでさ、あはは」

「いや、でも二人がいなかったら俺も多分積極的に動くことはなかったと思うから感謝してるよ」

「こつちこそ命まで助けてもらって、もうさ、ありがとっただけじゃ足りねえわ」

「小西先輩助けるためになんかすつごく広いダンジョンに行ったんだけどね、そこで小西先輩のシャドウが花村のこと…」

「うざいだの何だの言ってたけどさ、シャドウとはいえ本人に言われたのはきつかったなあ、あはは。でも、さ、ぶっちゃけそれを拒絶したから小西先輩は襲われたわけで、ってことはまだ……！」

「はいはい、のろけはいいから肝心なところスキップしないの」

「月森、解説」

「小西先輩は酒屋の娘さんなんだけど、経営がうまくいっていないらしいんだ。本人はジュネスでバイトして、少しでも家計の足しにしたいって頑張ってるのになかなか理解されなかったらしい。俺たちはあそこで小西先輩が家族や友達を思って行動してるのに、なんだろう、言葉やタイミングが足りなくてなかなか理解してもらえないってという声を聞いたんだ。その中には結構ジュネスに関する近所の人の悪口も入ってて、マヨナカテレビ見てから先輩を助けることで頭がいっぱいだっただ花村は結構疲れてるのに無理してついてきてたんだ。今まで近くにいたのに気付いてあげられなかったとか、いろいろ考えちゃったんだろう。途中で花村のシャドウが襲ってきたから戦ったんだ」

「結構心の奥底で自分も気づいてなかったこと、里中とか月森とか、どっかで聞いているかもしれない小西先輩の前でべらべら言われちゃまってさ、覚悟なんてできてなかったからなあ。はは、情けねえ」

「でも受け入れてたじゃん。カッコいいよ花村。頑張ればヒーローになれるって。頑張れ、キャプテン・ルサンチマン！」

「だからさらりと触れるなっば、うつせえな！こんの肉食女子！」

「……月森、詳細について詳しく」

「やめたげて、お願い！」

「ごめん、晃」

「心の友よー！」

「また今度な」

「さらりと次回予告？！やめてくれっば！それより小西先輩が助かったことの方が大事だろ！」

その言葉に、私は思わず息を飲んで硬直してしまった。本当に？と返した私に、おう！とそれはそれは嬉しそうに花村は笑って答えてくれた。

「小西先輩、助かったのか」

「ああ。花村が自分を受け入れたことでシャドウがペルソナに変化したんだ。だから俺と花村と二人でなんとか」

「……千枝は？」

「アタシはね、クマ吉が信じられないくらいよわつちいからさ、守ってあげてたの。クマ吉は遠くから離れて指示を飛ばしてたんだ。結構いい感じだったよ」

「小西先輩も神薙と一緒に入院してるんだ。でも命に別条はないから心配すんな」

そうか、小西早紀先輩は助かったのか。入院中なのか。私は心の中で安堵のため息をついた。もしかしたら、と予想していたことではあるのだ。本来ならば、アナウンサーの彼女が殺害された事件現場の第一発見者である小西早紀は、同一犯によってテレビに突き落されて第二の被害者となってしまう。しかし、アナウンサーの彼女がテレビに放り込まれるという第一の犯行のすぐ後に、私はこの世界の私の成れの果てによってあのテレビの向こう側に引きずり込まれてしまっている。あんまり考えたくないのだが、本来ただか分からぬほどぼんやりとしか映らないはずの真夜中テレビの向こう側では、きっと私とあのシャドウモドキの恥辱モドキのドラマ仕立てな趣味の悪い深夜番組は毎日のように繰り返し広げられていたに違いない。本来ならば、小西早紀先輩の真夜中テレビとなるはずだった時間帯には、ぼんやりとした次回予告のシルエットではなくて私の真夜中テレビが放映されてしまっていたはずだ。愉快犯なあの男がそんな面白いテレビが絶賛放映中であるにも関わらず、小西早紀先輩をすぐにテレビの中に放り込んでしまうとは限らない。私が月森に救出されたのは4月の16日だ。私は月森を見た。

「私が助けてもらったのは、16日だったよな？」

「うん。小西先輩がテレビの中に放り込まれたのは、19日なんだ」

「19日？」

「うん。ほら、一日中雨が降ってた日、あつただろ？危なかったんだよ。次の日は霧が出るだろうって予報が出てたからさ、花村たちとあわててジユネスのテレビくぐって助けに行っただ」

「なあ、花村。犯人は？小西先輩は何か覚えてないのか？」

「いんや、全然」

花村は肩をすくめた。

「それがさ、よく覚えてないんだってよ。助けてくれたお礼についていろいろと教えてくれたんだけどさ、メールで聞いた限りでは、不審人物に声かけられたって感じはしなかったんだってよ。何でも、普通に挨拶して、ドア開けて、そしたら記憶が飛んじやったらしいからなあ。小西先輩、あんときはテレビに出ちゃったせいで、近所の人や学校の友達、家族にいろいろと聞かれたし、知らない人からも声かけられまくってたから、精神的に参ってたこともあってさっぱりだって。ただ、黒と白の四角い輪郭の中に押し込まれたことだけは覚えてるらしいぜ？」

「テレビの中に放り込まれたのは確かなんだな」

「小西先輩が復帰したら、いろいろ聞いてみつか、って感じだな」

雰囲気がいよいよほんの少しばかり重くなる。そうか、と私はため息をつくほかなかった。どうやら、一つ、ずれたようだ。私が救出されたことで、真夜中テレビが映らなくなった。霧が出たのに誰も発見されなかった。死体が出なかった。私は死ななかったのに、アナウンサーは死んだ。この違いはなんだ、という比較できる前例が出

来た。真夜中テレビに予告されるぼんやりとした映像と、真夜中テレビというふざけた番組と霧の関連がなおさらあいまいになってしまふ。これじゃあ、どっちが小西先輩をテレビに放り込んだのか分からない。どっちだろう？ただ一つ言えるのは、私の真夜中テレビを彼らは確実に見ているということだけだ。状況が悪化しなければいいのだが。そして私は、とうとう訊きたくなかったことを切り出そうと決めたらしい里中の顔を見るに至る。沈黙して耳を傾けることにした。

「もう、わけわかんないよ、晃。次はね、雪子だったの。一番に氣付いたのはアタシだった。小西先輩がいうには誰かに突き落とされたことは覚えてるんだけど、それ以外のことはさっぱりなんだって無理もないよね、あんなとこ、突然放り込まれたらわけわかんないもん。何とか、今度こそあっちの世界に人をほおりこんでる犯人捕まえようって頑張ってたんだけどなあ」

「いうなよ、それは。俺達しかテレビン中入って助けられる人間なんていないんだ、うだうだいっても仕方ないだろ、元氣出せよ里中。お前らしくないぞ」

「わ、分かってるってば。おとといは、その、迷惑かけちゃったし」

「花村も里中さんも大事な人が大変な目にあってるから、何とか助けようとするのは分かるんだけど、どうしても自分のことはほったらかしになるみたいなんだ。結構シャドウたちも強くなってきて、里中さんは危ないから留守番を頼むって方向になったんだけど、それが返って追いつめちゃったみたいでさ」

「月森はなんでか何体もペルソナ使えるからさ、俺たちは一体しか使えないせいでもうしても戦力を大きく月森に負担かけちゃうんだ

よなあ。なんか防具とかアイテムを買う資金集めとか言ってバイトまで始めちゃうし、そのうち倒れるんじゃないかって心配したんだよ。里中の気持ちも分かるけどーって言ったんだけど、中立のつもりだけとやっぱ月森よりになっちまってさ。で、里中が一人で飛び出して行っちゃまって、俺と同じパターン。やっぱ俺ら男だから、なかなか話しにくいこともあったみたいでさ、フォローしきれなかったのが原因ってやつ？わりいな、里中」

「もう、いいってば。恥ずかしいからやめよう、この話！」

「月森、詳しく」

「やめてってばあああ！今はそれより雪子の救出の方が大事でしょ！もう時間がないんだよ、どうするの？」

「いつもの通りジュネスのフードコート前に集合でよくね？」

「いつもはそこでやってるのか？」

「うん。よかったら晃にも来てほしいんだけど……」

「え？！晃も来るの？ほんとに？」

「おいおいおい、ペルソナもないのに大丈夫か？」

「確かに晃のシャドウはペルソナにはできてない。でも晃は自分自身を受け入れているし、もう和解も済んでるんだ。きつと力を貸してくれると思う。戦力は多い方がいい」

「ああ、あいつならきつと嫌でも飛んでいくと思う。私も助けても

らったから、少しでも力になりたいんだ。私も捜査本部に入れてくれ。そしたら、ここ、支部につかってもいいから。私自身は戦う力は持たないけど、それ以外のことを頑張るから」

「んー、まあ神薙がそういうんならいいぜ」

「まあ、あっちの世界だと身体能力が段違いに上がるんだ。こっちで適当に防具とかあつらえておくから、いつでも来てくれ。待つてる」

「了解、リーダー」

「ね、晃」

「うん？」

「その、えっとー、あー、そのさ、よく分かんないんだけど……扱
い方とか考えた方がいい？」

「真夜中テレビ、見たんだ？」

「…………ん。ごめん」

「謝るようなことじゃない。私がこの街に来た理由は、いろいろあるけれど、きつと雪にお礼を言いたかったからでもあるんだ。正直、この2年間の高校生活を終えたなら、きつと二度と踏まない土地になると思う。それでも、こうして目を合わせて話してくれるだけでどれだけの助けになるか、きつと千枝は知らないんだろうな。ありがとう。私自身、5年もの歳月をかけて昇華してきたことでもあるんだ。すぐに結論を付けろとは言わないよ。相手に対する配慮とこ

めんなさいを言える勇気があるなら、それはきつとコミュニケーションになると思うんだ。変に身構えないでくれないか。きつと、さ、そういうことを気にせずにジョークとして過敏に反応しないでさらに笑いあえるような関係が、きつと一番いいことなんだと思うんだ」

「そっかあ……あたし、そーいうのわかんないからさ、嫌なこと言っちゃったら教えてね？そっか、わー、なんかなんか、そのあたしさ、そのー晃、ってさ、男の子なんだよね？」

「私は生まれた時からそうだよ。一度たりとも女になった覚えはないな。今は身体の性別に合わせてはいるけれど、成人したら体も手術を受けるつもりだから」

「そっかあ。……ううう、もったいない。でも、そういう場合でもないんだよね？うーん、むづかしいなあ」

千枝の眼差しは私の脂肪の塊に向かう。私は肩をすくめた。

「そーだ、晃、スリーサイズ教えてよ。そうじゃないといい感じの防具とか付けられないから」

さらりとセクハラ発言をかます里中に思わず沈黙する男性陣。ば、ばっか俺たちの前できくなよ！せめてかけよ！と赤面した花村の声が響く。花村の反応と里中の問いかけに心中複雑な私に、月森がフオローしようとしてくれるがなかなかいい言葉が思いつかず、助け船は来ない。分からない、と苦笑するとメジャー持って来いとなぜかやる気満々の里中に捕まってしまふ。チャイムが鳴るまで、私は逃げ回る羽目になった。

だいだらのおやじが待ち構えている武器屋に行くことになる。きょうは雨が降り続いている。何としても29日までには天城を救出しなくては。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6377p/>

果てしなく続く坂道の途中で

2011年10月29日13時05分発行